上郷町南条下田圃地区土地改良総合事業に伴う
発掘調査報告書

南条棚田遺跡II

1987.3

長野県下伊那郡上郷町産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

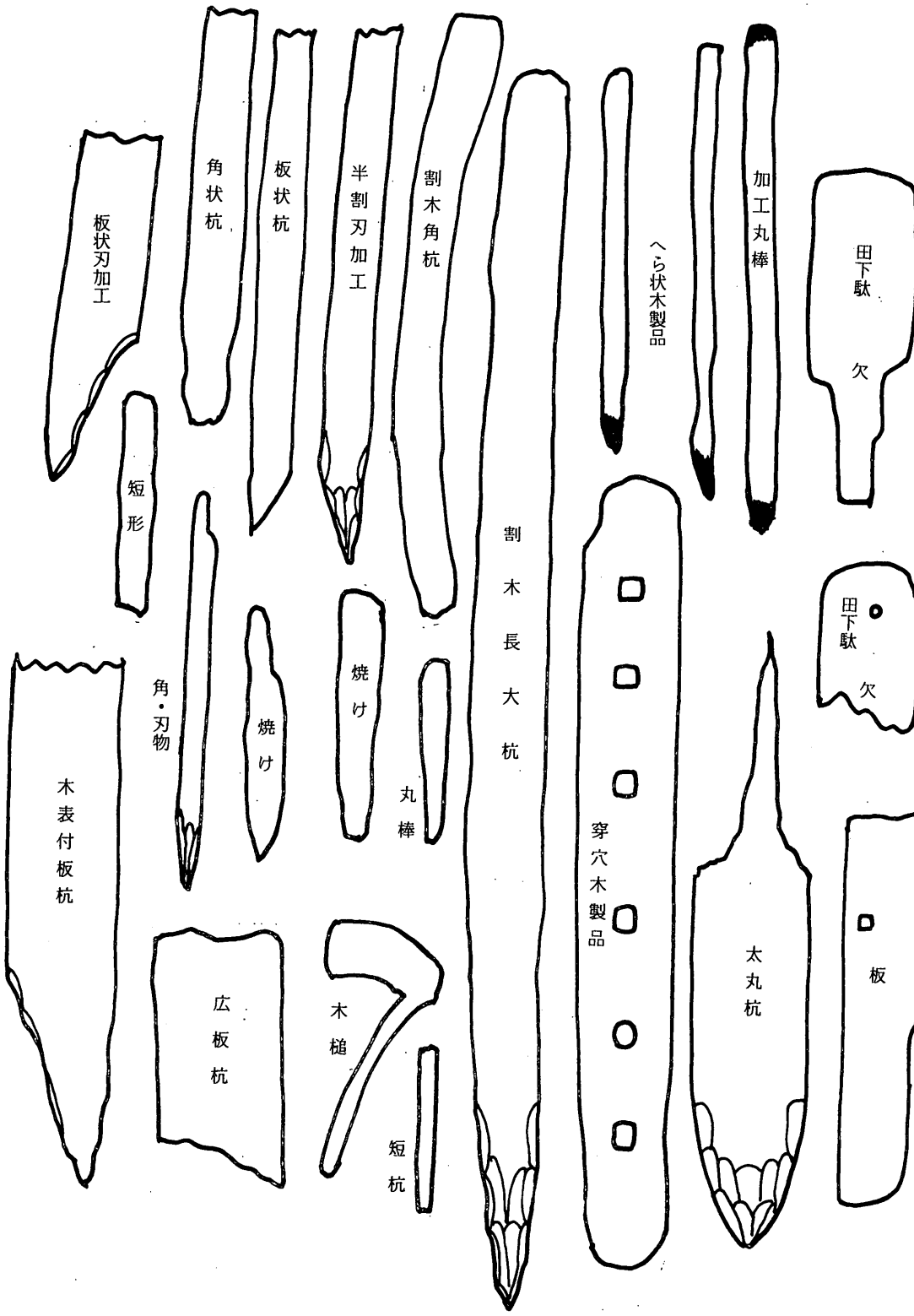
上郷町南条下田圃地区土地改良総合事業に伴う
発掘調査報告書

南条棚田遺跡II

1987.3

長野県下伊那郡上郷町産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

加工木製品・杭


板状刃加工
角状杭
板状杭
半割刃加工
割木角杭
へら状木製品
加工丸棒
田下駄
欠
短形
割木長大杭
穿穴木製品
田下駄
欠
角・刃物
焼け
焼け
丸棒
木表付板杭
太丸杭
板
広板杭
木槌
短杭

序

60年度から着手した土地改良総合整備事業南条地区も２年目に入り、下田圃工区が昨年に引き続き61年度に於て3.4㏊の区画整理を実施し、当年度でこの工区は完了することになりました。

この工区には、全国的にも稀に見る水田跡が埋蔵されており、昨年に続いて、今村善興先生を調査団長にお願いし、発掘調査を担当していただき、61年の12月初旬には発掘作業もほぼ完了し、12月９日に現地に於て、今村先生から弥生時代水田跡の在存していた状況について大勢の見学者を迎える中で説明をしていただきました。

弥生時代から平安時代にかけての水田耕作の様子が偲ばれ、現代の農耕技術に比べた時、洪水等気象条件と闘いながら、又農耕用具を考えてみるとき、古代の人々は農耕等如何に苦労されたか、想像に絶するものが伺われました。現今の耕作面下１ｍ内外のところに、このような貴重な文化財が有った事の発見は大変な喜びと驚きを感ずるものであります。

本体工事に先立って急ぐ中、又公私共に御多忙の処今村先生を始め、大勢の調査に携わられた皆様の御協力によりまして、ここに第二期の発掘調査も完了し、古代文化遺産の存在を末永く記録保存するためこの報告書が刊行出来ますことは一重に今村先生を始め作業に従事された皆様方の御尽力の賜と深く感謝申し上げ、序文と致します。

昭和62年３月

上郷町長　山　田　隆　士

例　　言

1. 本報告書は、昭和61年度上郷町南条下田圃地区土地改良総合整備事業第二期工事に伴う「南条棚田遺跡」の緊急発掘調査の報告書である。

2. 弥生時代水田跡とそれに伴う水路・溝・水溜り状遺構・杭列が主であるが、遺構毎の類別がし難いので集合的にまとめてある。必要に応じて昭和60年度のものも含めてある。

3. プラント・オパール分析結果報告は、古環境研究所の報告書をそのまま載録してある。

4. 各種木製品の製図にあたり、可能な限り複写機で写し取り加筆している。石器も一部その方法をとり加筆・修正している。

5. 本書の作成にあたり、現場での計測・記録図作成は、今村・補助員米山が、林貢・今村の協力を得て当り、杭の計測は今村、石器計測は林敏、土器拓本撮りは林貢・櫛原・今村が当り、製図は今村・米山が当っている。

6. 本書の編集・報文執筆は今村が担当した。

7. 出土遺物は一括して上郷町歴史民俗資料館に展示・保管してある。

目　　次

序　　文　　上郷町長　山田隆士
例　　言
Ⅰ　南条地籍の環境 …… 1
1.　位置と地形 …… 1
2.　歴史的環境（主として遺跡） …… 2
Ⅱ　調査の経過 …… 3
1.　調査経過 …… 3
2.　調査団組織 …… 5
Ⅲ　発掘調査の結果 …… 6
1.　遺跡の概要 …… 6
2.　遺構と遺物 …… 8
(1)　弥生時代水田跡、畦畔２・３・５と杭列１ …… 8
(2)　水路１と杭列２・３、溝５・６・７・８ …… 9
(3)　水　路　２ …… 11
(4)　溝Ｆ・Ｇ・９・10・11、杭列４・５・６ …… 11
(5)　水溜り状遺構２、杭列７・８ …… 12
(6)　溝状遺構３・４ …… 14
(7)　上段畑の遺物 …… 14
(8)　北側土層調査面（Ｔ１）・トレンチ２の遺物 …… 14
(9)　其他の遺物 …… 14
Ⅳ　プラント・オパール分析結果報告 …… 16
1.　はじめに …… 16
2.　試　　料 …… 16
3.　分析法 …… 16
4.　分析結果 …… 17
5.　考察 …… 17
図・表 …… 19
Ⅴ　調査のまとめ …… 22
1.　南条棚田遺跡と調査区の立地 …… 22
2.　中世以前・弥生時代水田跡の発見・検証 …… 22
3.　水田跡と関連遺構の杭の形態 …… 23
4.　弥生時代中期阿島・寺所式土器の問題 …… 27
5.　上郷町低位段丘Ⅱ地籍の重要遺跡群の解明 …… 27

後　　記 ……上郷町教育委員会　28

〔挿図目次〕

第１図　上郷町棚田遺跡の位置　別府・南条・飯沼面の遺跡 …… 29
第２図　南条下田圃地区土地改良総合整備事業地と発掘調査地区 …… 30
第３図　水田地周辺遺構全体図 …… 31
第４図　水田地全体の土器出土状況 … 33
第５図　畦畔２・３・５、溝Ａ１～８、水溜状遺構、水路１、杭列１～３… 35
第６図　畦畔２・３・５、水溜状遺構、水路１、溝１～８、周辺土器出土状況 …… 37
第７図　水路１・２、溝Ｆ・Ｇ．９・10・11杭列４・５・６ …… 39
第８図　水路１・２、溝状遺構Ｆ・Ｇ．９・10・11　杭列４・５・６　周辺土器出土状況 …… 40
第９図　北側水溜状遺構周辺　杭列７・８ …… 41
第10図　北側水溜状遺構周辺　土器出土状況…… 42
第11図　加工木製品(1) …… 43
第12図　加工木製品(2)と杭（杭列１）… 44
第13図　畦畔Ⅱ添いへら状加工木製品　45
第14図　畦畔Ⅱ添い杭列１の長大杭と短杭 …… 46
第15図　畦畔Ⅱ添い杭列１　水路１南の杭列２の杭 …… 47
第16図　水路Ⅱ南側杭列　杭列２、北側杭列３・６の杭 …… 48
第17図　水路Ⅱの東側　杭列４・５の杭　49
第18図　Ａ地区東と水溜状遺状２東側　杭列７の(1)の杭 …… 50
第19図　水溜状遺構Ⅱ東側　杭列７の１の杭 …… 51
第20図　水溜状遺構西側　杭列７の(2)・８の杭 …… 52
第21図　水溜状遺構Ⅱ西側　杭７の２と其の他の杭 …… 53
第22図　杭の形態分類(1) …… 54
第23図　杭の形態分類(2) …… 55
第24図　棚田遺跡　水田検出面弥生式土器拓影１ …… 56
第25図　棚田　水田検出面弥生式土器拓影２ …… 57
第26図　水田跡検出面土器拓影３ …… 58
第27図　各所出土土器 …… 59
第28図　弥生時代鍬形石器(1) …… 60
第29図　弥生時代鍬形石器(2) …… 61
第30図　小形石器と弥生時代有肩扇状形石器 …… 62
第31図　弥生時代石包丁形石器・異形石器、縄文時代石匙・石鏃等 …… 63

〔写真目次〕

写図１　南条棚田遺跡の景観 …… 65
写図２　水田畦畔 …… 66
写図３　水路１・２と北側の調査地 … 67
写図４　水路２、溝ＦＧ、溝４・９・10・11 …… 68
写図５　中央部の低湿地 …… 69
写図６　北側水溜状遺構２ …… 70
写図７　杭列１ …… 71
写図８　杭列２・３ …… 72
写図９　杭列４・５ …… 73
写図10　杭列６ …… 74
写図11　杭列７の(1) …… 75
写図12　杭列７の(2)と矢板羽目板 …… 76
写図13　杭列８と杭列の位置 …… 77
写図14　加工木製品の出土状況 …… 78
写図15　加工木製品と勾玉 …… 79
写図16　杭列１・２・３の杭 …… 80
写図17　杭列４・５・６の杭と杭列７・８の板状の杭 …… 81
写図18　杭列８の杭と鍬形石器 …… 82
写図19　石　器 …… 83
写図20　遺構全景と調査団 …… 84

Ⅰ　南条地籍の環境

1　位置と地形

長野県下伊那郡上郷町は、飯田盆地のほぼ中央に位置する。東は天竜川を挟んで喬木村に接し、北は土曽川によって飯田市座光寺に、野底川上流では高森町・飯田市松川入に境している。鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎町・旧松尾地籍とに接する26㎢に及ぶ広大な地域を示める町である。

この地域は南流する天竜川とその支流によって形成されたいくつもの河岸段丘と広大な扇状地の広がる所で、現在は飯田市に接する衛星的住宅地域として大きく発展しており、年々人口増加が著しい。この恵まれた自然環境により、原始・古代から優れた生活舞台であって後述のように埋蔵文化財包蔵地の多い地域の一つである。

伊那盆地全域に形成されている河岸段丘は、火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は、火山灰土を含む洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、火山灰土がのらない沖積土壌のみられる低位段丘Ⅱに当るものである。前二者は普通上段と呼ばれる黒田地籍の各段丘面であり、後者は下段と呼ばれる飯沼・南条・別府地籍に当る段丘面である。飯田市松尾地籍と共に低位段丘Ⅱが特に発達している地域として知られ、立坂段丘崖下に位置する立坂面に続いて飯沼面・南条面・別府面が夫々南北に横広く高低差を持ちながら東西に続き、下伊那地方の段丘模式地の一つになっている。この段丘面を南北に横切るように国道153号線が走っている。

南条面は1図のように天竜川氾濫原に接する最低位段丘で標高400～410m、天竜川河床から10m位の比高である。北の飯沼地籍土曽川右岸、農免道路周辺から別府矢崎台地先端部まで続き、高屋線上方栗沢川左岸から田中八幡社西・北一帯の上段部の一部も含まれていて、4～5mくらいの比高差をもって別府・飯沼面内に湾曲しながら続いている。これらの低位段丘は、松川左岸の別府面と土曽川右岸の飯沼面が高く、南条面がその中間に一部湾入して低地を形成し、その下段に南条面の主体があって最低位の段丘面が形成されている

これらの低位段丘Ⅱは湧水が豊富で地下水位も高く典型的な水田地帯であるが、南条面はその傾向が著しく立坂崖下から南条一帯にかけて沼沢的な低湿地が多く水田地帯の中心部でもある。反面湿田も多く大形耕作機械による現在の農作業には支障も多いため土地改良事業が計画されたとも思われる。棚田遺跡は上郷町大字飯沼の内南条下段地域にあって、最下位の低位段丘Ⅱａ1面に当り栗沢川左岸に位置し帯状に走る低湿地に東面し、天竜川氾濫原までは100m程の距離がある。

2　歴史的環境（主として遺跡）

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると埋蔵文化財包蔵地67・古墳32基・中世城跡３の合計104遺跡である。未登録の遺跡もいくらか残り、古社寺跡等も含めれば更にこの数を上回る。南条地籍には棚田・竹之内・北浦・びくに田・一丁田・藪越・雲彩寺・堀尻遺跡の八個所、古墳は天神塚・中島の二個所である。このことは地籍が狭いこともあるが、低湿地が多かったり沖積層が深く発見し難い面もあって調査によっては更に増加するものと思う。

遺跡の中心は別府面に属する藪越・雲彩寺・一丁田遺跡であるが、「北浦」（昭和59調査）・「棚田」（昭和60・61調査）遺跡の発掘調査によって低湿地遺跡の見方も変ってきた。

南の別府面は全域殆ど遺跡で別府古墳群もある。この中、栗沢川右岸の高屋遺跡は左岸の藪越遺跡と共に町内代表遺跡の一つで、弥生・古墳・奈良平安時代の重要遺跡とされている。藪越遺跡は、縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安時代・中世に至る複合遺跡で、特に弥生時代中・後期、古墳時代前・後期の遺物出土が多い。低湿地に面する所も多く古代水田跡の発見も予想されてはいるが今迄実証の機会がなかった。昨・今年の「棚田遺跡」の弥生時代水田跡の発見は、南条面のみならず飯沼面・座光寺面にかけての遺跡立地の見方も変ってこよう。北側飯沼面は古墳こそ少ないが、弥生時代から古墳・奈良・平安・中世期の遺物出土が特に多く、別府地籍と共に当町の主要遺跡地帯で郡下の重要遺跡地帯の一つとして注目されている。南条面は前述のように、別府・飯沼面に間する地域で生産遺跡地帯として注目されるに違いない。

南条はその名の如く古代条里の存在を伺えそうな地名であり、近年飯田市座光寺恒川遺跡群内に古墳・奈良・平安時代の重要遺構・遺物の発見が続き、古代伊那郡家の存在が確実視されているが、関連遺跡として同一段丘面に立地する飯沼・南条・別府地籍も又重要遺跡群と考えなければならない。古代伊那郡家がこの段丘面に存在したならば、この上郷の低位段丘面の何処かを古代東山道が通過したであろうし、郡家を支える生産基盤が上郷地域まで広がっていたであろう。古墳・奈良平安時代の生産基盤の先駆けとなる弥生時代の集落・生産地帯、特に水田耕作地帯が広く存在した地域であろう。

弥生時代の遺物包蔵地は、上郷町69遺跡中47遺跡に及び低位段丘面には33遺跡である。中・後期の時期差別は不詳であるが後期が多いであろう。座光寺恒川遺跡の調査によれば、集落立地は同一地重複の場合も僅かに所を変える例があるが上郷の場合は今の所はっきりしない。低位段丘面の遺跡中１図にある弥生時代の遺跡はドドメキ・中島・宮垣外・矢崎・高屋下・高屋・棚田・北浦・びくに田・一丁田・藪越・雲彩寺・堀尻・南原・ヒエ田・的場・西浦・ママ下・堂垣外・丹保・矢剣・長崎・藪上等で調査が進めば更に増えるであろう。

勿論水田跡の発見は「棚田遺跡」だけであるが、遺跡立地から考えれば各遺跡広範囲に互って水田耕作地とそれに関わる集落が存在するに違いない。特に湿地帯に面する地域の多い南条地籍にはその可能性が強いと思われ来年度以降の一丁田・ヒエ田遺跡の発掘調査にも大きな期待がかけられている。

Ⅱ 調 査 の 経 過

1 調査経過

昭和61年８月、上郷町産業課の事業として南条地区下田圃団体営土地改良事業総合整備開始に先立ち、同町産業課と教育委員会の保護協議が成立し上郷町教育委員会から今村に緊急発掘調査の依頼があった。なおこれより先昭和60年度中に県文化課の保護協議がなされ、国庫補助事業による発掘調査が決定されている。

昭和61年10月８日発掘資材を日影林遺跡から運搬、調査予定地域の一部が重機により掘削され調査不能個所がありその措置を教育委員会に依頼する。

10月15日山田町長・吉川教育長臨席のもと調査開始の会が持たれ、調査区のグリット設定にかかる。重機の掘削により昨年度の基準杭が消滅したので基準点を測りだし、南北方向にグリットを設定したが結果的にはやく50㎝の誤差が生じている。昨年同様南側の町道を基点にして南北50ｍ単位にＡ・Ｂ地区とし、東西列をＡ～、南北列を１～と呼称した。２図でみられるように本年度の調査地域は主として13列から西の一帯となる。南側は重機の掘削により溜り水で手がつかないのでＢ地区から南へグリット掘りを進める。10月16日には石包丁・木杭発見、17日には12列Ｃ～Ｅで石包丁・穿穴の木製品・阿島式土器片等の発見が続く。16日には県文化課小林・芦部指導主事が重機掘削現場の検証に来訪している。20日にはＤ14周辺で寺所式土器片が多く発見され、木片・植物遺体の堆積層もあり低湿地の様相がはっきりしてきた。Ｂ15で矢板材も発見され、東に木杭列の在存が確認された。

10月23日頃から冠水も無くなったので南側への排土作業を進め、昨年度検出された水路の合流点が確認され、水路を南へ追うと共に水路の東側の排土を進め、木杭列の発見と共に細い溝状遺構の存在も確認された。10月30日になって南側の水も漸く引けたので、排水ポンプを駆使しながら道路添いの排土を進め、昨年度の溝Ｂの一部と新に溝Ｃを発見したものの、重機の爪は下層の粘土質土まで達していて遺構の破壊が進んでいた。止むを得ず北側の可能な所を探しながら再び北へ向って検出作業を進める。11月１日に至り昨年度の水田面と思われる青砂の盛土（畦畔）を確認し、それに交差するもの、下層に粘土帯を持つ溝の存在を確認した。11月４日には14～17列を中心にして水路・溝・杭列・水溜り状低地等が交錯しといることが分ったので、拡幅、詳細検出作業の前に上段のグリット掘りにかかる。29～35列にかけてグリット掘りをしたが、粘土質土は浅く、累石も多く一部のグリットを除いては遺物の出土は少なかった。発見された遺物は中世陶器片・灰釉陶器片に留まることが分った。

11月５日からは検出調査に入るため、まず土層断面調査の可能地を探し道路添いの残された一部と、北へ向う土手下の部分をやく１Ｍ残してＢ地区矢板・杭列付近、Ａ地区全域の検出作業にかかる。11月６日水路１・２、Ｂ地区矢板付近の検出。田下駄発見。11月７日～10日にかけて水路・溝・Ｂ地区の水溜り状遺構の検出を続ける。

11月10日には、バックホーにより土層断面部を残して東側の排土と、事業地北地域の表土排除をする。11月12日排土作業の跡のグリット掘り。13日、A地区南の畦畔付近の検出作業。11月14日、北の田のトレンチ掘り。溝があり、そこで石器・土器片の出土はあったがごく少量であった。

11月15日からはA地区畦畔とその下層の溝、水溜り状遺構と数条の溝、水路1・2、P～V列条の掘り下げ、B地区水溜り状遺構周辺の検出作業を分担して進める。

11月21日には、長野県埋蔵文化財センターに依頼派遣された市沢調査研究員の現地指導を受け、水田跡の検討、土層の検証、プラント・オパール分析調査への準備等について指導を受ける。其後の主な検出作業、遺構の確認、主な遺物の発見は次のとうりである。

11月24日事業地北側のトレンチ掘り、少量の土器片出土。水溜り状遺構の砂質土排除、溝状の中に木片の堆積が多い。上郷小学校5年生現地見学会。11月26日、B地区北側の土層断面取りの掘削調査。北から粘土質土が緩やかに落込み、木材・植物遺体の堆積が南に多い。水溜り状遺構の東側の杭列検出、杭の一部取上げる。11月27日、水路東の溝状遺構の検出。杭列が何列かに続く。上の畑グリット掘り、遺物の出土少量。11月29日、溝9・10・11を横切る広葉樹の杭列があり27本続く。杭の腐食が著しく取り上げ不能のものが多い。その北側に大木の横倒れが発見された。

12月5日から主として杭の取り上げ作業が続く。12月5日杭列7の（1）、（2）、6の一部。12月7日、水溜り状遺構2の杭、7の（2）。12月8日、B地区A・B周辺、水路1の南（杭列2）の取上げ。なおこの日には、埼玉県古環境研究所松田隆二氏と長野県埋蔵文化財センター市沢調査研究員によりプラント・オパール分析の土層が検討され、4個所土層別に土壌採取が行われ、2月に後載の報告書が届いている。

12月9日B地区北側矢板周辺（7の2）と石列添いの杭（杭列8）、畦畔添いの杭（杭列1）、横倒れの大木の取り上げ。この日は町内に呼掛け現地見学会が行われた。見学中に杭列1の取り上げ作業を行ったが、予想以上に杭が大きく最大97㎝のものがあり、大部分が粘土質土内に打ち込まれ、粘土質も3層以上に堆積していることがわかった。この日の見学会には山田町長はじめ教育委員・文化財調査委員・教育長・教育委員会事務局員・産業課の方々ほか町民40名ほどの参加があり賑やかい見学会であった。

12月10日、北側矢板付近の残された杭の確認・取り上げ、全体測量をすませ、資材片付け・撤収をして45日に互る現地作業を終了した。

12月11日から調査補助員林・米山、整理作業員林・櫛原・今村の応援を得て遺物水洗い、注記、選別、拓本撮り、遺物実測、測量図整理、製図等の作業を進めた。とくに本年は木杭・木製品が多くその処理に時間を費やしたが、棚田遺跡の特長的な遺物でもあるためその図示に意を注いだ。1月末までに図版の作成を終り、報告書の原稿作成を終了している。

2 調査団組織

(1) 棚田遺跡調査委員会

教育委員会	委員長	北原忠夫	文化財保護委員会	委員長 小木曽英寿
〃	教育長	吉川昭文	〃	副委員長 牧野光彌
〃	委員	小室伊作	〃	委員 麦島正吉
〃	〃	矢崎和子	〃	〃 菊本正義
〃	〃	北原勝	〃	〃 稲垣隆

(2) 調査団

調査団長	今村善興（長野県文化財保護指導委員・日本考古学協会員）
調査補助員	林敏　米山義盛
協力作業員	原祐三　吉川佐一　鈴木政人　北原孝子 今村春一　向田一雄　吉川正美　小林薫 福田千八　櫛原種樹　林貢　今村倶栄
指導	長野県教育委員会文化課
協力	長野県埋蔵文化財センター松塩筑調査事務所・市沢英利調査研究員

(3) 調査事務局

吉川昭文（教育長）	篠田公平（教育委員会事務局長）
北原克司（産業課長）	中園紘（産業課耕地係長）
吉川勝一（社会教育係長）（社教主事）	今村美和（教育委員会事務局主事）

(4) 現地指導

県教育委員会文化課	小林・小林・芦部指導主事
長野県埋蔵文化財センター	樋口部長・市沢、小平調査研究員
飯田教育事務所	鈴木主任
筑波大学	岩崎教授
県史刊行会	宮下専門主事
東北大学	須藤助教授
飯田長姫高校	岡田教諭
高森中学校	宮沢教諭
富草小学校	片山教諭

Ⅲ　発掘調査の結果

1　遺跡の概要

南条棚田遺跡は天竜川最下位段丘の中央部にあり、弥生・古墳・平安時代の何れかの遺物出土・集落跡の存在が予想され、遺跡の範囲も栗沢川左岸に近い辺りと想定されていた。昭和60・61年の二回の発掘調査の結果・検出された遺物・遺構の概要はつぎのとうりである。

（主な遺構）

弥生時代水田畦畔（砂帯盛土）６、弥生時代水路２、弥生時代・平安時代以降溝状遺構19、弥生時代水溜り状遺構２、弥生時代・平安時代・中世の杭列・杭群21・中世矢板列１、近世・近代暗渠排水路10以上。

（主な遺物）

縄文時代中期土器片５、石匙・石鏃10、弥生時代中期・後期土器片やく1100点、石器やく200、弥生時代、勾玉１、古墳・平安時代土器片やく100、中近世陶器片やく80、弥生時代・平安時代・中世加工木製品やく70、弥生時代・平安時代・中世木杭350本。

（遺構の並び―南から北へ）３図ほか参照

昭和61年度の調査結果をみると、３・５図のように昨年度検出した溝Ｂに続く畦畔２・３が東に伸び畦畔と杭列１（昨年度含め18本）、その下層に交差する溝Ｃ・Ｄ・Ｅがあり更にその下層に溝１が蛇行している。すべて水田に関わるものとは思えないが、何時期かに互る水田耕作が行われたものかとみられる。此処まで来ると土器片の出土は少なくなるが、弥生中期のものが多く、石包丁形石器の出土もあり、とくに畦畔２と５が交差する辺りで発見された箆状木製品（13図・写図）のデボ状出土は特異である。昨年度の結果によると此処から南は弥生時代中期の遺物集中が予想され、杭の出土も期待されたが、重機による撹乱が進みＣの一部が検出されたに留まったのは惜しまれる。

畦畔２の北は青・黄・白砂質土の堆積が入り組み溝５・６・７・８が東西に走り水溜り状遺横１が重複し、木製品・木材の流入も多く、鍬形石器の出土の多い所であった。

その北側に水路１（５・７図）が走る。西側は水溜状になって止り、水路２と水溜り状遺構１からの溝が交差し、傾斜をみると水路１に流れ込む様相である。水路１は幅1.2ｍあって土層断面をみると人工的に掘削されたものである。木材の流入が多く、木槌（11図）・加工丸棒・杭・鍬形石器・勾玉等の発見もあった。水路１の両側には、杭列２（14本）・杭列３（７本）が並行して打たれている。

水路１から北も南と似通っているもののやや様相を異にしている。西側に水路２（７図）が南流し、東側に溝F・Gが並行している。方向を一にしないが、杭列４（５本）・５（10本）が並ぶ。水路１の北には上方から続く平安時代以降の自然流路溝３が走り、その北に溝９・10・11が東流している。とくに溝９には弥生時代中期阿島式土器片の出土が多く石包丁形石器も出ている。

3本共杭等の木材が多く含まれていた。この溝を南北に横切るように、杭列6がある。杭の数は27本と多く、内3本を除いてはサクラかシラカバ状の広葉樹と思われる素朴な木杭が並んで打込まれている。（写図・16図72・73 ）を除いては傷みが著しく取り上げ不能であったが、最も特異な杭列である。

杭列6から北は下層の粘土質土が急激に落込み、暗渠排水路辺りでは有機質の多く含まれる植物遺体・自然流木も横たわる泥質土が深い。調査区の中で黒色泥土の深い所で最も著しい低湿地となっている。そのため遺物出土があっても上層の遺構検出が困難であった。杭も散在的にあり、西側水路2に近い辺りには弥生中期北原式土器片の出土（8図）が多かったが関連遺構ははっきりしない。北に傾斜する辺りにクリかと思われる大木の横木が東に向って倒れ込んでいた。（8図）その北に畦畔状の砂盛土があり、矢板状の板（80）があったが正体を見極めていない。土層ベルトを越えた東側でも弥生時代中期の土器片が出土し、杭が数本検出されている。

暗渠排水路1辺りから北が一番低いようで自然流木の累積が目立ち遺物の出土も極少量である。暗渠1を西へ辿ると水路2と交差するが、水路2も此処で最も低く南・北から緩やかに落込み合流点の様相がある。新旧の流路が期せずして合しているのは興味深いことである。北にある流木の堆積も、中には焼け木もあり、杭状の丸木が直立しているのには注意が必要であるが見極めてはいない。東側に3本の板状杭（81・82・83）が打たれているのにも注意したい。

先の3本の杭のほか西の累石群内にも何本かの杭があり、大横木を境にして黒色泥土が浅く、黄砂の帯が目立つ。A・B地区の境辺りから累石が少なく、杭も散在的ではあるが数を増し、土器片の出土も多くなってテラス状の姿に変る。此処からを水溜り状遺構2と仮称している。

B地区一帯を水溜り状遺構2としたものの、西側は自然傾斜を持つ小高い地形。3条の砂帯が低湿地を取巻くように並ぶ。砂質も青灰色、灰白色、黄褐色と異なる。累石（礫群）は北に未調査部分を残したので確然とはしないが低地を取巻くようである。A～Dにかけては礫群が西に後退し、弥生時代中期寺所・阿島式土器片（代表的なもの2図）が多く、上層に矢板状の長大板群が、下層にかけて杭列7の（2）・8が並んでいる。暗渠排水路2によって切られているが、東側は黒色泥土が厚く穿穴の加工木製品（11図）・加工板材を始め杭・棒状（11・12図）等の木材の溜りが多い。東に砂帯を厚く堆積した溝Hに取巻かれている。南側には杭列7の（1）があって23本以上の多様な杭が入り組んでいる。杭列7（45本以上）は位置・形態的にみて同一時期のものではないと思われる。

ここから北は工事のための仮設水路が設けられているため調査不能であったが、2図にある事業地9で土層調査をしている。T1である。25Mに及ぶ土層をみると粘土質土が北で高く南で低い。このことは事業地9辺りが低いことを物語っている。水溜り状遺構2の東は低く、昨年調査地区の2図のG1の南が低かったことから南東へ向って低地が続く（2図の↙印）ものと推定される。この低地の幅・広さ等は判然とはしないが、業業地3の田の東隅に粘土質土が上層にみられることから、此処の低湿地は幅狭い帯状のように推測される。そうなると、此処の水田立地の見方も方向付けられそうに思う。

2図の事業地全体の北側、14・21の田にかけてトレンチ（T1）を設定した。2本の時期不詳

の溝条遺構があっただけである。遺物もやや摩滅ぎみの弥生時代中・後期、古墳時代の土器片が10片、石器３が出土しただけに留まっている。同一の粘土質土ではないが50～60㎝ほど下層にあり、黒色土の堆積は浅かった。西上方の畑で古墳時代の土器片１を採集しただけであった。

水田跡の西上方の畑で10個ほどのグリット掘りをしたが遺構の発見は全くなく、遺物も少なかった。弥生時代の遺物出土を期待したが、南東隅で２点、ほかは平安時代・中世の陶器片だけである。土層も黒色土は浅く30㎝ほどで粘土質土の出る所、礫群の多い所が大部分である。地形の傾斜は南東と北が低く中央部が高い。昨年度の調査区（２図Ｇ３）でみられた累石中の弥生時代中期土器片・石器出土の所はほかにみられない。低湿地に面する所には遺物があるのは下段とよく似ていて、集落を想定する様相はみられない。

棚田遺跡は南の栗沢川、北の新戸川に挟まれた低地の最低地帯に東面する傾斜地と水辺が遺跡地帯と考えられそうである。二年次に互る発掘調査に限ってみると、弥生時代中後期・古墳時代・平安時代・中世の水田耕作地とそれに関わる作業の場所かと思われるが、それが果して水田跡だけとは言い切れない要素も多い。個々の遺構に類別し難い所が多いので、畦畔状砂盛土と杭列、溝状遺構と水路、水溜り状遺構等場所別に分けて報告することにする。

2　遺構と遺物

(1)　弥生時代水田跡、畦畔２・３・５と杭列１

①　遺構（５・６・13・14・15図）

事業計画地２の南、２図のＳ１一帯の遺構である。西上方に昨年度調査の水田跡がある。西に粘土質土の落込みがあって、そこから黒色粘質土が傾斜しながら堆積し、その下層に茶褐色粘質土が東南にいくに従って深くなる。土層別の遺物包含状態は、黒色土には古墳時代後期・弥生時代後期の土器片が出土し、西ほどその量が多い。下層の茶褐色土は弥生時代中期の包含層で、南ほどその量を増す（６図土器分布）。西側から東北へ傾斜する２条の溝状遺構が地形傾斜に添って走っていた。溝Ａ・Ｂである。溝Ｂと交差するように、青灰色の砂盛土を持つ帯状の畦畔２・３が南東に伸び、この畦畔・溝Ａ・Ｂ添いに各様の杭列（合計30本）が検出され、昨年度水田跡と報告している。（５図……の西側）

本年度はこの東・南側を関連的に調査する予定であったが、重機による撹乱が進み目的の半分が果たせなかった。幸い畦畔の部分は辛うじて残っていたが、弥生時代中期の土器多出土の南は最下層面が辛うじて一部残ったに過ぎず考察にこと欠くことが多い。

畦畔状砂盛土は南東にのび８ｍ50㎝ほどは確認され、途中で南へも伸びている（畦畔５）。４Ｍほどは検出出来たがその南は不詳である。後述の溝等の状況から更に続いていたものと思う。畦畔３は２とやや方向を異にして西に伸びている。本遺跡中最も整った水田跡の遺構である。砂盛土の幅は50～60㎝、砂の厚さはやく15㎝である。畦畔２・３・５の間は東西５Ｍ、南北は西で1.4ｍ東で2.6ｍを測る。水田としての耕作面が何処であるかは摑めない。畦畔２の北には19本の杭が並ぶ。昨年調査の杭の最大は60㎝であったが13・14・15図のように97㎝を最大(7)にして60

㎝以上が５本（７・９・11・13・14）で、クリの割材で杭先の刃物加工が目立つ。鋭い刃の加工状況から果して弥生時代かと疑われるが、杭頭は砂盛土に隠れ、粘土質土中に深く打ち込まれた状態から弥生期のものとする要素が強い。畦畔２と５が交差する東側に11本の箆状加工棒がデボ状に出土している。

砂盛土の下層に粘土質土に掘り込まれた溝状遺構Ｄ・Ｃ・Ｅが南北に並行して走る。溝Ａ・Ｂと方向を一にする。Ｄ・Ｅは南で行き止るが、Ｃは道路際まで続く。中間がはっきりしないが、両側に幅６～７㎝、高さ８㎝ほどの帯を持つ。溝Ｃは北に傾斜して、畦畔３・２の下を通り北の水溜り状遺構１に通じている。杭・板等の木片の流入はＣが最も多く、石包丁形石器のほか土器片は弥生中期に限られている。更にこの溝の下に溝１が蛇行し溝Ｂ西の水溜りに通じている。幅は20㎝と狭いが深さは20～25㎝あって、植物遺体の堆積が多い。

３・５図の⊠印はプラント・オパール分析の土壌採取地点１・２・３・４を示している。

② 遺物

この一帯の遺物は、弥生時代後・中期の土器片、石包丁形石器４（31図６・12・20・22）、杭、箆状加工木製品等である。道路添いの溝Ｂでは弥生時代後期座光寺原式台付甕のほか中島式土器片が10点ほど出土し、溝Bは後期と推定できる。土器片の分布（６図）は畦畔の周辺、上層黒色土で後期中島式が出土し、粘土質土に近いところでは中期阿島式のものである。南のG21辺りで縄文時代中期の土器片（27図１～４）が出土している。箆状加工木製品（13図）が畦畔２と５の交差点東で11本（13図１～６・８～12）ほど固って出土し、その付近から４～５本出ている。（但13図７は水溜り１、17は溝Ｇ）大小いろいろあるが、ヒノキ・スギ材を割り木し楕円状に削りだし、先を刃物で加工し焼いてある。１は1.8㎝・長さ42㎝、２は29、６は27㎝で20・15㎝等のものもある。畦畔２添いに固められていたものでその用途は不明であるが、意図的に使用されたものと思われる。杭は畦畔２の東側に並ぶものと５の東に２本ある。今回13本が検出され、西の昨年度取上げた６本を含めると19本が並ぶことになる。13・14・15図のもので、１～５はクリ材割木杭先刃物加工の長大杭で、１は97㎝を測る。杭先は刃物で四面から削り出すものが多い。ここは粘土質土が80㎝以上堆積されているので深く打込まれていた。15図１・２はヒノキ、３～５はスギ材の割木で斜切断、自然の折れのものである。12のように14㎝と短いもの、更に短いものもある。

溝１から石匙・石鏃も出土している。

(2) 水路１と杭列２・３、溝５・６・７・８

② 遺構（５・６図）

畦畔２の北は上に黄・灰白、下に青灰色の砂質土が入り組んで堆積し、木材等の流れ込みが多い。溝５・６・７・８が西の水溜り状遺構１に通じている。水溜り遺構１とした所は、溝Ｂの北に続き、西は粘土質土が高くそこから急激に落込み黄砂質土・黒色土・灰白・青灰色砂質土・植物多含層等が複雑に重なり合って、径１Ｍ・深さ70㎝ほどの凹地が形成されている。そこから東へは溝５～８が繋り、北へは石敷状の溝となって水路１に落込んでいた。上層に畦畔等の遺構の

名残りはあったがはっきりしない。

水路１は溝８の北にある東へ流れる幅1.4Mほどの溝である。粘土質面から25～30㎝の深さを持ち、U字状に掘りこまれている。黒色土・灰白色の砂質土が堆積し、底には石と砂の流入が多い。西側では北に通ずる水路２が湾曲し、南の水溜り状遺構からも落込み、交差点の西は水溜り状に広まって止っており、流大木・植物遺体も積重なっている。左右からの水路２・水溜りの水が合流して東へ流れているものと思う。その裏付けの一つとして溝内の杭・板材等の木材が流路に従って横たわっている。合流点辺りを横切って、西から東へかけて幅広く流れる溝３・４があって、４と思われるのが北にある。この溝は平安時代以降の流路と思われ、水路１、２は弥生時代のもので、新旧の流れが重複していたとみられる。この左右に水田があったものと推定され、この水田地の幹線水路かとみたい。

水路１の左右に杭列２・３がある。杭列２は17～29の13本（15・16図）、杭列３は30から37の８本（16図）である。全部が直線的ではなく、直列・集合の状態等まちまちである。杭の長さは43㎝を最大にして20～30㎝のものが多く、形態もいろいろある、水路１との関係ははっきりしないが、位置的・並び方、粘土質土の高い所に並ぶ等から関連付けたく思う。

② 遺物

水溜り状遺構１、溝５～８一帯の土器片は、６図のように弥生時代後期・中期のものであるが、砂質土上方は後期、砂質土下層・遺構面は中期に限られている。25図17・18の底部も此処である。石包丁形石器も２個（31図８・23）出土し、有肩扇状形石器は溝８にあり（30図13）、鍬形石器は28図７・29図３のほか破片が多い。石器は弥生時代中期の様相を持つものが多い。木材の出土も多いが、特筆されるものは、水溜り状遺構の箆状加工製品（13図の７）、半載加工棒状木製品（21図10）である。

水路１内の土器片は弥生時代中期に限られている。（６図）。鍬形石器は28図１・５で、小形石斧30図の８も出土している。水路内ではないが、31図の翡翠の小形（1.1㎝）勾玉が交差点の縁で発見されている。木製品は合流点南溝の落際で、板材と並んで発見（写図）された木槌（11図１）、焼けの多い杭（11図５・６）、棒状・板状木製品等である。木槌は全長26㎝、槌部は13太さ6.2㎝、柄部は長さ20・太さ1.7㎝を測る。マキかクヌギの枝付材を削り、槌部の先には表皮を残し頭部を丸く加工し、柄部も丸く削ってある。出土状況から弥生時代の所産と思われる。

杭列２の東16.5㎝の20（15図８）は焼け杭で他のものは10㎝以下と短い。21～26は西側に固まり、15図６・７・９・11・12である。６・９・11は丸木使用、６の杭先は刃物加工で、南の地区では特異なタイプである。７は割り木、12は板状の杭である。その北水路縁に３本ある。15図10は丸木で刃物加工、16図１・２は割り木板杭である。杭列３は16図３～９である。３は割り木板状、４・５は木表利用の板状同一品、６～９は割り木矩形で、８は焼け・９は刃物加工で43㎝と長い。杭列３の中には杭列６の中の数本とグループになるものがあるかも知れない。

(3) 水路2

① 遺構

水路1との合流点からB地区の境まで、やく25M余に互って水辺に近い礫群の中を南北走する溝状のものを水路2とした。昨年度調査の溝Bに続いて北に続く水路はR列で合流して東側を並行する。水路1との交差点から10Mほどは水路の様相がみられるが、暗渠排水路1と合わさる辺りからはその様相がだんだん薄れていく。南側では幅80㎝から1㎞、深さ20㎝を測るが、北ほど細まり浅くなる。

② 遺物

図8の土器片分布をみると西側に多く、東側の石・粘土層に近い所から出土しているが水路2からの土器の出土は少ない。石器は南側で扁平片刃形石器（30図7）、北側で石包丁形石器（31図16）である。北側の水路の上下礫群・砂層辺りでは、石包丁形石器が3（31図1・2・25）、鍬形石器6（28図2・3・29図8・13ほか）が出土している。水路の西側に石器の出土が多かったのは、昨年の水路の場合も同様である。木材の流入は多くとくに西側に大形のものが目立つ。水路中のものでは箆状加工木製品（13図17）と半載棒状加工品（16図19）で、杭状・板状加工品もある。

なお、礫群の東は急激に落込み黒色土の堆積が厚く、下層に自然流木の堆積が多い（写図）。土器片少量、割木板状の杭の存在（18図2・3・4）はみられたが最低地の様相を示し、遺物出土が最も少ない所である。

(4) 溝F・G・9・10・11、杭列4・5・6

① 遺構

水路2の東縁は砂石が帯状にのり粘土帯を挟んで黄褐色・灰白色の砂質土の帯が南北に走る。それが溝F・Gである。幅はFが50～60㎝、Gは20～40㎝でGは蛇行しながら所々に広くて深い所がある。水の影響が強くみられる。Gは南で止りそこから溝9、10・11が東へ流れている。溝9・10は幅25㎝くらい、11は50～60㎝で深さは共に粘土質面から10㎝内外である。溝9には木材の流入が多く、弥生時代中期の土器片が多い。

溝F・G内と中間の粘土質土に水路の合流点近くから北東の方向に並ぶ杭列4（6本）、杭列5（11本）がある。その南、溝9・10・11を横切って南北方向に並ぶ杭列6（24本以上）がある。北側・東側にも散在的に杭があり、北東側に畦畔状の砂盛土と、矢板状の板木（18図1）の直立があった。三つの杭列は夫々方向も異なり、杭の形態・材質等も違いがあって何時期かに互るか、機能的に違う杭列かと思われる。北側杭列6の外れから黒色土が厚く、粘土質土が東北方向に下っていて、遺構の検出が困難であったが、水路2寄りの一帯で弥生時代中期北原式土器片が集中出土していることに注意したい。

遺構ではないが、溝11の北側に南東方向に倒れたクリの大木が黒色土中で発見された。溝G添

いに木株が残り、この木の株かと思われる。枝木は途中で断たれている様であるが、刃物痕は見当たらない。

② 遺物

この一帯の土器片は弥生時代後期・中期のもので、中期の土器片が大部分である。とくに遺構面からの土器は中期北原式・阿島式に限られる。溝9内の土器片は25図20～35で、阿島式の朱彩土器である。24図29～47は弥生時代中期北原式土器で、この地域の北側水路2寄りから北側礫群中に多い。関連する遺構の突き止めは出来なかったが、何かが有ったものであろう。石器は石包丁形石器3（31図7・17・24）で7・24は溝G出土である。鍬形石器は溝Gから28図6・8、ほかから剥片が出土している。溝Gからは小形石斧（30図3・10）、剥片石器（31図29・33）も出土している。

木製品は板・杭状のもので代表的なものは東側大木添いに板材（12図6・7）、杭（18図5）である。杭列4は17図4・5・6・7・13である。4は長さ42㎝、木表を残した板状杭で、杭先に刃物痕がみられる。5は類似品、6・7は割木角形で杭先は折れたもの、13は19㎝で割木杭先刃物加工されている。杭列5は16図17・18、17図1～3・8～12である。16図17・18は割木小杭で13㎝と8㎝で17は杭先が焼けている。17図1～3は割木太め、8は板状、9～12は割木矩・角状のもので、10本が比較的密に打たれている。杭列6は24本確認したが、取り上げられたものは16図10～16の7本である。10～12は割木角・板状で16・24㎝くらい、10は杭先が焼けている。13～15は広葉樹割木の板状のもので軟質の杭である。16は極小さい杭で杭先が芯が抜けて外側だけが残ったものである。この7本のほかは、サクラかシラカバ状の表皮を残す板状のもので、表皮だけが辛うじて残っているものである。これに似た状態のものはほかに数本出土している。材質・形態の異なる杭が密に打たれていて、構成・機能が異るかもしれない。18図1は東北の畦畔状砂盛土に打込まれた矢板状のもので、幅18㎝、厚さ2㎝ほどの割木板で、残された部分は15㎝ほどである。

(5) 水溜り状遺構2、杭列7・8

① 遺構

B地区A列北一帯は西上方から傾斜して下る転石帯の中に、地形に添って緩やかに湾曲しながら南北に続く砂質土の帯が3本ある。上方から灰白・薄茶褐色・茶褐色の砂質帯である。北側の状態は仮設水路があって確然とはしないがU字状に砂礫が取巻くようで、その内側は低く黒色泥土が厚く堆積し、加工木製品、板・杭・棒状の木材、土器片、石器の出土が多い。B列辺りには60本以上に及ぶ大小各様の杭が並んでいる、時期差・機能差異の遺構が重複している様だが・地形と形態的にみて水溜り状遺構2、杭列7の(1)・(2)、8として報告する。

図3の全体遺構図をみるとこの一帯は累石・転石の少ない所が西へ湾入している。石が少なく砂目の多い所では大形（1.5m～2m）の板状木製品が多く、土器片・石器も出土している。下方砂帯2条の間は土器片出土がとくに多く（10図参照）、弥生時代中期寺所式土器片が一個体出土している。中央3列辺りには矢板状の板材が側面的に並び、杭もみられる。そこから東には大

形の杭が数本並び、暗渠排水路２・土層ベルトを越えた所から杭の数を増している。東に向う暗渠排水路３の下から数本の杭が検出されているから杭の数は更に多かったと思われる。木材の方向も杭列に添うものが多いことに注目したい。東側の杭列７の１の北は穿穴加工木製具（11図３）大形板状木製品（12図９）、穿穴板材・加工半丸材（12図１・４）のほか棒・板・杭状等の木製品の堆積が多く溜った状態である。（本年度調査地域最多）その北側は黒色泥土・植物遺体多含土層が厚く低湿地に繋るが、幅広い砂帯が小高く堆積し水溜りが形成されている。北側は砂・石が多く、西側の累石・転石群に続いている。低湿地を東に控えて、自然か人工的かは不詳であるが、この一郭に水溜り状低地が形成され、西側の小高いテラスが何等かに使用されたところと思われる。

② 遺物

西側の転石群中には27図の須恵器片・中世陶器片のほか弥生時代後期・中期の土器片、石器では石包丁形石器２（31図３・14）、有肩扇状形石器３（30図15・17・18）、鍬形石器５（28図４・29図４・９・10・12）のほか破片６等である。矢板状遺構周辺から中では、26図40の弥生時代中期寺所式　茎部のほか中期の土器片が多い。後期の土器片は上層から出土している。石器では、石包丁形石器は東側で２（31図４・21）、鍬形石器は矢板付近とその北で２（29図１・７）、砥石（30図６）が出土している。

木製品は多い。加工木製品は土層ベルト西で田下駄と思われる板の残欠（12図1）で、長さ17㎝・幅10㎝（推定復元幅12㎝～13㎝）で不揃いであるが穴が２個ある。12図２も田下駄の壊れかと思う。長さ29㎝、幅８㎝で中央やや外れに２個の穴の痕跡がある。３・４は板状加工品で、３には四角い穴がある。長さ29㎝、幅6.5㎝くらいである。此等の木製品は、黒色土上層から出土していて弥生時代より時期が下るかもしれない。東側の水溜りでは、穿穴加工木製品（11図３）は長さ56.５㎝、幅6.5㎝～７㎝、厚さ2.4㎝～2.7㎝で周囲を楕円状に面取りし、2.3㎝の四角な穴が５個８㎝間隔に穿たれて端の穴１個には角材がはめられている。その隣に茎2.4㎝ほどの丸穴が穿たれたヒノキ材の木製具である。機織具ではなかろうかとも言われるが用途不詳である。12図の４は木表を残す丸木半載木片であるが、小口の一端を刃物加工している。５は小穴２個あけた小形板材である。９は長さ74㎝、幅12㎝、厚さ2.2㎝の羽子板状の板材である。加工木製品の中で、西の矢板状遺構は土層から見て中世以降と思われ、後述の杭の中にも時期の下りそうなタイプもあるので、中世頃のものもあると考えられる。

杭は杭列７の(1)・(2)、８、西側・水溜り散在を含めると60本以上はある。ベルト東に並ぶ23本の内、割木杭先折れのＡタイプのものが18図６～９である。６は46㎝７は44㎝で太め、８・９は30㎝ほどで板状である。19図のものは半丸・太丸の長大、Ｂタイプ（杭先刃物加工）で、８の72㎝を最長にして30㎝以上のものが多いと思う。但し４・６は割木三角状である。９の自然木使用を除いて杭先は四面から細かく刃物削りされている。長大杭で刃物削りがなされているのは杭列１にあったが、７の場合は細かく鋭い。Ａタイプは南側に、Ｂタイプは北側に並ぶので時期・機能を別にしているかもしれない。Ｂタイプの並びは非常に密である、（５図・写図）。北側水溜りにも最長46㎝、他は20㎝以下の杭が10本散在していた。（Ａ・Ｂ両タイプ）。

杭列７の(2)は西側矢板状遺構の東・その周辺のものである。20図１・６・７は割木、杭先刃物痕が僅かにみられるものである。１は37㎝を測るが他は短い。20図12、21図１・２は矢板の東・西の大形杭で、12は52㎝で21図１・２と共に四面刃物加工のＢタイプで、杭列７の(1)と同列のものとみたい。なお図示してないがこの付近では20本以上の杭が並列・散在し、土層調査の断面に杭の痕跡が残る所もあった。

杭列８は西北転石群と砂地の境に固まる杭列（９図）である。20図の２～５・８～10で、９の30㎝を最大にして割木板・矩形・角状杭先自然折れのＢタイプのグループである。その北に11が出土しているが形態は異る。

21図４～７は東の水溜りの散在の杭、12は長さ82㎝を測る杭で流入していたものである。

(6) 溝状遺構３・４

遺構と遺物（５・27図）

水路１の北に東北に流れる溝で、昨年度調査の溝３・４の続きである。本年度は下層調査を重点にしたので、上面２Ｍほどに広がる茶褐色砂質土を除去したところ下に深く落こんでいたのが溝４である。遺物は鍬形石器28図５・29図６等の流入もあった。27図６～13が土器・陶器で、５は弥生時代底・６は土師器坏・７～10は須恵器片・11は土師器底・12は国分式土器口縁・13.15は灰釉陶器・14、16、17は平安時代須恵器である。溝３・４は平安時代以降の流路であろう。

(7) 上段畑の遺物（27図・30図）

南側のＣ29グリットからの出土が多く、27図18・19の灰釉陶器（18は段皿）、30図５・９の石器、そのほか中世陶器片等の出土はあったが、弥生時代の遺物は少なかった。

(8) 北側土層調査面（Ｔ１）・トレンチ２の遺物

３図の土層断面調査地（トレンチ１）では溝状の低面が幾つか並行して並び、木材の流入がみられた。土器片が２点ほどあったが、摩滅した弥生式土器片である。粘土質土の傾斜状況・溝・木材の方向からみて南東に低地のあることを暗示している。

さらに北側のトレンチ２では、29図２の鍬形石器、27図33～35の弥生時代中期の土器片は出土しているが、共に溝からの出土である。トレンチの範囲では遺物の発見は少なかった。

(9) 其他の遺物

本年度は全域に近く表土が重機によって削り取られていたので、上層の遺物は少なかった。27図20・22・26・32の中世陶器片も出土している。29図５・14の鍬形石器、30図14・16の有肩扇状形石器等は重機による排土盛の表面で見付かったもので、大量の土の中には相当量の遺物が持込まれていたと思われる。

事業地３で水田嵩上げのため耕作土の掘下げ作業中、昨年度検出した平安時代の杭列の杭に類

似した杭が、東側でみつかっている。この作業によって、事業地３の東隅には粘土質土が耕作土下50㎝くらいで見付かっていて、地形の高さを物語っている。このことは重要な発見で帯状の幅狭い低湿地の存在を暗示している。

Ⅳ　プラント・オパール分析結果報告

―上郷町、南条棚田遺跡―

埼玉県大宮市内野本郷1089-10　古環境研究所

1.　はじめに

南条棚田遺跡では、弥生時代を後期とされる第Ⅳ層から多数の杭列と水路と見られる遺構が検出されており、水田跡の可能性が考えられていた。

これを実証するために、プラント・オパール分析による水田跡の調査を行なった。

以下に、その結果を報告する。

2.　試　料

現地調査は、昭和61年12月８日に行なった。

この時点では、第Ⅳ層（弥生時代後期）はすでに掘り下げてあり、水田面からの試料採取が不可能であったため、調査区の南東に残されていた土層断面から№１と№２の２ケ所を選定して調査を行なった。

試料は、容量50ccの採土管ならびにポリ袋を用いて、各層ごとにおよそ10cm間隔で採取した。

参考として、水田跡Ａに付随する畦畔の上面から№３、№４地点の２ケ所について試料採取を行なった。

採取した試料数は21点で、これらすべてについて分析を行なった。

3.　分析法

プラント・オパールの抽出と定量は「プラント・オパール定量分析法（藤原1976）」をもとに次の手順で行なった。

絶乾試料約１ｇにガラスビーズ混入（直径約40μｍ、約30万個）、電気炉灰化法または過酸化水素水による脱有機物処理、超音波による分散、沈底法による20μｍ以下の微粒子除去、乾燥、オイキット中に分散、プレパラート作成、検鏡・計数。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を対象に、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。

計数はガラスビーズが300個以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけ、さらに仮比重をかけて単位面積あたりのプラント・オパール個数を求めた。

このようにしてイネのプラント・オパール密度を測定していくと、水田跡が埋蔵されている層

にピークが現れるのが通例である。通常、イネのプラントオパール密度が5,000個／cc以上の場合に、水田跡の可能性があると判断している（藤原ほか1984）。

また、表1の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて植物体量を算出した。これは実際の植生を定量的に把握するのに有用である。

表1　各植物の換算係数（単位：$10^{-5}g$ ）

※藤原（1979）の第1表を一部改変

植物名	葉身	全地上部	種実
イ　ネ	0.51	2.94	1.03
ヒ　エ	1.34	12.20	5.54
ヨ　シ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ス　ス　キ	0.38	1.24	—

4.　分析結果

イネ、キビ族（ヒエなどを含む）、ヨシ属、タケ亜科（竹笹類）、ウシクサ族（ススキなど）について同定・定量を行ない、数値データを表2に示した。上記以外のプラント・オパールについては検出数が少ないため割愛した。

イネのプラント・オパール密度を土柱図の右側にプロットし、図1に示した。これは、水田跡の可能性を判断する際の基礎資料となる。土柱図内のドットは、試料を採取した位置を示している。

イネ、ヨシ属、タケ亜科の植物体生産量を図2にグラフで示した。これは、稲籾の生産総量や古環境を推定する際の基礎資料となる。土柱図左側のポイントは、最上面から1mごとの位置を示している。

5.　考　察

第Ⅳ層（弥生時代後期）は、考古学的に水田跡の可能性が考えられていたところである。同層からはNo.1地点で5,700個／cc、No.2地点で5,900個／ccのイネのプラント・オパールが検出され、ここでイネが生産された可能性が高いことが分析的にも立証された。

第Ⅴ層からもイネのプラント・オパールが検出されたが、量的にごく少ないことから、第Ⅳ層からの落ち込みと考えられる。

第Ⅳ層で生産された稲籾の総量（面積10aあたりに換算）を算出すると、No.1地点で8.4t、No.2地点で6.7tとなる。当時の年間収量を100kgであったと仮定して、稲作の行なわれていた期間を推定すると、No.1地点84年間、No.2地点で67年間となる。

ただし、これらの値は稲ワラがすべて水田内に残されたことを前提としており、株刈りによって水田外に搬出されていた場合や、その一部が堆肥などとして水田内に還元された場合は、実際の生産量とは差違を生じることになる。

第Ⅳ層の上層については、最上層までほぼ連続して5.000個／ccを越えるイネのプラント・オパールが検出された。

以上のことから、同遺跡における稲作は第Ⅳ層の時期（弥生時代後期）に開始され、最近まで継続的に営なまれたものと推定される。

◎引用文献

藤原宏志（1976）：プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―、考古学と自然科学９：15-29

藤原宏志（1979）：プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定―、考古学と自然科学12：29-41

杉山真二・藤原宏志（1984）：プラント・オパール分析による水田址の探査、那珂君休遺跡Ⅱ、福岡市埋蔵文化財調査報告書（福岡市教育委員会）第106集：５-９、11-14

藤原宏志・杉山真二（1984）：プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―、考古学と自然科学17：73-85

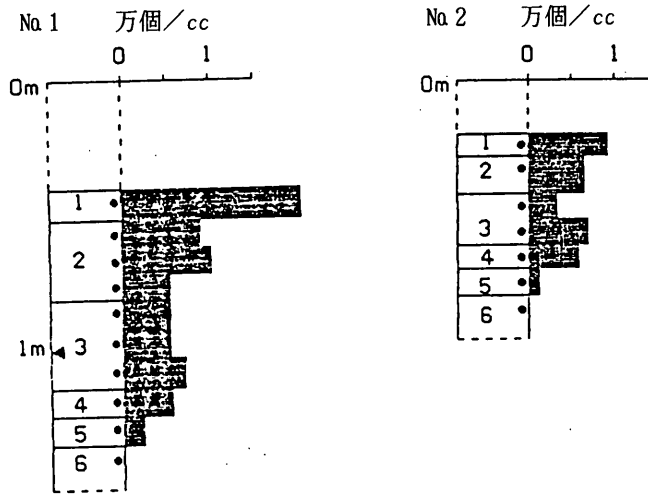
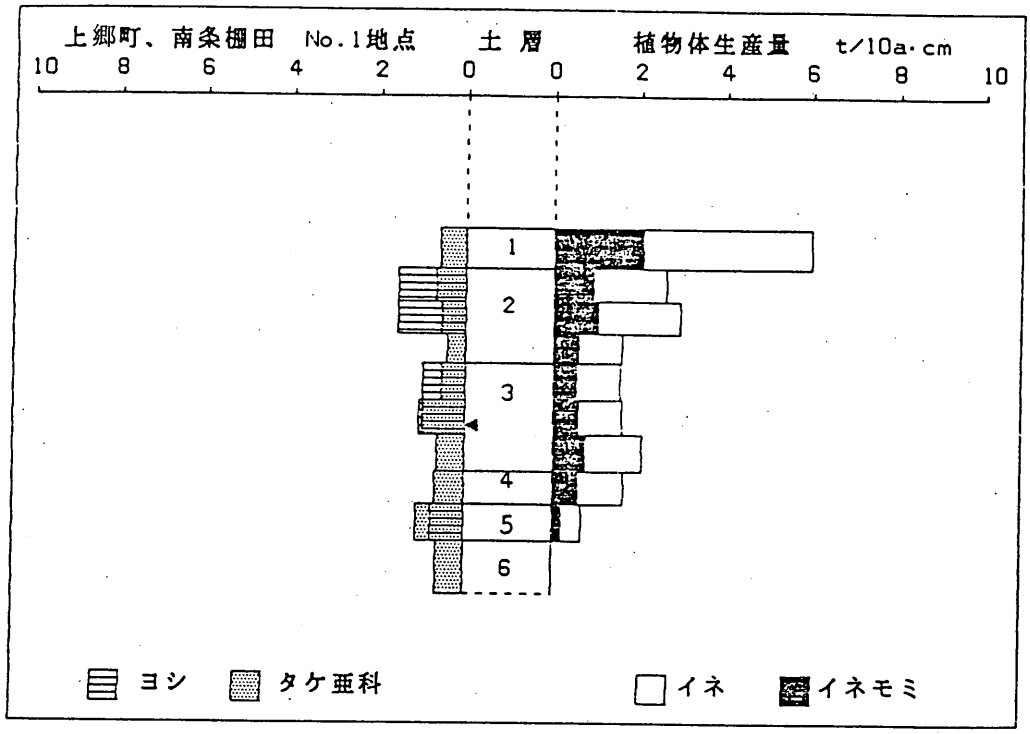


図1　イネのプラント・オパール密度

1……耕土下層　　近世陶器包含層
2……黒褐色砂質土層　中世～平安時代包含層
3……黄褐色砂質土層　平安時代頃の砂層（下部古墳時代）
4……黒色粘質土層　　弥生時代後期包含層
5……茶褐色粘質土層　弥生時代中期・縄文時代包含層
6……粘土質土層　　無遺物土層　　（以上土層　今村加筆）



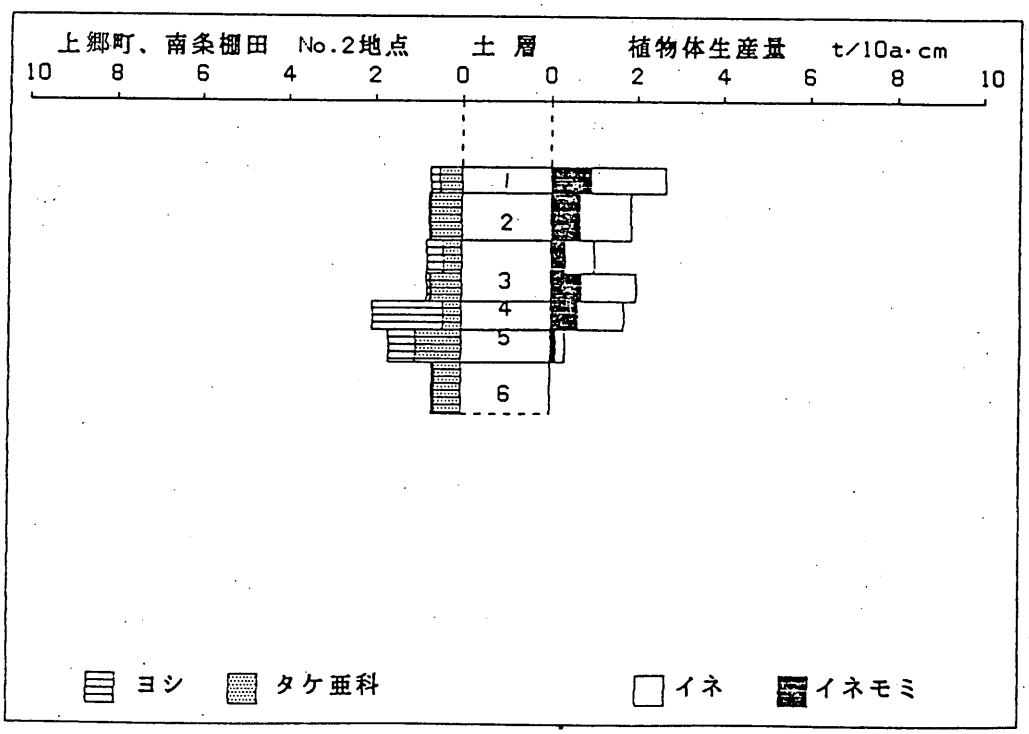


図2　おもな植物の推定生産高

表2　試料1ccあたりのプラント・オパール個数（上郷町　南条棚田遺跡）

No.1 地点

試料名	イネ	キビ族	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族
1	20,365	1,358	0	12,219	1,358
2 - 1	8,997	0	2,249	13,495	0
2 - 2	10,126	0	2,250	11,251	3,375
2 - 3	5,481	0	0	8,770	2,192
3 - 1	5,443	0	1,361	10,887	0
3 - 2	5,481	0	1,370	21,928	4,110
3 - 3	7,086	0	0	13,658	0
4	5,691	0	0	13,658	0
5	2,222	0	1,111	22,219	0
6	0	0	0	12,813	1,069

No.2 地点

試料名	イネ	キビ族	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族
1	9,081	0	1,009	10,090	1,009
2	6,394	0	1,066	14,920	1,066
3 - 1	3,409	0	1,136	9,090	0
3 - 2	6,794	0	1,132	14,719	0
4	5,872	0	2,938	8,808	979
5	1,202	0	2,405	21,644	1,202
6	0	0	919	13,788	0

No.3 地点

試料名	イネ	キビ族	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族
アゼ-ウエ	3,692	0	2,769	8,307	0
アゼ-ヨコ	2,814	0	1,876	13,134	0

No.4 地点

試料名	イネ	キビ族	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族
アゼ-ウエ	0	0	986	9,860	0
アゼ-ヨコ	1,036	0	4,142	11,391	0

V　調査のまとめ

1.　南条棚田遺跡と調査区の立地

南条棚田遺跡は最下位段丘南条面にあって、東北方に低地の水田地（現在の）があって、栗沢川左岸に面する一帯でも砂質土の堆積が厚く遺物発見が少なめではあるが、南の高屋下遺跡に続く弥生時代・平安時代の包蔵地として登録されていた。60・61年度の２回に亙る発掘調査によって、縄文時代中期・弥生時代中、後期・古墳時代後期・平安時代・中世期・近世期の遺物多量出土により濃厚複合遺跡の様相を強めている。２年次に亙る調査によって、西北上方北浦遺跡の低地から事業地の中央南部を通り、事業地９から３にかけて南方向へ続く帯状の低湿地の存在が確認されている。事業地全体を発掘調査したわけではないので推論の域を脱しないが、遺跡の中心は発掘調査地を含めて、事業地西上方１・町道の南側一帯にあると思われる。

２年次に亙る発掘調査の最重点とする所は、弥生時代の水田跡の発見・検証と、それに関連する遺構の検出であった。調査結果の報告にあるように、弥生時代後・中期の土器片、石包丁形石器等の大量出土があり、水田畦畔と思われる砂盛土・水路・北走東走の溝・水溜り状低地・何箇所かに及ぶ杭列等が複雑に入り組む中で水田跡と想定する要素が高まっていた。プラント・オパール分析調査によって、弥生時代水田耕作地と検証されたことが最大の成果である。

2.　中世以前・弥生時代水田跡の発見・検証

事業地３で昭和60年度検出された木柵杭列は即水田跡と考証し難いが、プラント・オパール分析結果弥生時代以降水田耕作が継続されたとすれば、調査地点に近い位置にあるので水田関連遺構とみられよう。伴出物から平安時代の遺構と考えられる。

事業地２（２図Ｓ１・Ｓ２）で検出された畦畔・杭列・水路等は弥生時代の水田跡に関連する遺構と考証していたが、本年度のプラント・オパール分析によって弥生時代とその以降の水田跡の存在が検証されたことは、県下初の科学的な検証であって大きな成果である。弥生中期の包含層である下部茶褐色泥土層（Ｖ層）から検出に足るプラント・オパールが検出されなかったことは、研究所の報告にもあるように、重機により重要遺構面の土層が掘り取られたことも原因の一つかもしれない。プラント・オパール分析地点１は土層が安定しているところで２地点よりプラント・オパールの検出が多いことからも惜しまれる土掘りであった。Ｖ層は弥生中期の遺物に限られ、杭の包含もあり、水田関連遺構も検出されていると思われるので、やがての機会に期待したい。

砂盛土の畦畔も何箇所かに発見されてはいるが先進地区のように複数の水田地の構成は検出されなかった。しかし、畦畔２に並ぶ杭列（杭列１）のほか７箇所以上で検出され、各種各様の杭が取上げられたことは，プラント・オパールによる検証と共に本遺跡の特長の一つである。

弥生時代水田跡が検証されれば尚更のこと、ここの水田を耕作した人々の集落の位置をしりたい。南側栗沢川に近い辺りか西南上方辺りかと思われるが、やがての機会を得てこれも検証したいことである。

3. 水田跡と関連遺構の杭の形態

22・23図は2年次に亙って発見された杭の特長的なものを形態別に図示したものである（●印60年度取上げ）。杭材の取り方を大きくⅠ「割木」、Ⅱ「自然丸木」、Ⅲ「太丸・半丸」に分け、長さで長・中・短にわけ、杭の断面を(1)角状（矩形・四角・三角）、(2)板状、(3)木表付板状、(4)矢板状、(5)焼けに分けた。更に杭先をA・自然又は折れ、B・刃物削り加工、C・刃物斜切断、D・其他に分けて並べた。

昨年度のものを杭群とし、本年度検出した8杭列の中でも杭列毎に夫々特徴があり、同じ杭列の中でも各様の杭が並んでいる。杭列としてまとめたグループが適当であろうこともないし、時期差・機能的な差異もあろうかと思う。大まかに言うと、22図全部（但59除外）と、23図51までは出土土層から弥生時代とし、23図52～58までは中世期かと思っている。昨年度検出の平安時代の杭は22図59に追加してある。

プラント・オパールが検出され弥生時代水田地と検証された畦畔2に添った杭列1も取上げた20本の内50～90㎝以上8、30～49㎝5、10～29㎝6、9㎝以下1本であり、全部割木ではあるが、断面角・板・四分丸・八分丸・焼け等いろいろで、杭先も刃物削り・斜め削り等7本、あとは自然折れである。杭列2には自然丸木刃物加工が2本・自然が1本（23図49・50・51）で丸木加工はこの列だけ、杭列3は角、杭列4・5は22図27・29の様な木表付板状のほかは、角・板の短い杭が多い。杭列6は表皮付板状（取上げ不能）が主で、中に所々角・板状がある。

杭列7には割木板・角状杭先折れのものが含まれるが半丸・太丸で長大な杭が多く、四面刃物加工の杭が多い。四面刃物加工は杭列1にもあるが削りの角度に違いがある。報文で触れたように矢板状遺構が砂質土中にあり、陶器片1片が出土していることから中世と想定され、これに関連する杭のように考えられる。杭列8には刃物加工もみられるが、22図22・23図35のような割木角・板状のものが多く杭列7の大杭とは形態が違う。

形態分類してみたものの、結論を出すまでには至らず、各種各様あると紹介したに過ぎない。今後も発見例の少ない杭のことではあるが、これを足がかりにして行きたい。

上郷町南条棚田遺跡木杭形態分類表

材 大きさ 形態	図版番号	杭先	関連遺構	材質	長×幅	断面	杭先	備考
I 割木								
1. 長大								
1		B	杭列1（7）	クリ	97×7			加分割
2		B	杭列1（9）	クリ	94×8			
3		A	(60) 9	クリ	63×12			木表材
4		D	(60) 17	ヒノキ	51.5×4			木口削
5		A	(60) 4	マツ	49×5.5			折れ
2. 中・短								
(1) 矩角・角形								
6		B	(60) 26	ヒノキ	24×3			刃物
7		B	(60) 13	ヒノキ	22×2.5			〃
8		B	(60) 12		16×3			〃
9		B	杭列3（32）	ヒノキ	43×3			〃
10		B	R14	ヒノキ	32.5×2			〃
10′		B	杭列17-(2)(114)	ヒノキ	22.5×3.5			〃
11		C	(60) 7	スギ	22×4			
12		C	(60) 8	スギ	19×2.5			
13		A	(60) 11	ヒノキ	31×2.5			
14		A	(60) 14		25.5×3.5			
15		A	杭列2（22）		21×2.5			
16		A	杭列7-(1)(95)	ヒノキ	25.5×2.5			
17		A	C14	ヒノキ	20.5×3			削り
18		A	杭列5（49）	マツ	24.5×2.5			
19		A	L18（16）	ヒノキ	54×4			
(2) 板状A								
20		A	(60) 18	ヒノキ	27×6			
21		A	杭列7-(1)(86)	スギ	29×3.5			
22		A	杭列7-(1)(91)	スギ	47.5×7			

材 大きさ 形 態	図版番号	杭先	関連遺構	材質	長×幅	断面	杭先	備考
	23	A	杭列8（131）	クリ	30×5			
(3) 板状B								
	24	A	（60）1	スギ	26×6			面削り
	25	A	（60）3		22×6.5			
	26	A	杭列5（46）	ヒノキ	16×4.5			面はぎ
	27	A	杭列4（42）		24×7.5			
	28	A	W14（82）	ヒノキ	19.5×5.5			
	29	B	杭列4（41）	ヒノキ	40.5×8			
	30	A	杭列2（27）	ヒノキ	23.5×6.5			
	31	A	杭列3（34）		26.5×9.5			
	32	A	杭列2（29）		20×6.5			
	33	A	杭列3（37）	スギ	19×7			
	34	A	杭列6（58）		19×6			
	35	A	杭列8（135）	ヒノキ	23×10.5			
(4) 矢板								
	36	A	T14（80）		16×17			
(5) 焼け								
	37	A	（60）		12×3.5			
	38	A	（60）		11×3			
	39	A			34×5			部削り
	40	A			28.5×3.5			
	41	A	杭列2（20）	マツ	16.5×2			
	42	A	杭列2（26）		13×3			
	43	A	杭列2（27）	ヒノキ	23.5×6.5			
	44	A	杭列6（62）	マツ	17×3			
	45	A	杭列5（51）	ヒノキ	13×2			
	46	A	杭列6（56）		25×2.5			
	47	A	杭列3（36）		28.5×3			
	48	A	杭列1（12）		14.5×1.5			

材 大きさ 形態	図版番号	杭先	関連遺構	材質	長×幅	断面	杭先	備考
Ⅱ 丸 木（自然木）								
	49	B	杭列2（25）	スギ	29×4.5			
	50	B	杭列2（28）	マツ	20×3			
	51	A	杭列2（21）		15×2			
Ⅲ 太丸・半丸								
1. 長大								
	52	B	杭列7-(1)(100)	クリ	34×7.5			
	53	B	杭列7-(1)(84)	マツ	36×6			
	54	B	杭列7-(1)(101)	クリ	31×7.5			
	55	B	杭列7-(2)(119)	クリ	51×7			
	56	B	杭列7-(1)(96)	クリ	53×9			
	57	B	水溜2	ヒノキ	74×3.5			丸木
	58	B	杭列7-(1)(89)	クリ	72×7			〃

4. 弥生時代中期阿島・寺所式土器の問題

阿島式土器は下伊那地方弥生時代中期中葉のもので、喬木村阿島五反田遺跡出土の土器を規範にして編年されている。しかし、阿島五反田遺跡の発掘調査は昭和34年のことであり、其後他地区の発見は散発的であって、今回の多量出土は阿島五反田遺跡に次ぐことになる。現在下伊那地方の弥生時代中期の土器編年は、林里・寺所・阿島・北原・恒川式土器と順序立ているもののその再検討が若手研究グループで行われている。とくに、本年度は、北原式土器の集中点、阿島・寺所式土器集中点があるが、全地域に亙って出土している土器片の中には、阿島・寺所式の双方に類似する土器片も多く、再検討の貴重な素材になろうかと思われる。その為にも、町道に近い南側では中期の土器がとくに集中し、弥生時代中期・後期の包含土層が厚いので（プラント・オパール検証第２地点より厚い)、集落検出・中期土層のプラント・オパール分析による再検証等、弥生時代中期の究明に重要な鍵がありそうに思う。

5. 上郷町低位段丘Ⅱ地籍の重要遺跡群の解明

飯沼・南条・別府地籍に広がる低位段丘Ⅱの面には、郡下でも有数な重要遺跡が目白押しである。同町教育委員会主体事業として実施された遺跡詳細分布調査は画期的な文化財保護事業として高く評価される。この調査に基いて町単独事業としてでも遺跡緊急発掘調査も積極的に実施されていることは有難いことである。

近年、土地改良総合整備事業、町道改良事業に先立って行われた「北浦」「棚田」「中島」遺跡の発掘調査は、この地区の遺跡立地の一端の解明に大きく役立っている。昭和62年以降土地改良総合整備事業・町道改良事業・河川改良事業等に伴う緊急発掘調査が「一丁田」「ヒエ田」「高屋」「矢崎」「兼田」遺跡等で計画されている。夫々の遺跡の持つ特質解明は勿論のことではあるが、棚田遺跡に次ぐ水田跡の発見も予想される遺跡もあり、古代水田跡の究明に好適な遺跡もある。棚田遺跡の弥生時代水田跡検証結果を足がかりにして解明の途を一つづつ辿っていきたい。この調査遂行の為にも、総合的な学術研究体制・科学的な分析調査の採用・調査委員会による将来的な企画がなされたら良いと思っている。

何れにしても、「プラントオパール」分析調査一つだけでも費用のかかることであって、その実施決定には深い理解と英断が必要で、これに踏切って下さった上郷町教育委員会、この企画をご指導下さった県教育委員会文化課・長野県埋蔵文化財センター、調査・分析に直接当って下さった古環境研究所の皆さんに支えられて報告書が刊行できることに感謝しながらまとめの筆をおく。

後　　記

棚田遺跡の保護に関しては事前に長野県教育委員会文化課と専門家の御足労をいただき協議された結果、記録保存を図ることにしたものです。

棚田遺跡発掘調査は昭和60年度に町単独事業で一部実施し、その成果は別冊上郷町南條棚田遺跡Ⅰに著しました。

今回昭和61年度の同遺跡発掘調査は前年度に引続くもので国県の補助事業として実施しました。

現地は大半が水田地であり、土地改良総合整備事業の工事を施工したのちも水田として用途されるので、発掘調査が起因して耕作に支障となることはさけなければならない事情があり、土地所有者等の承諾書をいただく段階で現状復旧の課題と施工工事との調整が必要でありました。

土地改良総合整備事業の所管する当町産業課との連絡調整については計画当初より連携をとり進めてきたところですが、一部不徹底により客土のための掘削が行なわれ当調査に大きな支障となるのではないかと心配されました。しかし影響が一部にとどまりましたがさらに緊密な連携に努め、今後遺憾のないようにすべき教訓となりました。

今回調査は前年調査済みの箇所にふれて発掘の範囲を拡大して調査し、当該地域の遺跡の状況の解明に大きな役割を果すことができたと思います。特に水田跡発掘の例は少なく、発掘調査の段階で調査団長先生はじめ調査補助員作業員の大変な苦労があったことと思います。

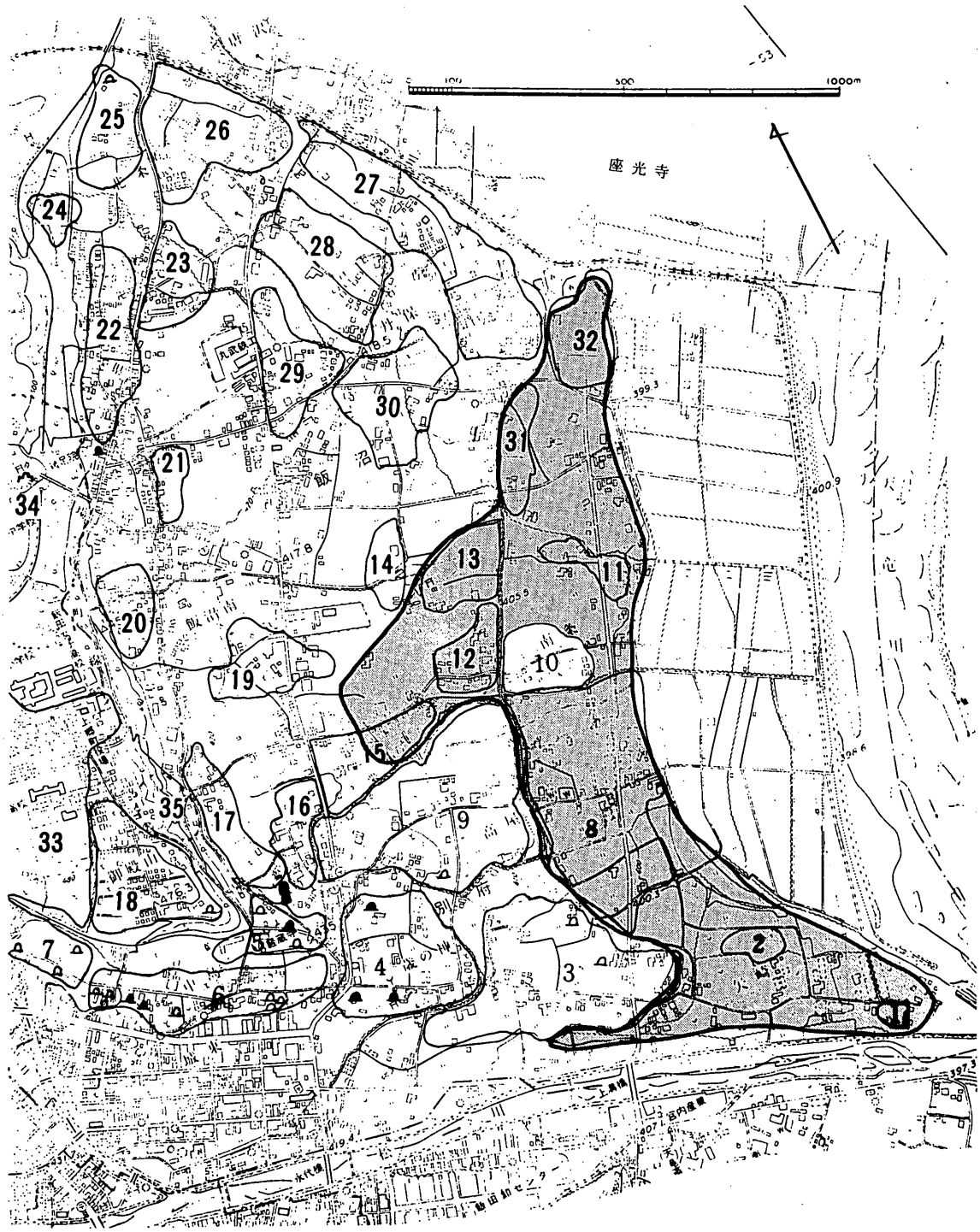
当該調査には県埋蔵文化財センター松塩筑調査事務所のご協力もいただき、プラント・オパール分析調査を導入したことも全国的にもまだ例が少ないと思われるので特筆しておきます。

ともあれ全国的にも数少ない弥生期の水田跡の出現と検証は極めて重要な意義をもつものと考えられ、当報告書に記録できたことは誠によろこばしいことです。これ等調査の結果や遺物は後世のため学術資料としても大切に保存しなければなりません。又当調査は考古学の上からも大いなる貢献であると確信します。

あらためて当調査に献身的にあたられた今村調査団長はじめ調査補助員、作業員の皆さん、県教委文化課、県埋文センター調査研究員の方々等多くの職員のご指導とご尽力、さらに土地所有者等の方々の御理解とご協力の賜物であり深甚の感謝を申しあげます。

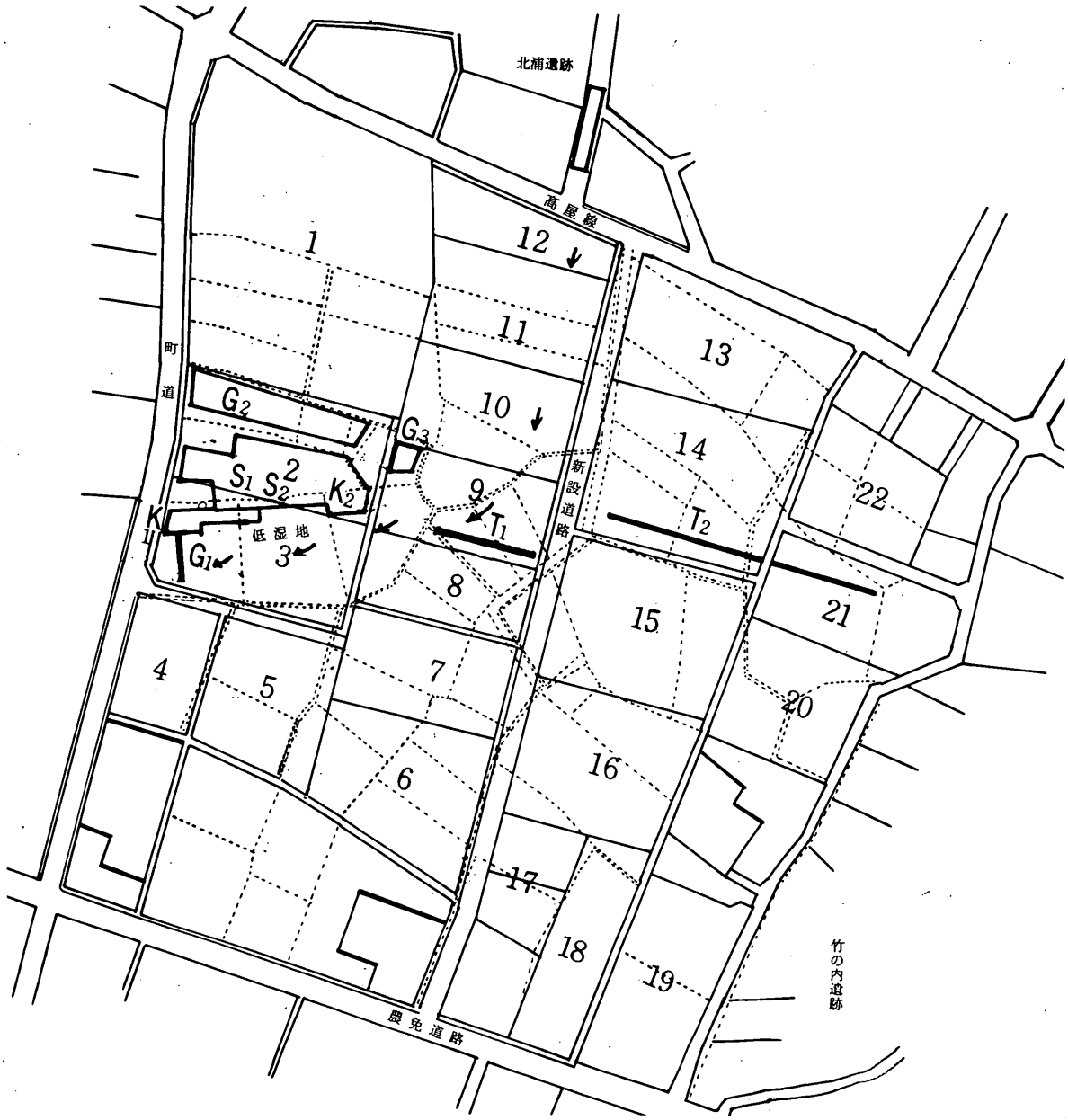
昭和62年３月20日

上郷町教育委員会



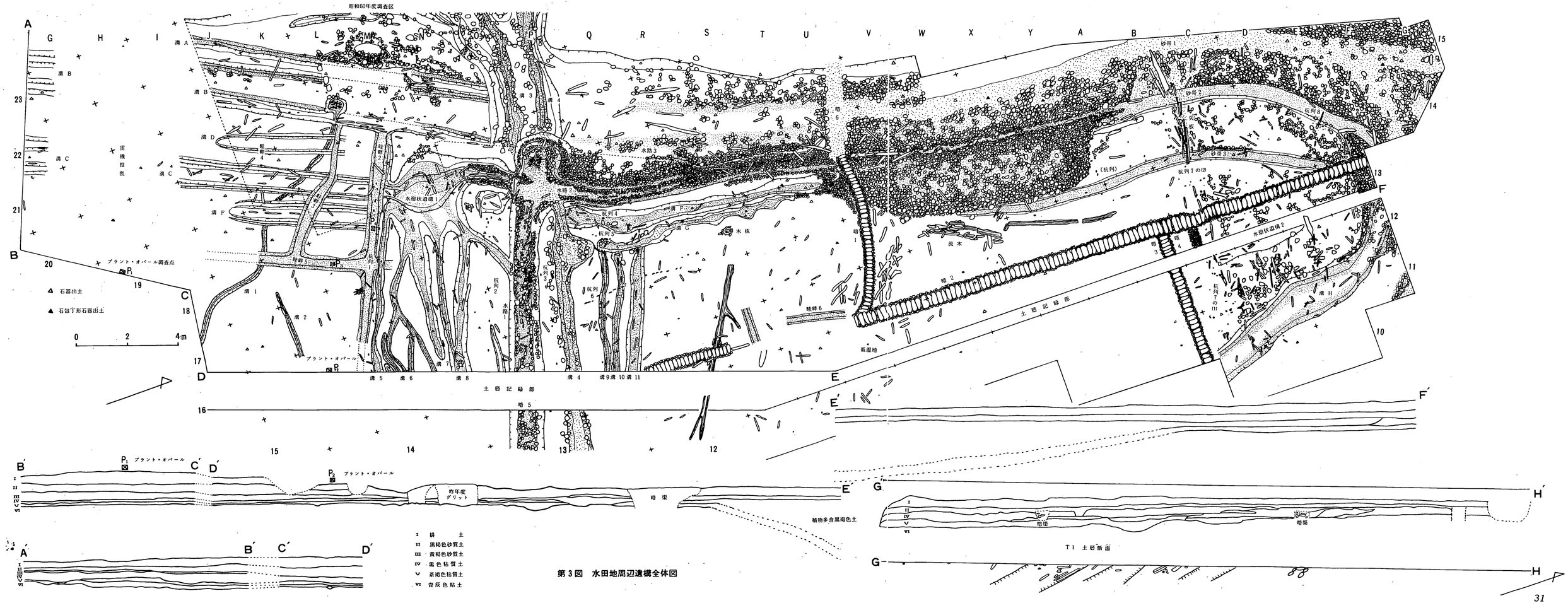
1. 渡場　2.兼田　3.矢崎　4.宮垣外　5.化石　6.中島　7.ドドメキ　8.高屋下　9.高屋
10. 棚田　11. 竹の内　12. 北浦　13. びくに田　14. 一丁田　15. 藪越　16. 雲彩寺
17. 堀尻　18. 南原　19. ヒエ田　20. 芝崎　21. 御蔵前　22. 的場　23. 釜の口
24. 院下　25. 西浦　26. ママ下　27. 堂垣外　28. 丹保　29. 矢剣　30. 橋爪
31. 長橋　32. 藪上　33. 高松原　34. 飯沼城　35. 古城

第1図　上郷町棚田遺跡の位置　別府・南条・飯沼面の遺跡

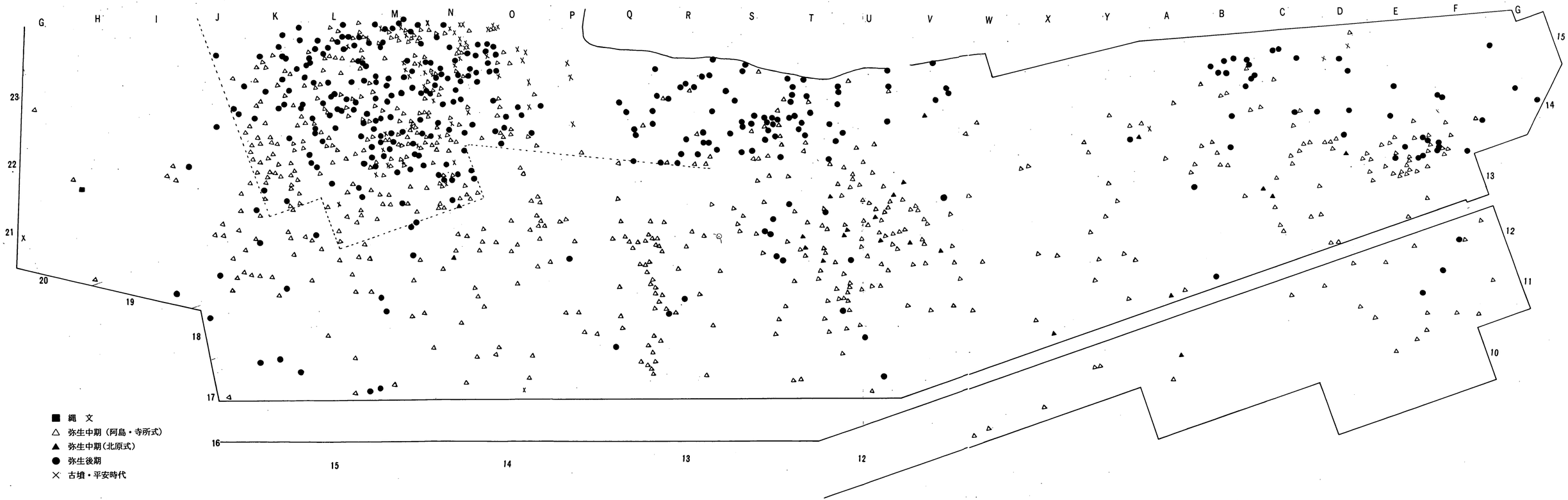


第2図　南条下田圃地区土地改良総合整備事業地と発掘調査地区

南条下田圃地区土地改良総合整備事業は昭和60・61年度にかけて施工された。区画の番号は改良田の位置、……は改良前の田区画である。発掘地は太線でしめし，G1は60年度のグリット、K1は平安時代木柵列。S1・S2は本年度調査の水田跡・水路等、K2は杭列7等を示す。G2は上段グリット、T1・T2は北側のトレンチである。←印は予想される低湿地である。

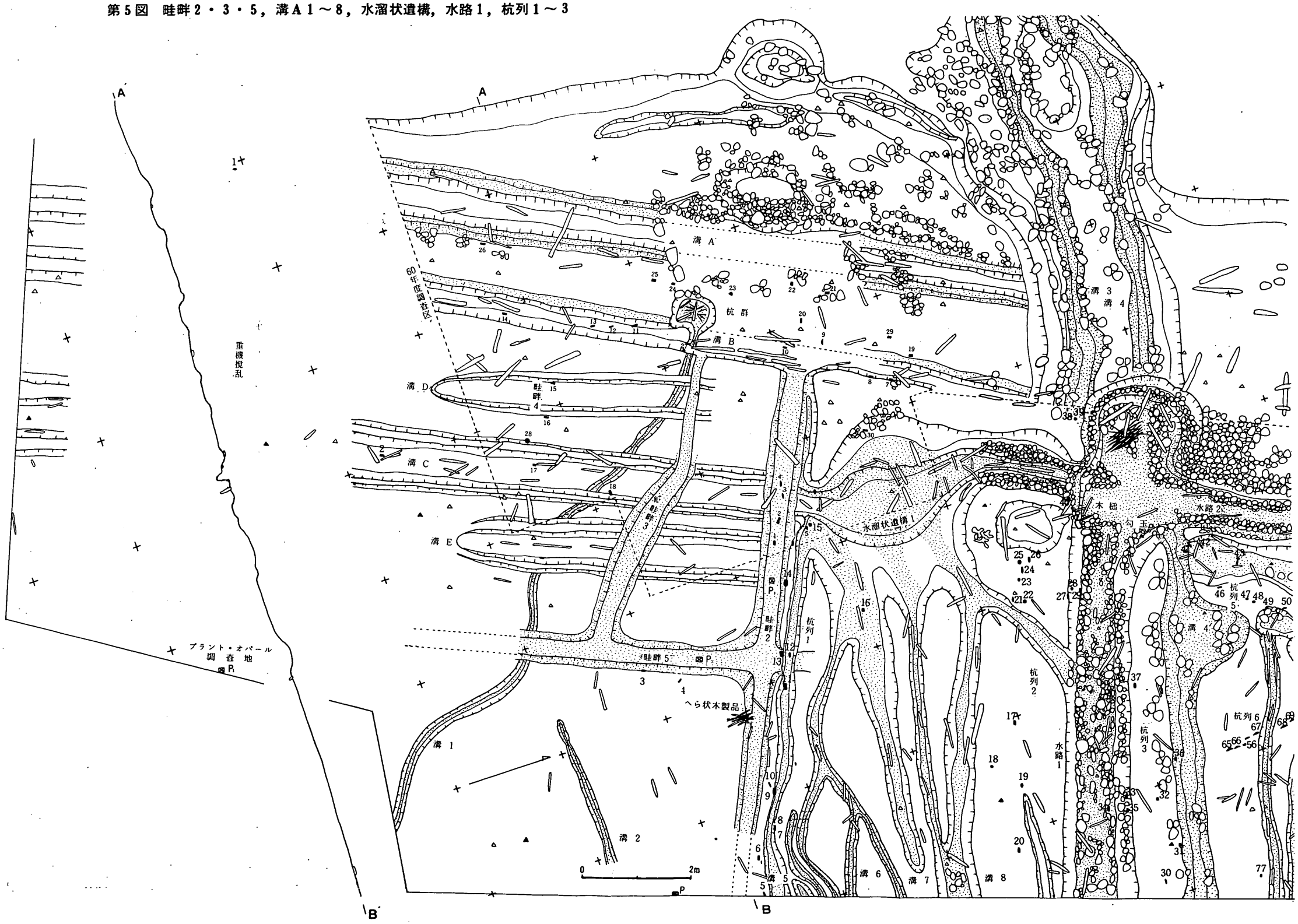


第3図 水田地周辺遺構全体図

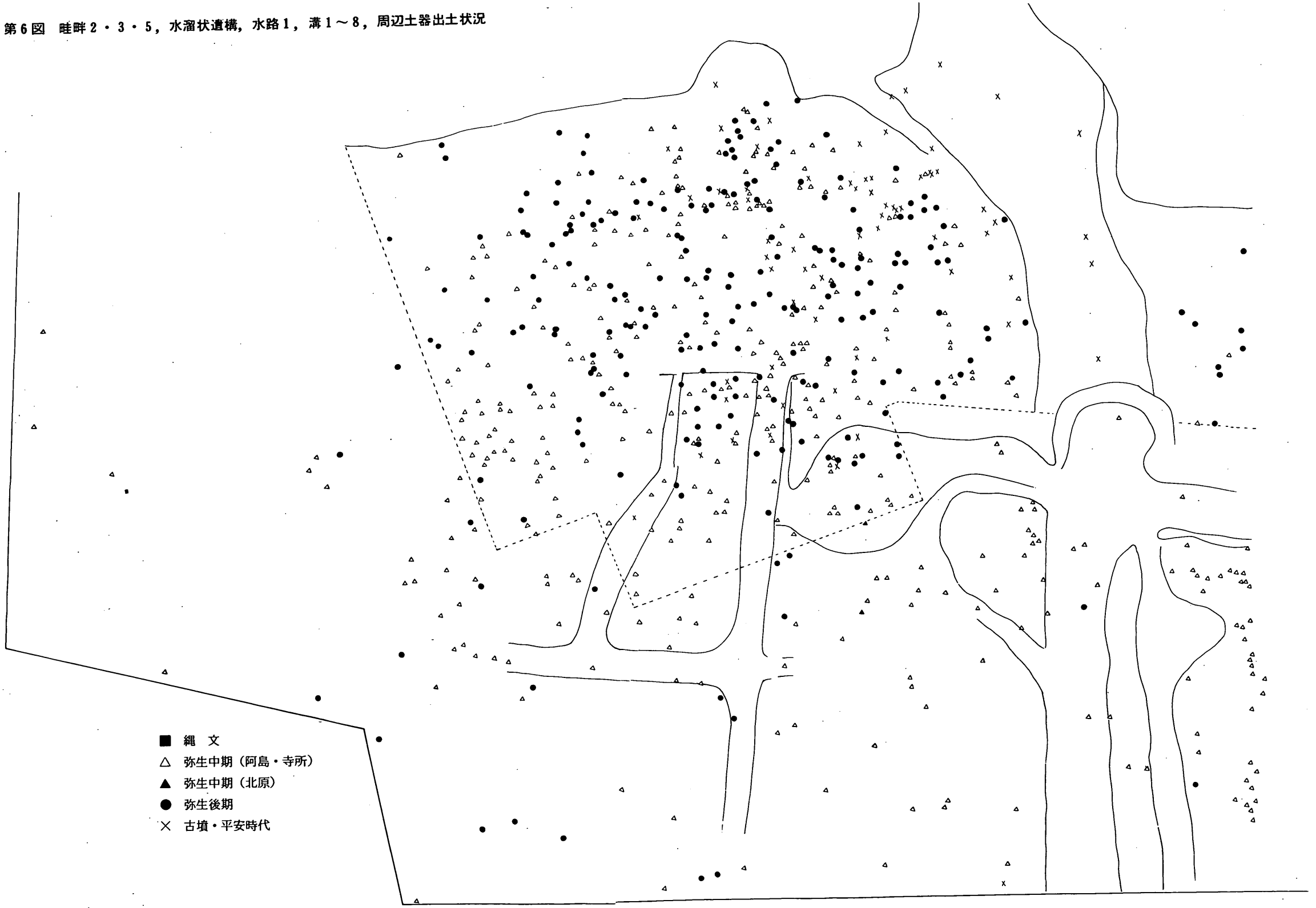


第４図　水田地全体の土器出土状況

第5図　畦畔2・3・5，溝A1～8，水溜状遺構，水路1，杭列1～3

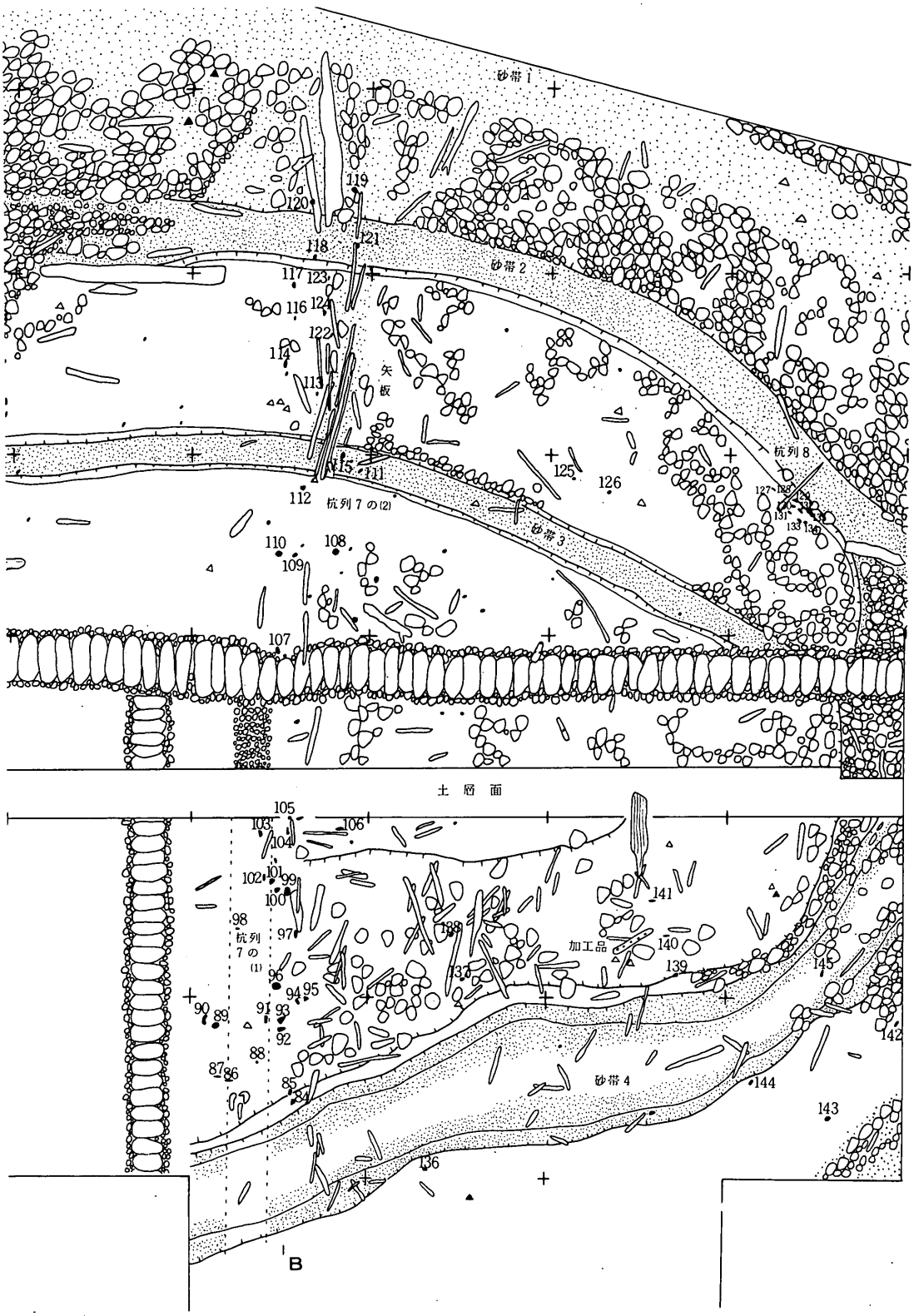


第6図　畦畔2・3・5，水溜状遺構，水路1，溝1～8，周辺土器出土状況

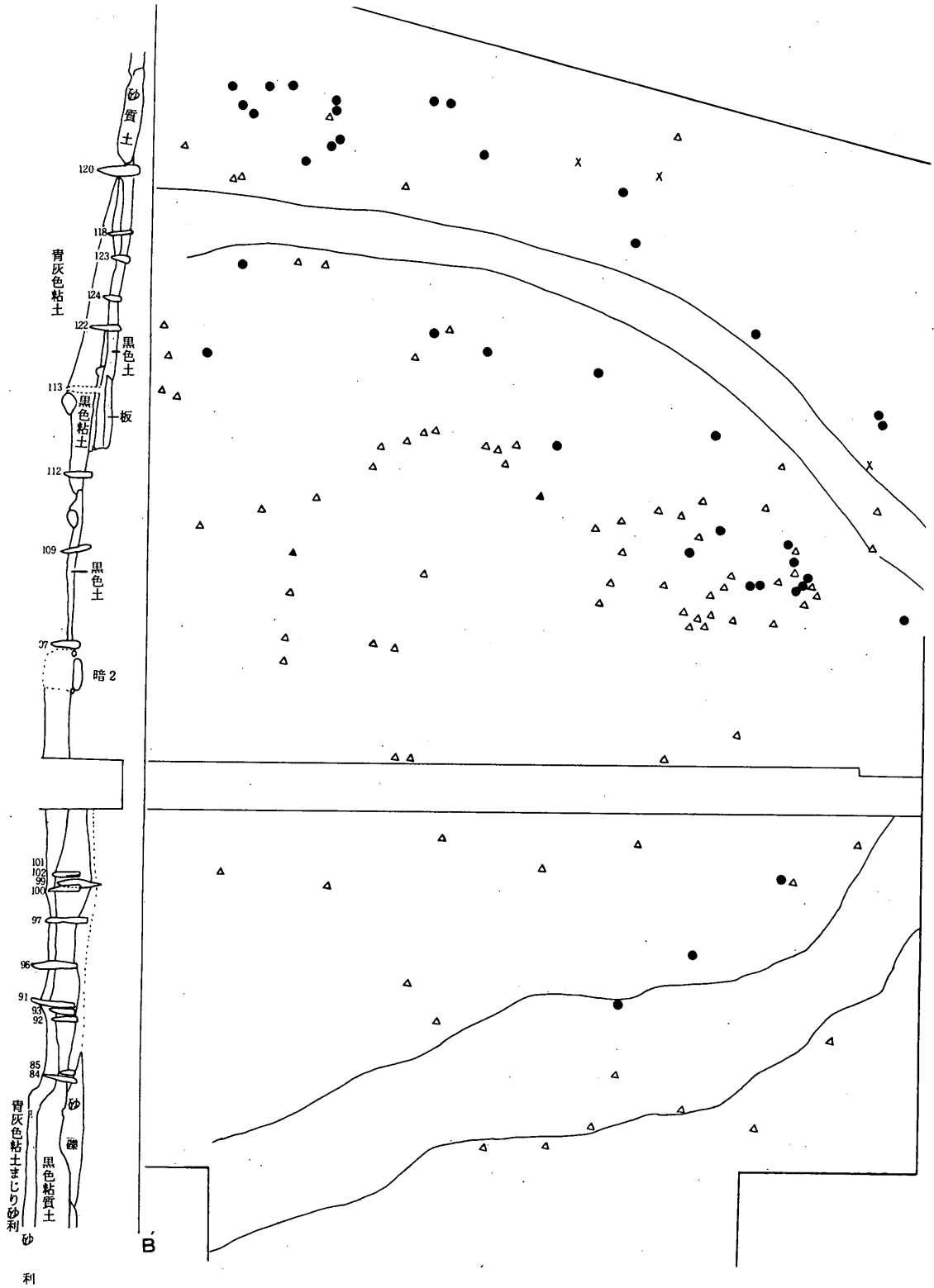


第7図 水路1・2 溝F・G. 9・10・11 杭列4・5・6 (1:70)

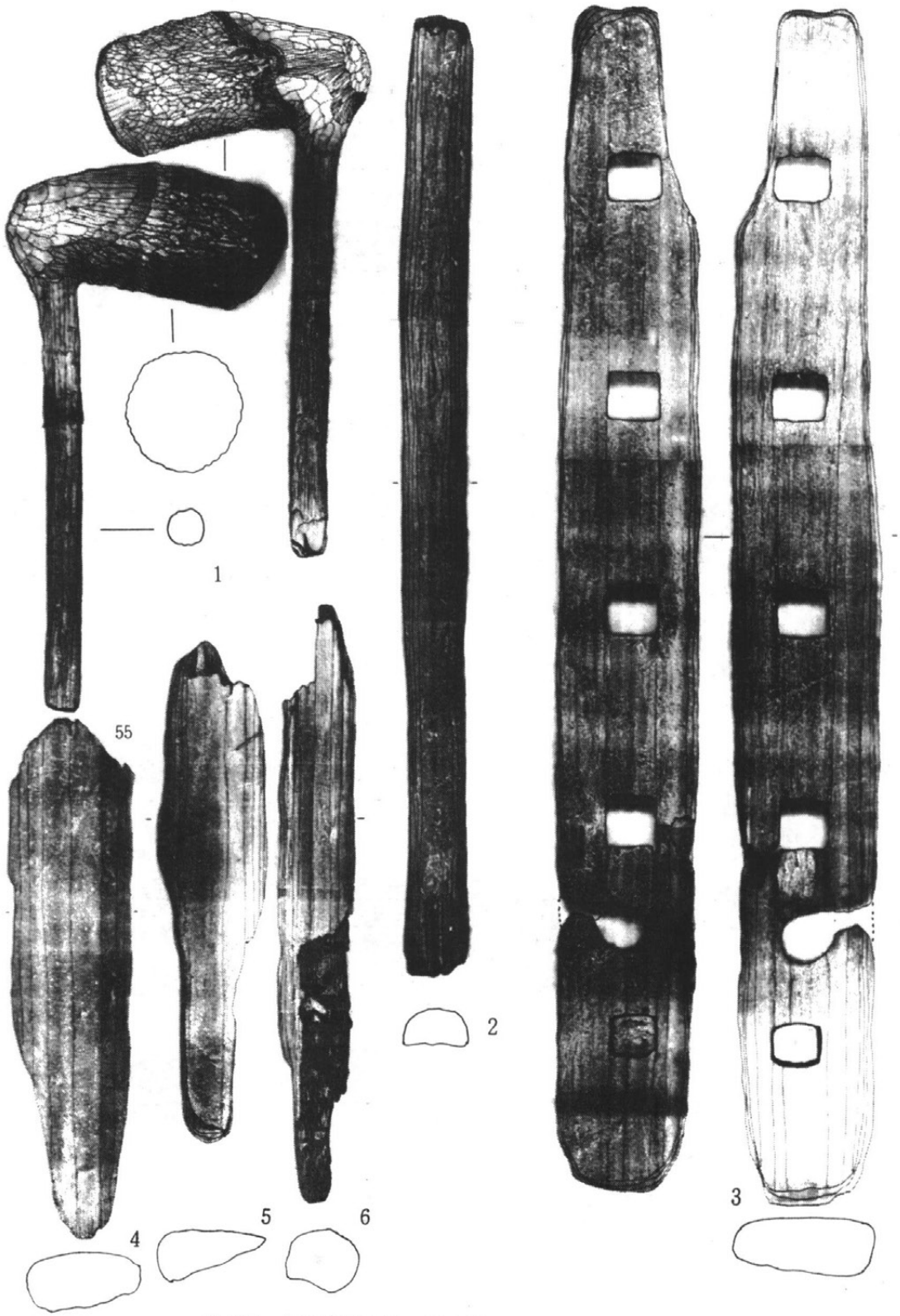
第8図　水路1・2　溝状遺構F・G．9・10・11　杭列4・5・6
周辺土器出土状況　（1：3.5）



第9図　北側水溜状遺構周辺　杭列7・8　(1：70)

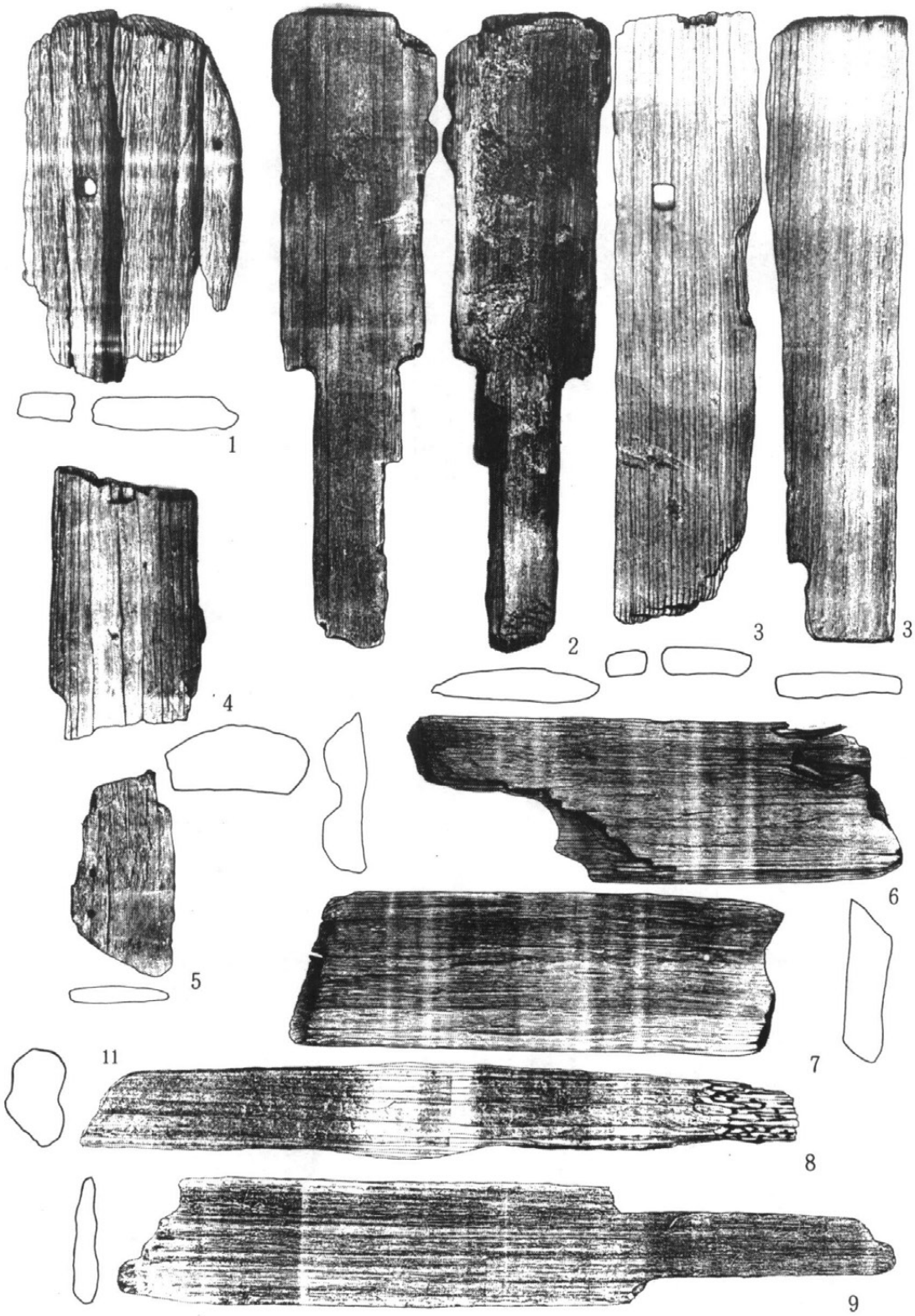


第10図　北側水溜状遺構周辺　土器出土状況



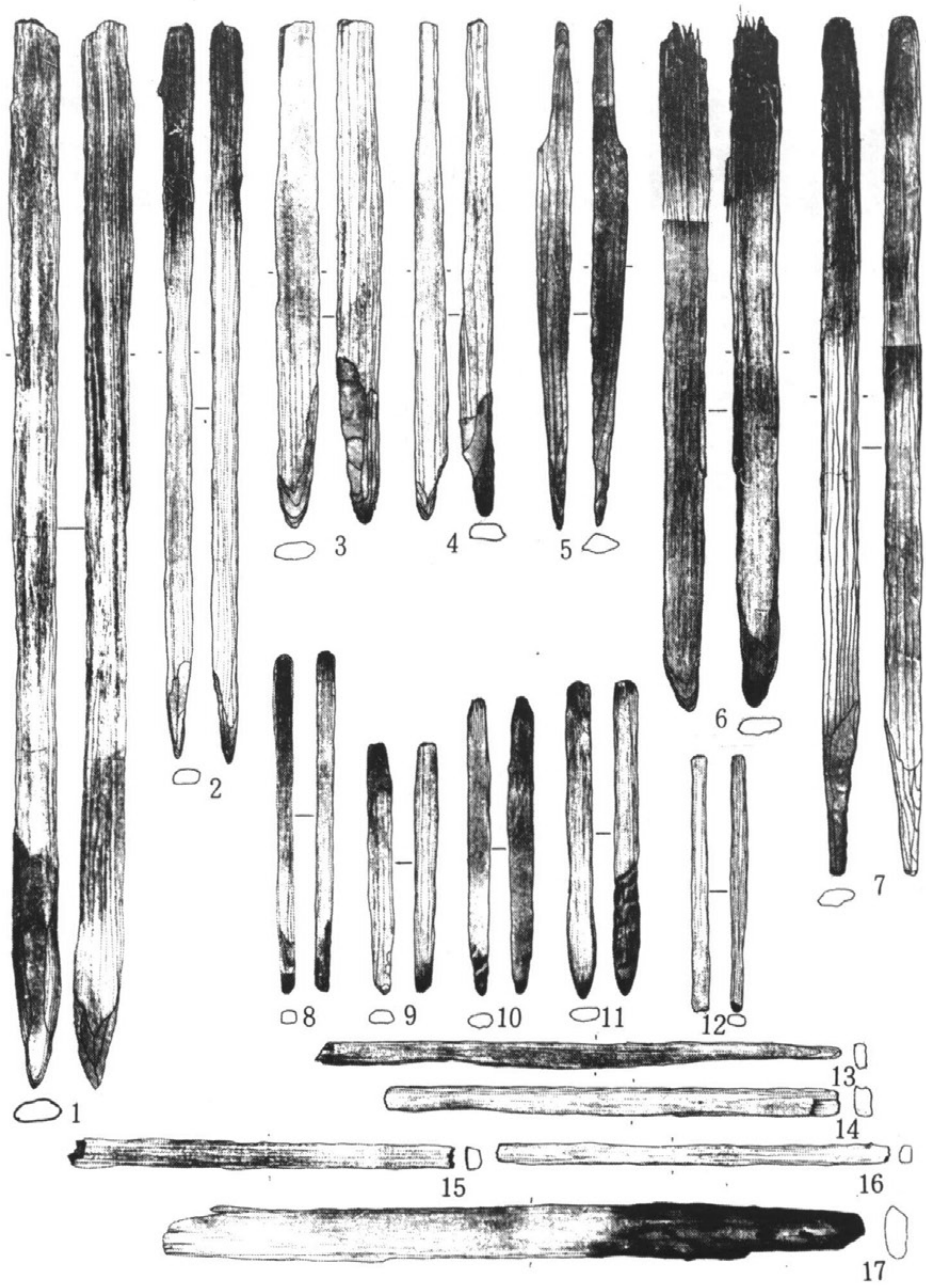
第11図　加工木製品(1)　(1：3)

1・2　水路　　3　水溜状遺構1　　4～6　焼杭

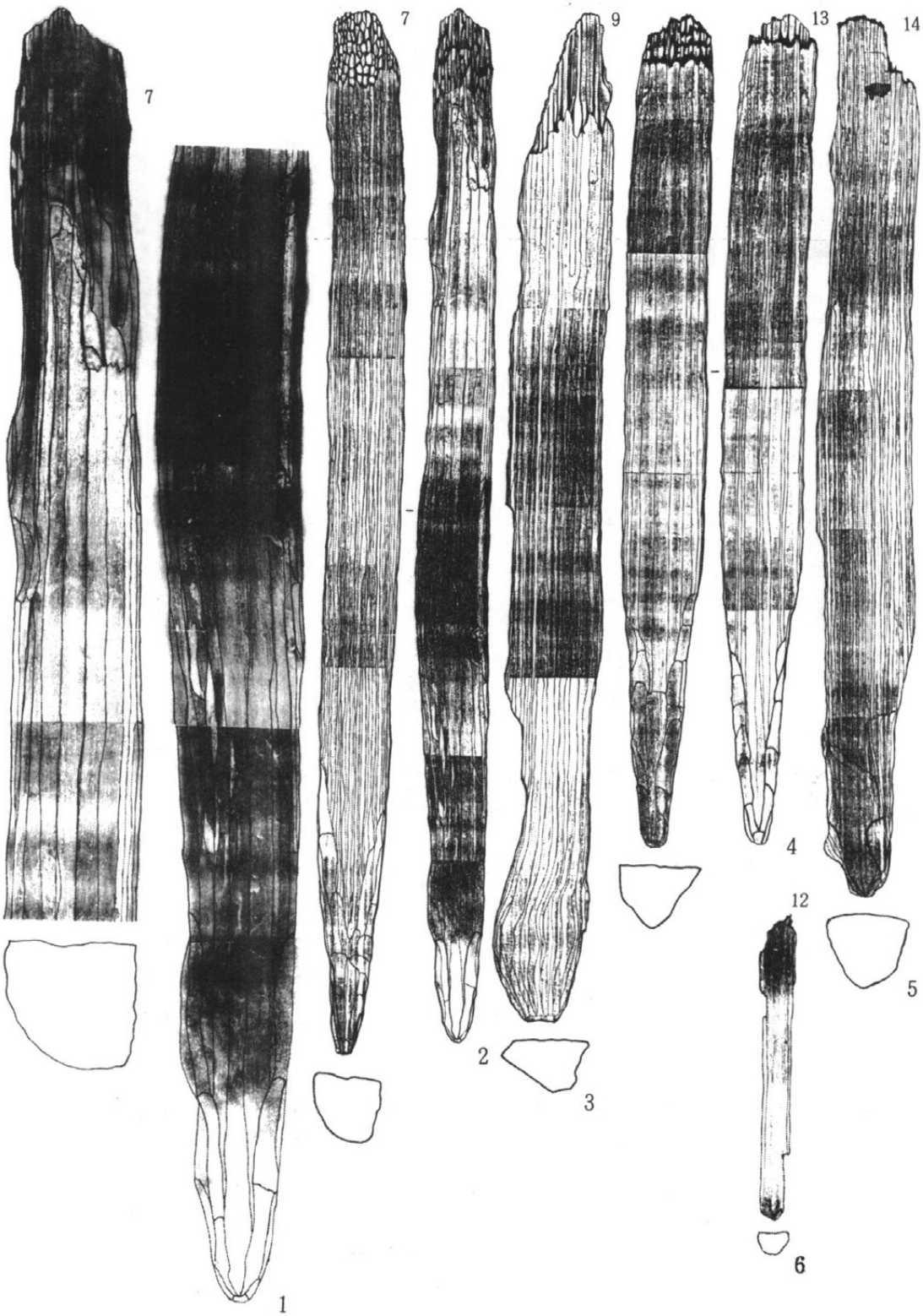


第12図　加工木製品(2)と杭（杭列１）　（1～7　1：3　8・9　1：6）

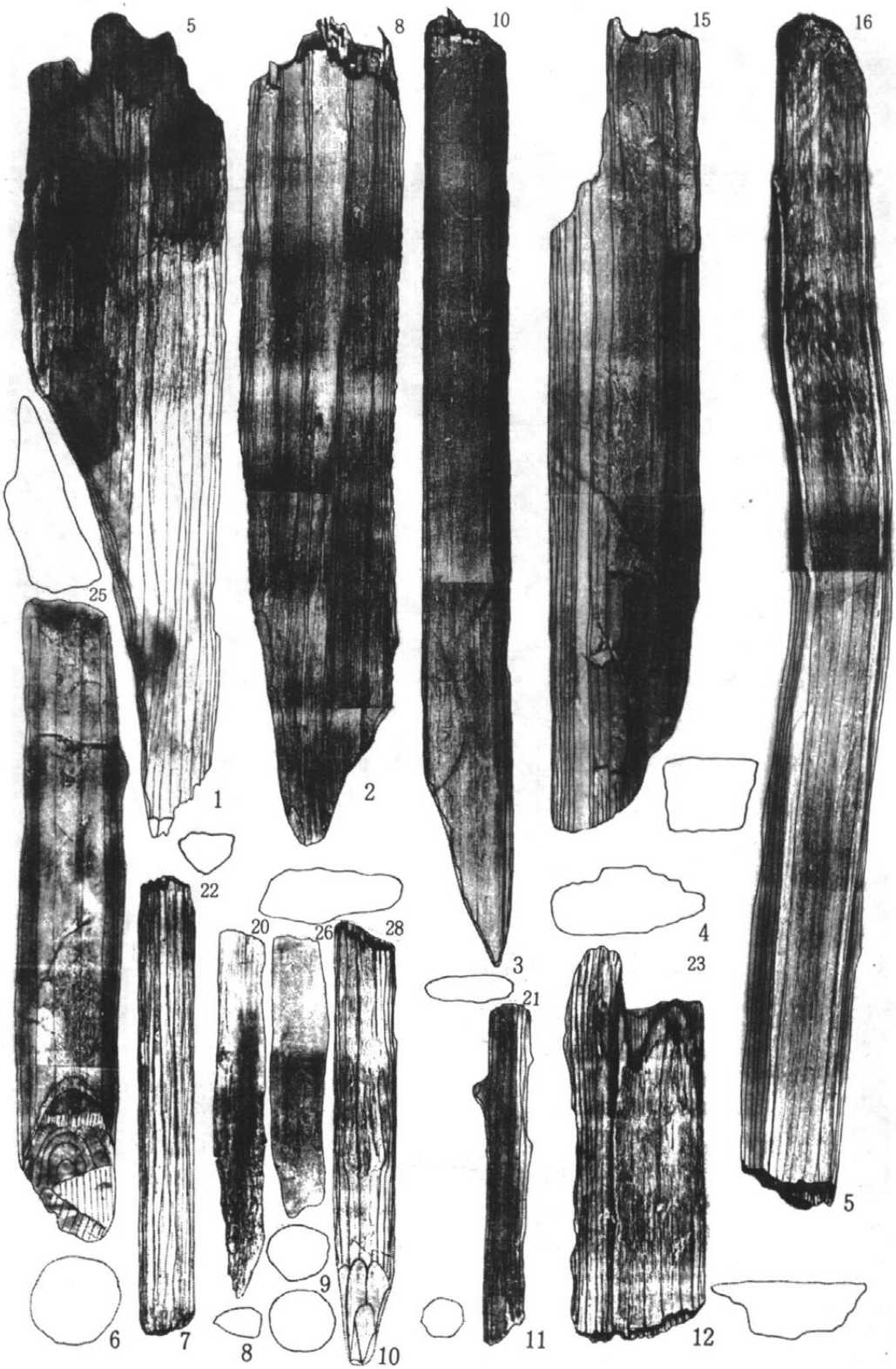
1～5・9　水溜状遺構２　6・7　大木横　8　杭列１



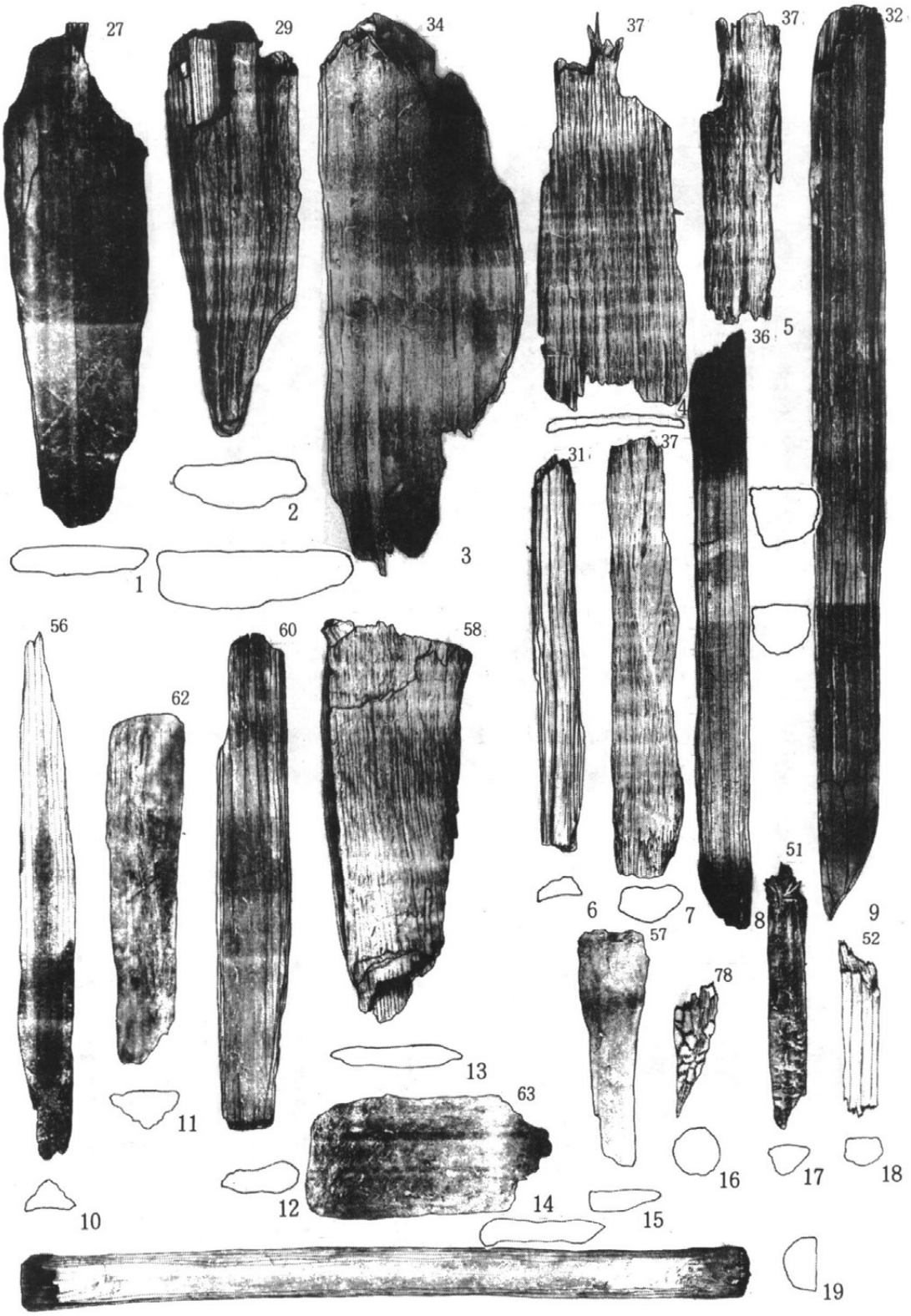
第13図　畦畔Ⅱ添いへら状加工木製品　（1：3）



第14図　畦畔Ⅱ添い杭列1の長大杭と短杭　（1・6　1：3　2～5　1：6）

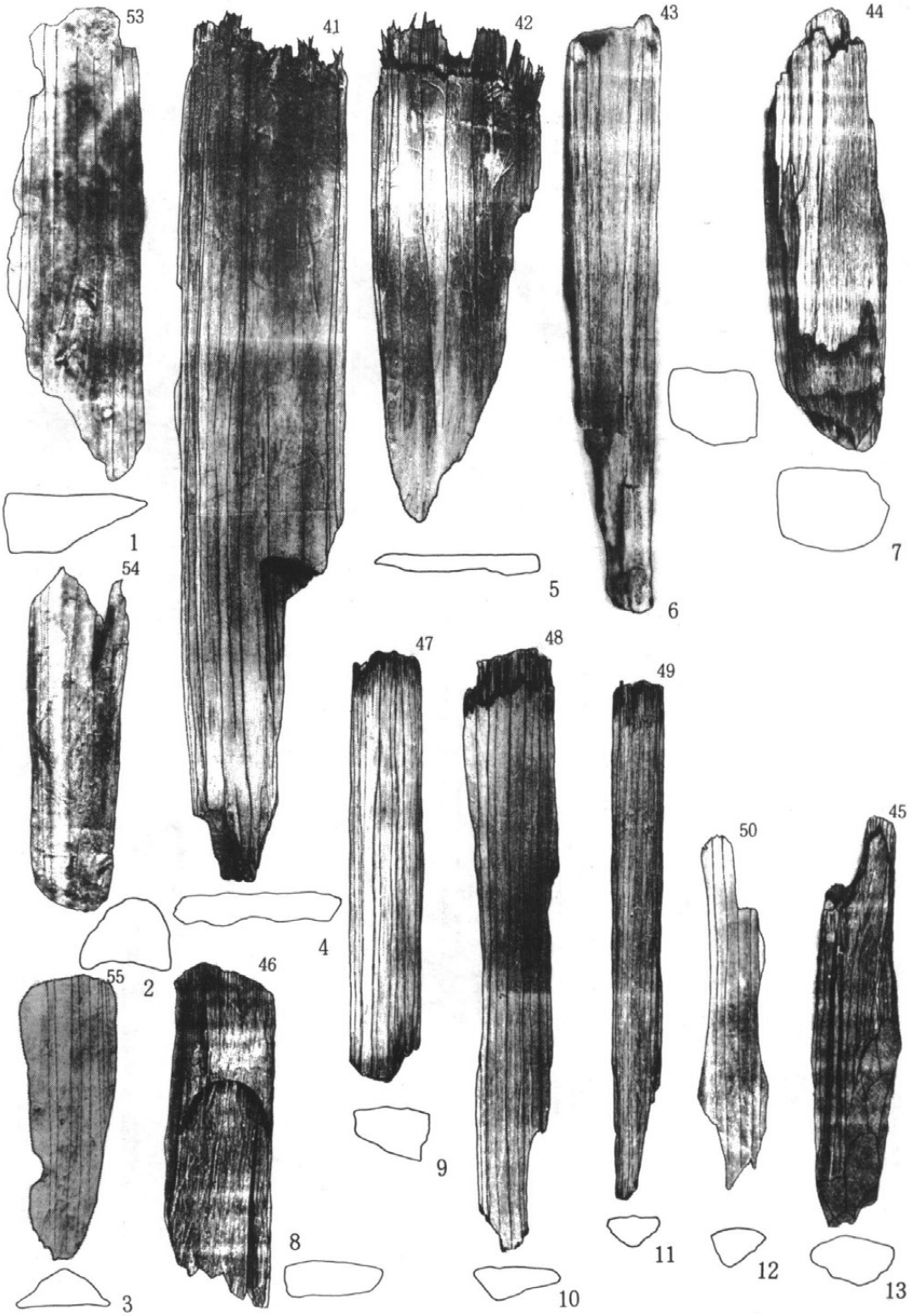


第15図　畦畔Ⅱ添い杭列 1（1～5）水路 1 南の杭列 2（6～12）の杭　（1：3）



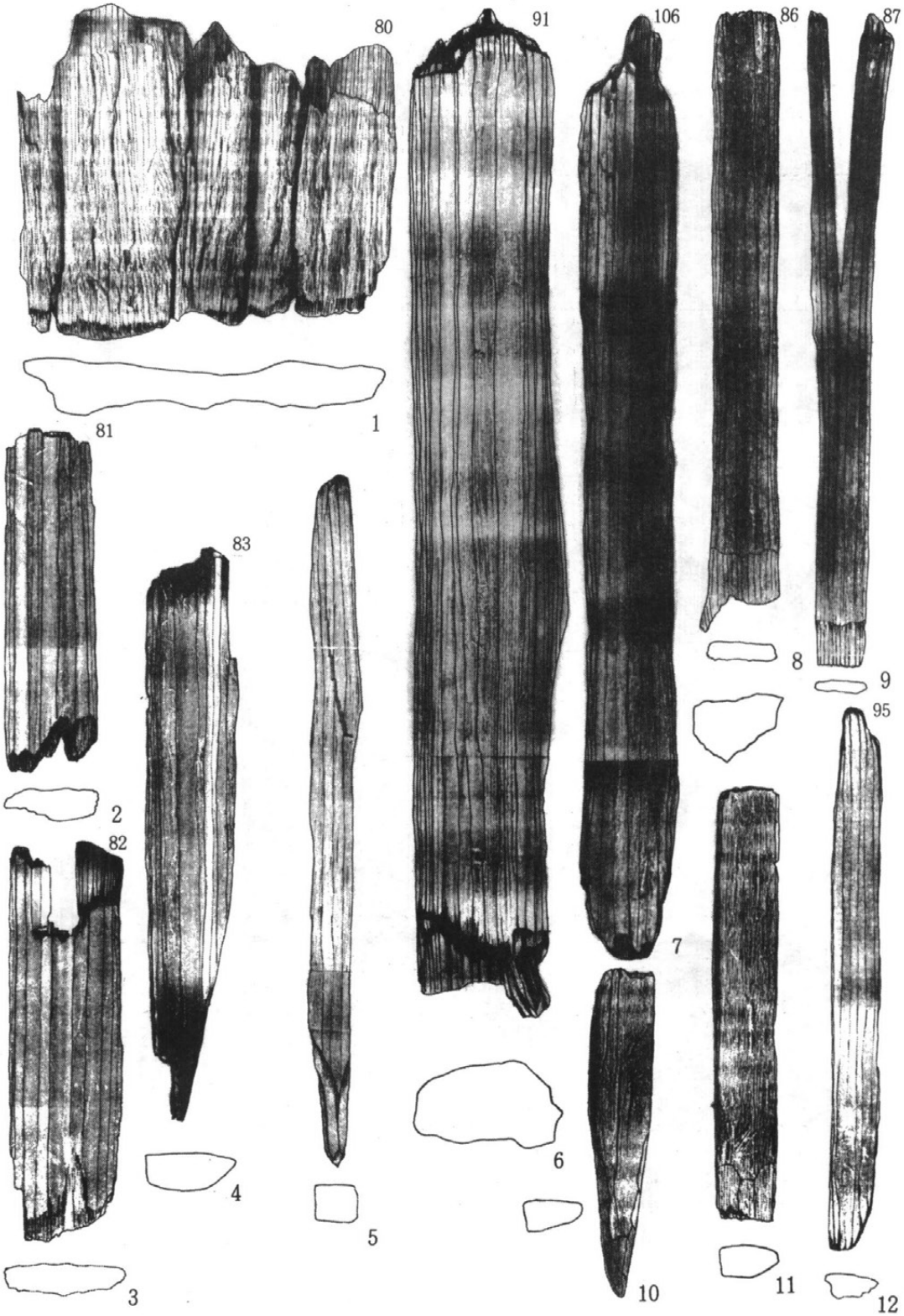
第16図　水路Ⅱ南側杭列　杭列2，北側杭列3・6の杭　（1：3）

1・2は杭列2　3～9は杭列3　17・18は杭列5　10～16は杭列6



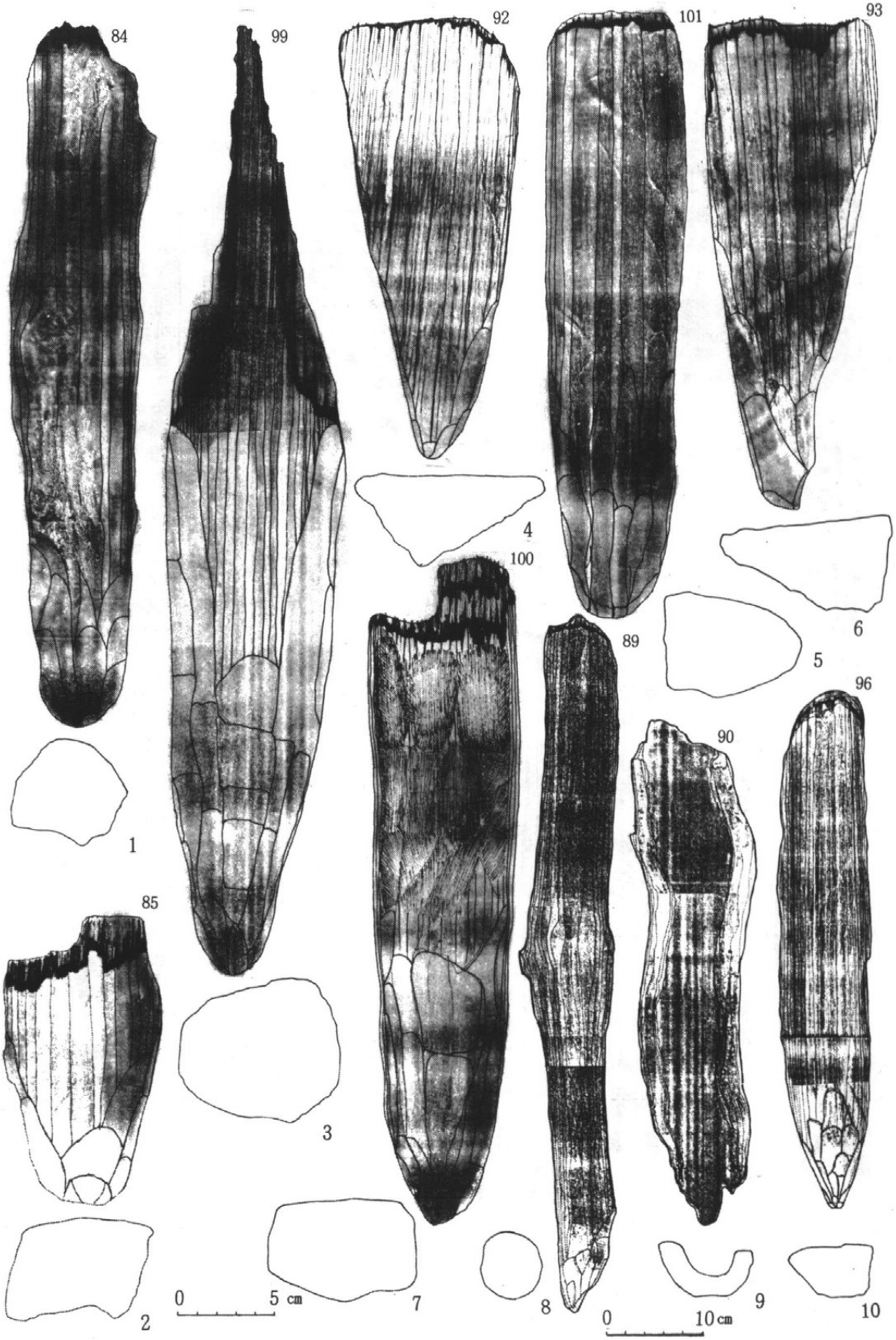
第17図　水路Ⅱの東側　杭列4・5の杭　(1：3)

4～7・13　杭列4　　1～3・8～12　杭列5　　3はQ16

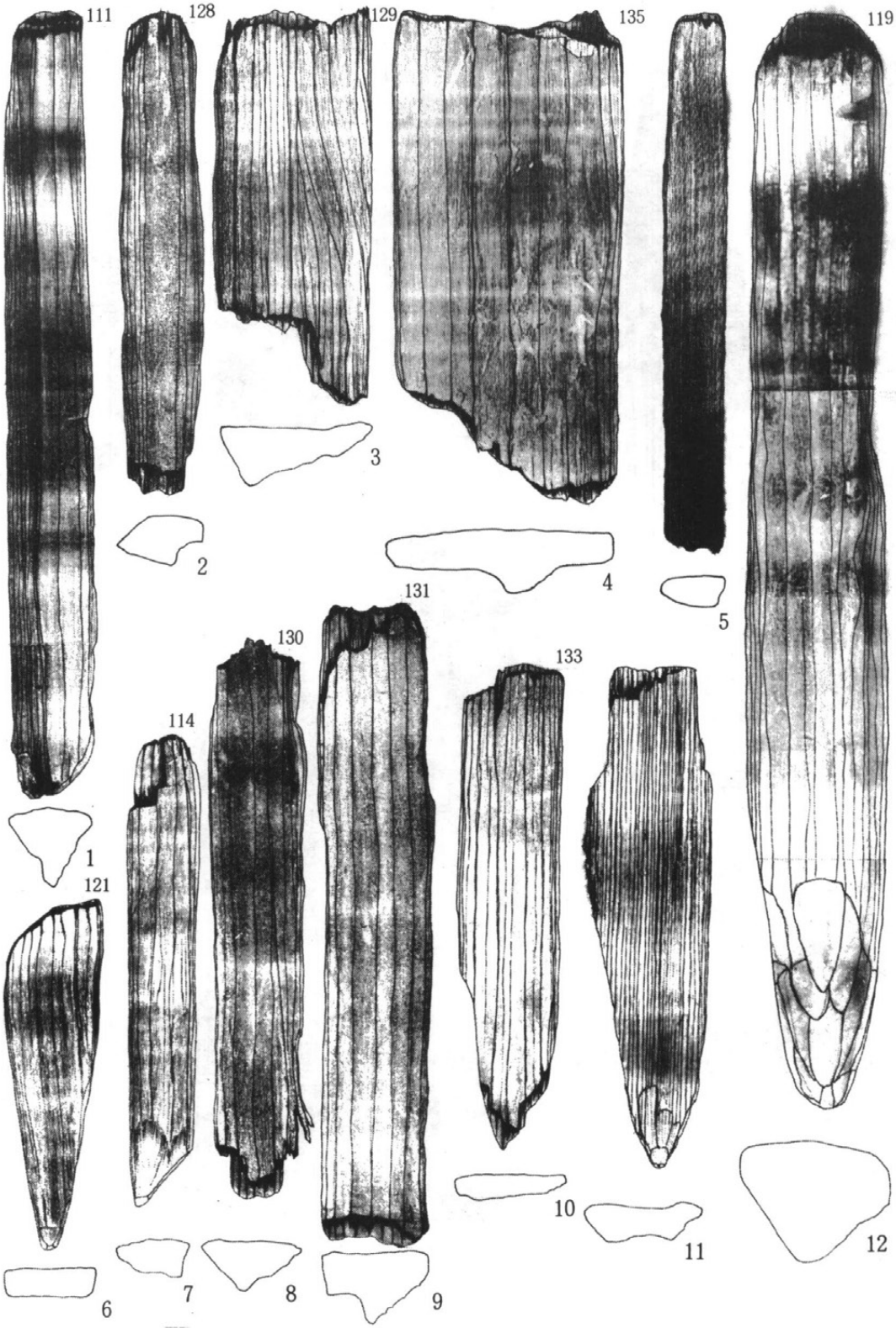


第18図　A地区東と水溜状遺構2東側　杭列7の(1)の杭　(1：3)

1.矢板状杭　2～5 A地区　6～9・12杭列7の(1)　10・11は西側

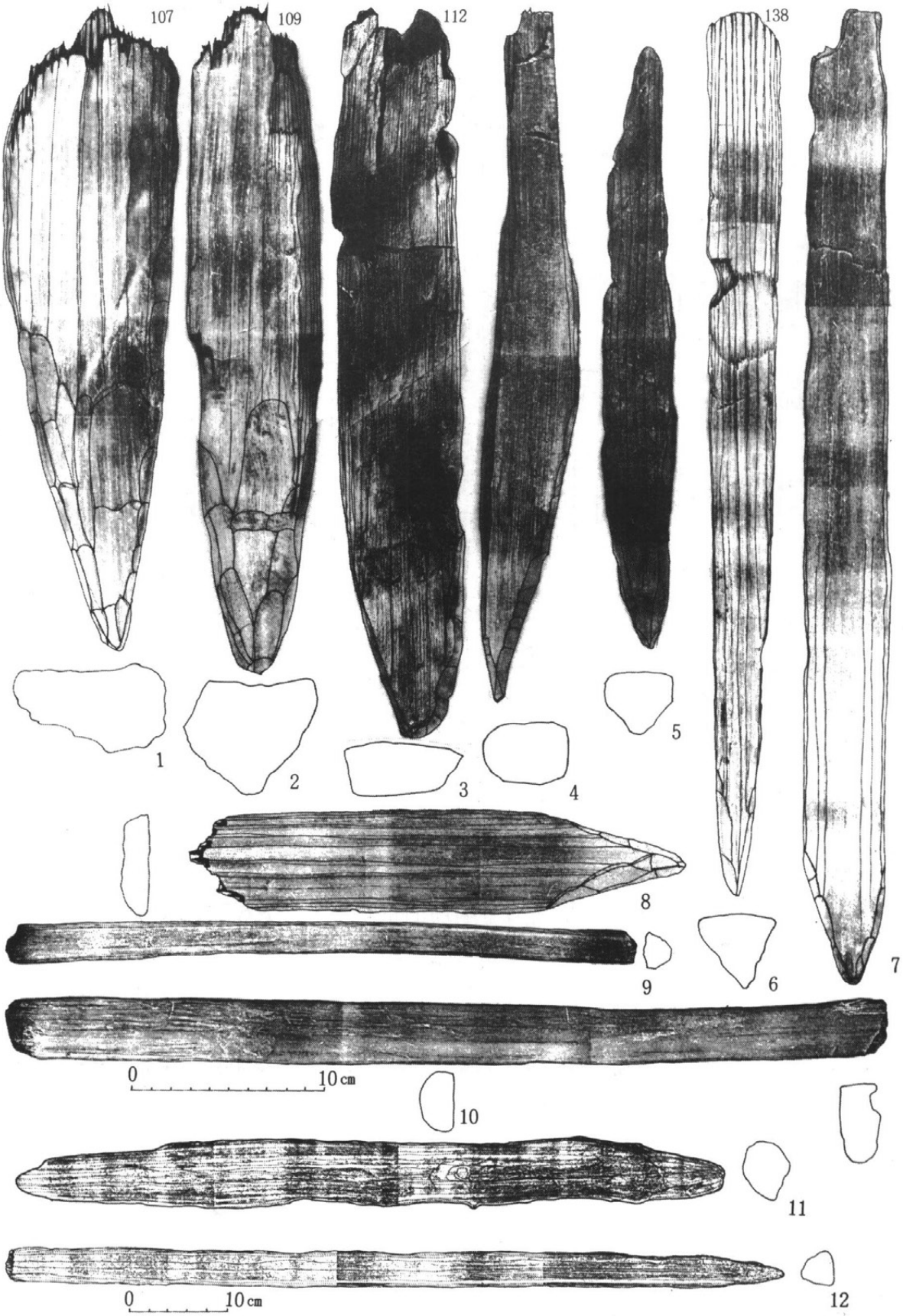


第19図　水溜状遺構Ⅱ東側　杭列7の1の杭　（Bタイプ）1～7（1：3）　8～10（1：6）



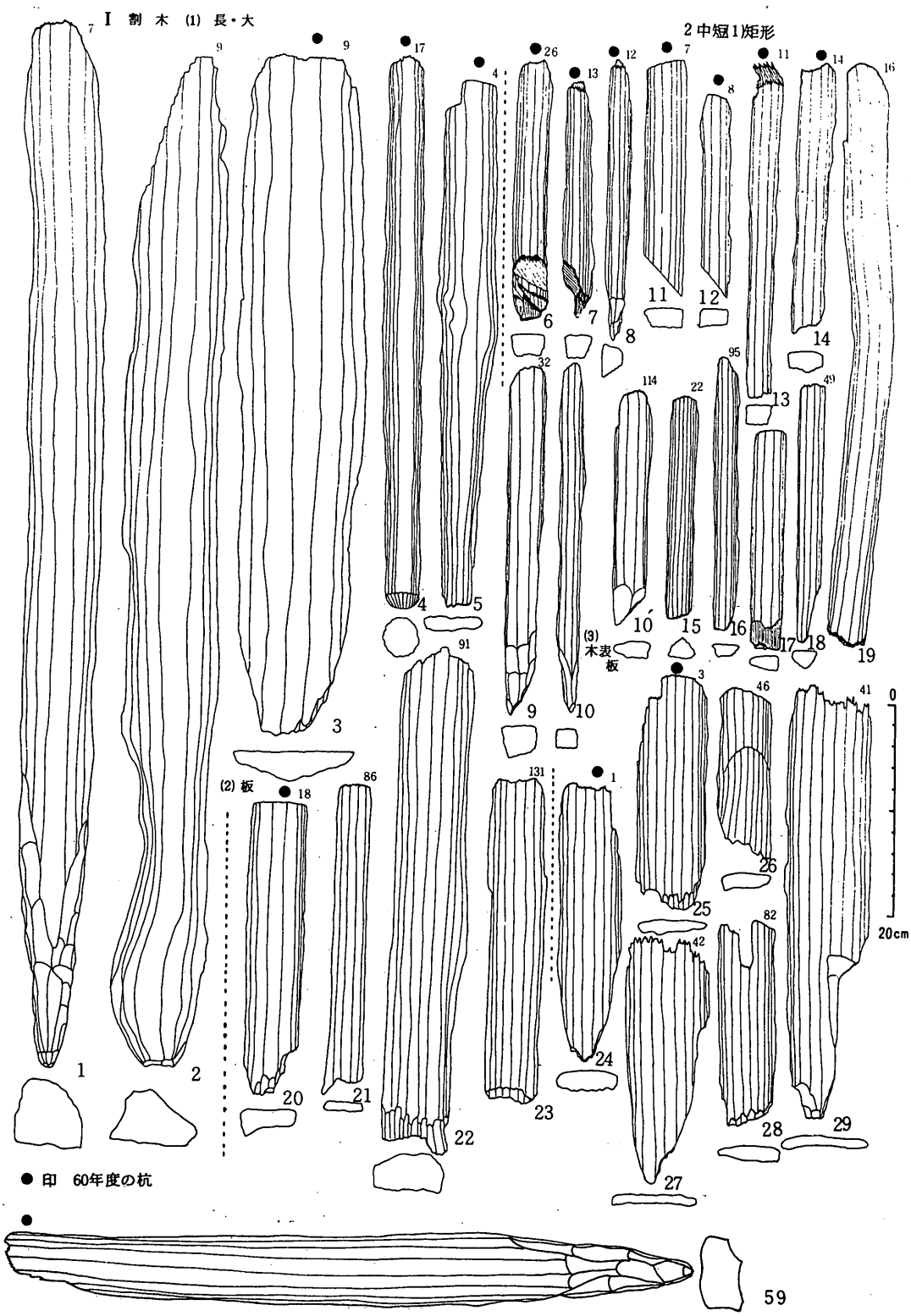
第20図　水溜状遺構西側　杭列７の(2)・８の杭　（1：3）

1・6・7・12　杭列７の(2)　　2～5，8～11　杭列８



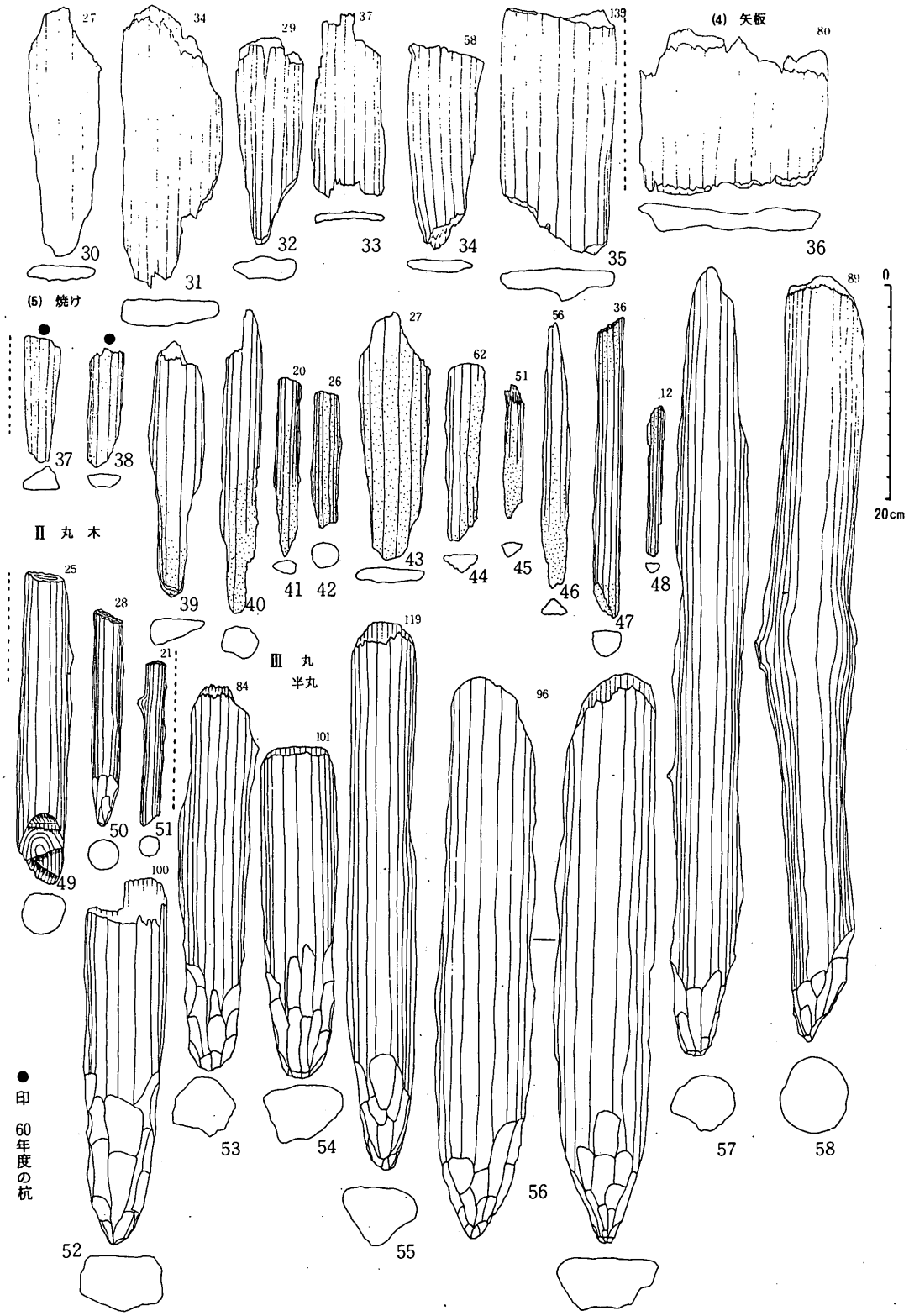
第21図　水溜状遺構Ⅱ西側　杭7の2と其の他の杭　（1～10　1：3　11・12　1：6）

1～3　杭列7の2　　5～7・12　水溜　　9・10・11　杭列9



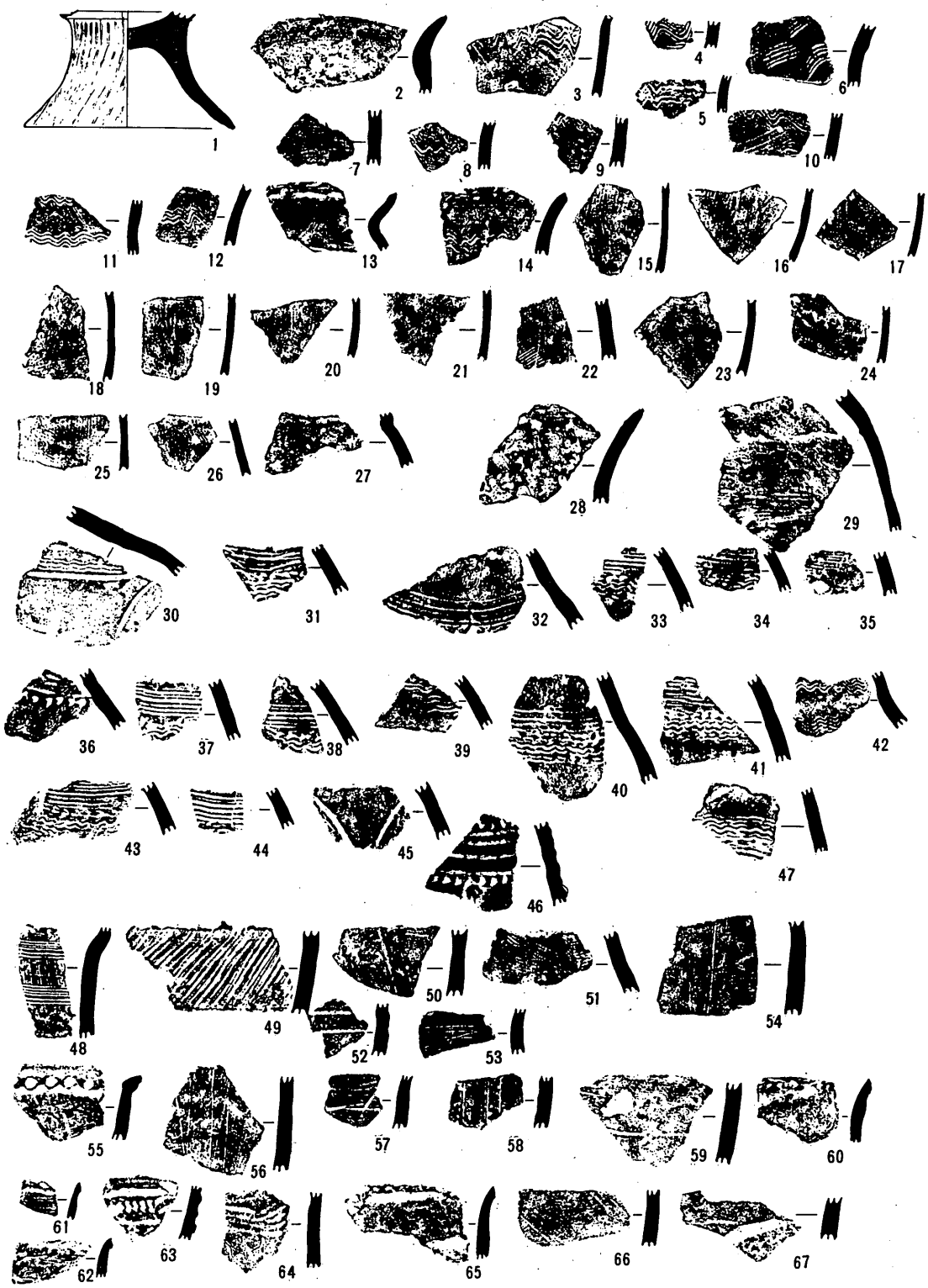
第22図　杭の形態分類(1)　(1：6)

Ⅰ　割木，長大・中短，矩形，板



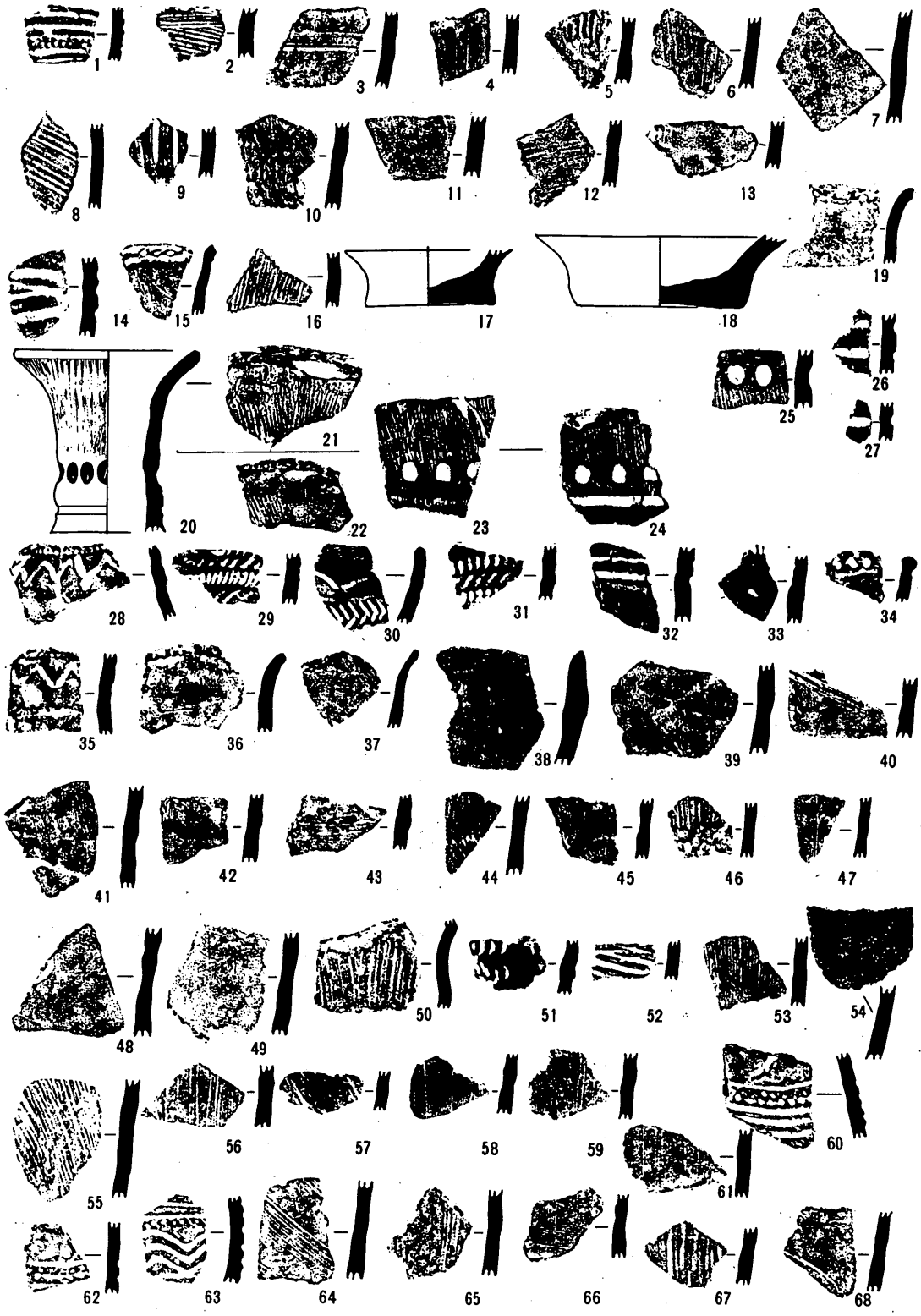
第23図　杭の形態分類(2)　(1：6)

I　割木，板・焼　　II　丸木　　III　太丸・半丸



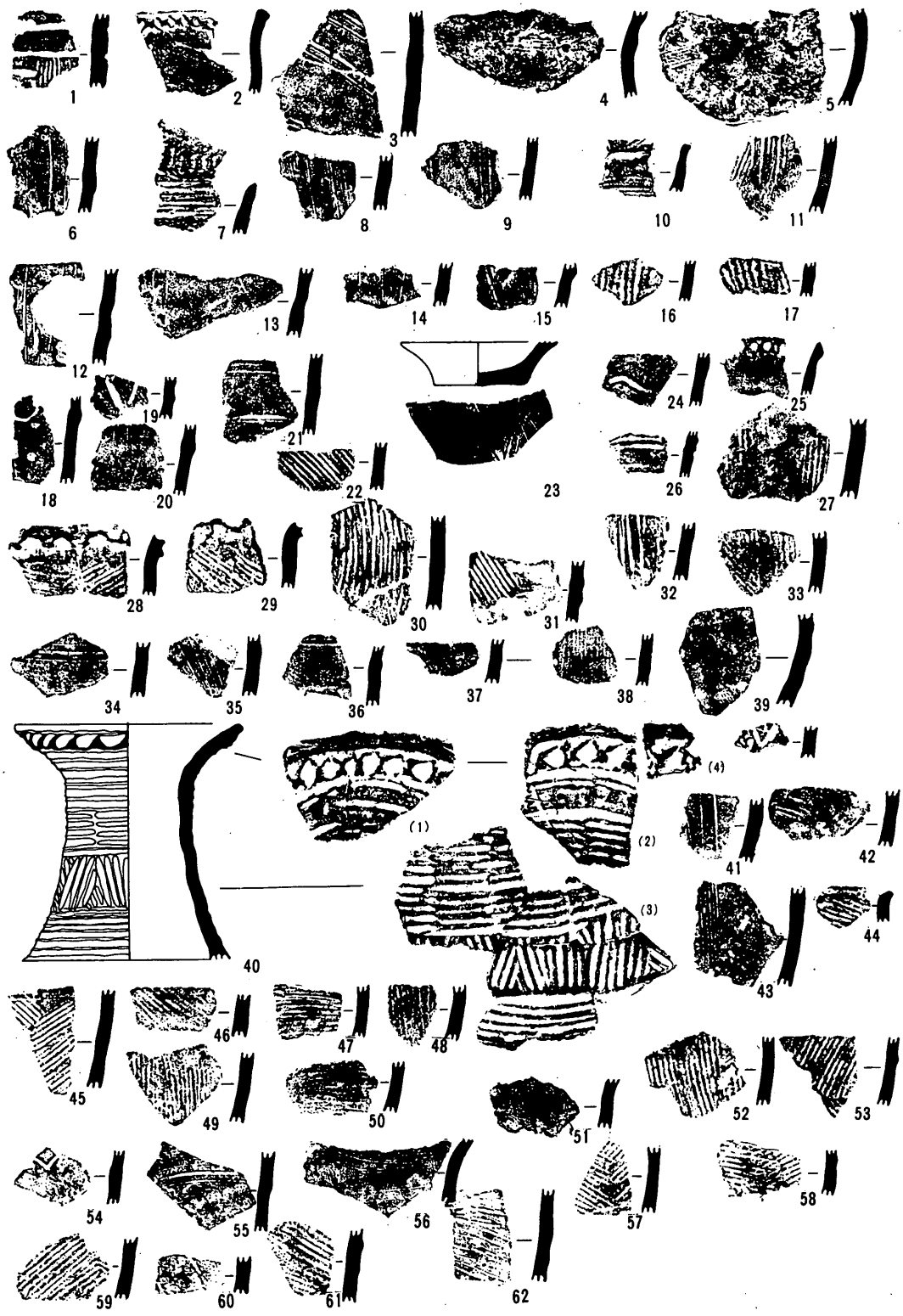
第24図　棚田遺跡　水田検出面弥生式土器拓影１　（１：３）

１～29後期中島・座光寺原（欠山）　30～46中期北原式　40～67中期阿島・寺所式



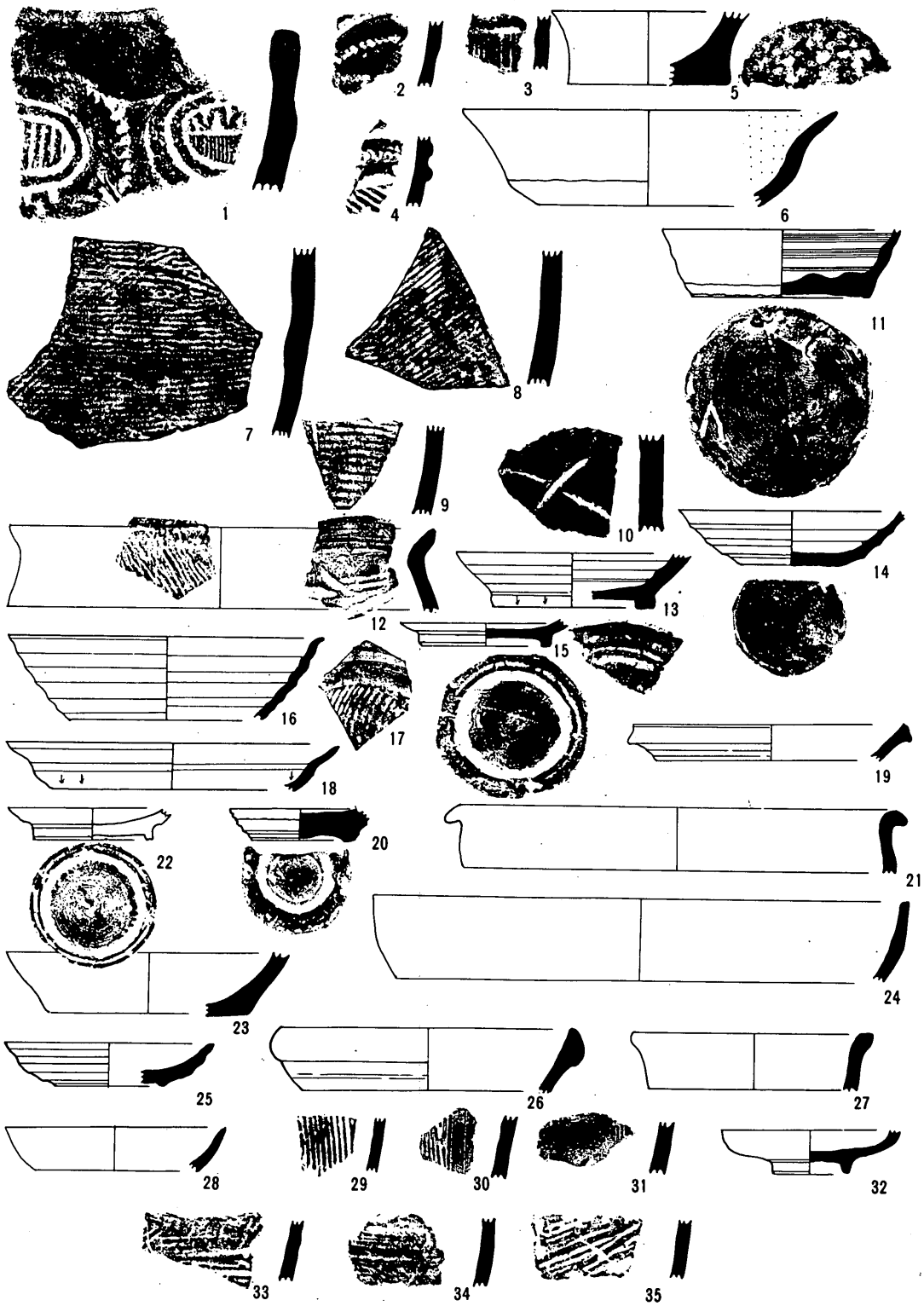
第25図　棚田　水田検出面弥生式土器拓影 2　（1：3）

中期　阿島・寺所式　M～T列



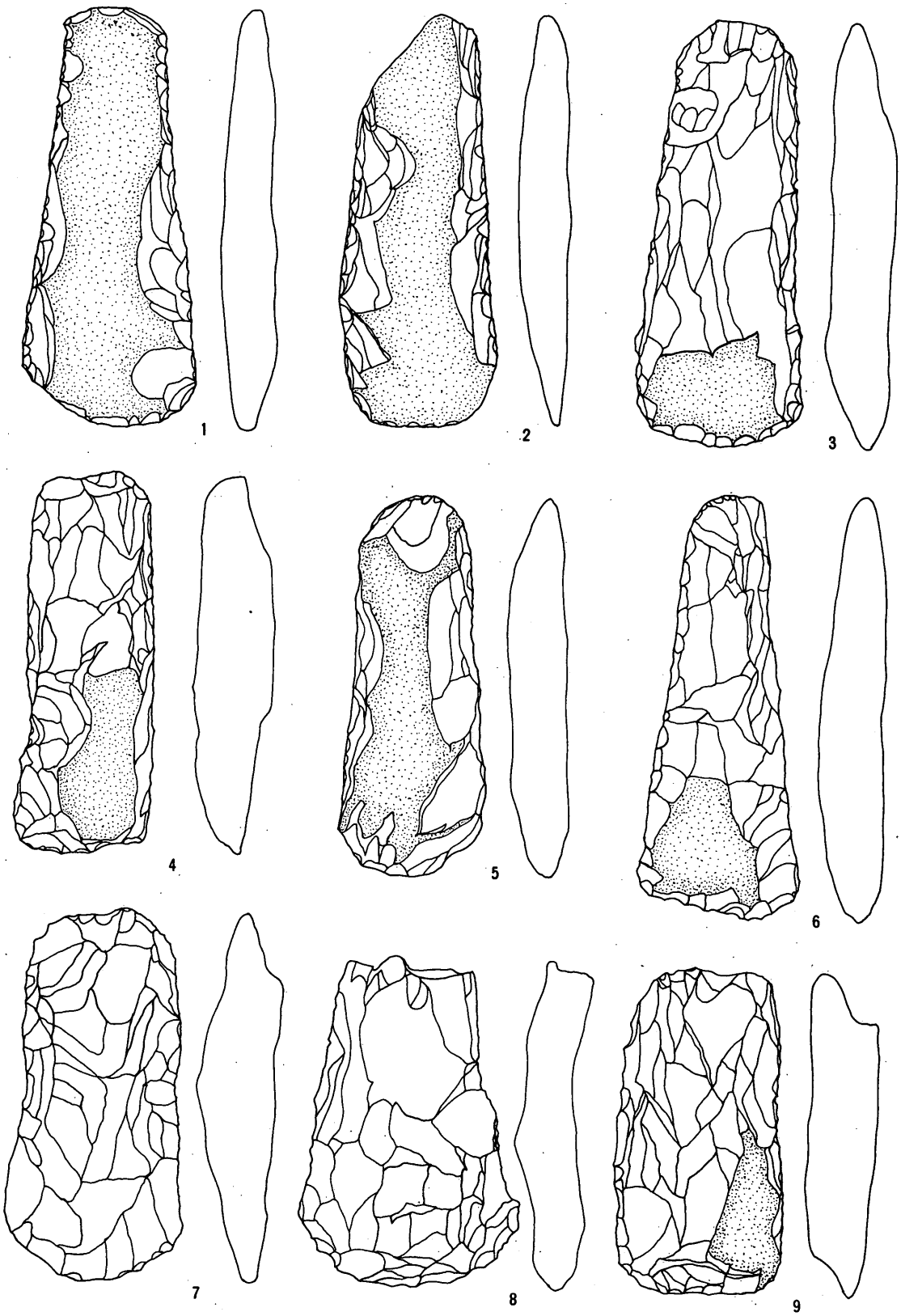
第26図　水田跡検出面土器拓影 3　（1：3）

中期　阿島式・寺所式　U列～B・E列



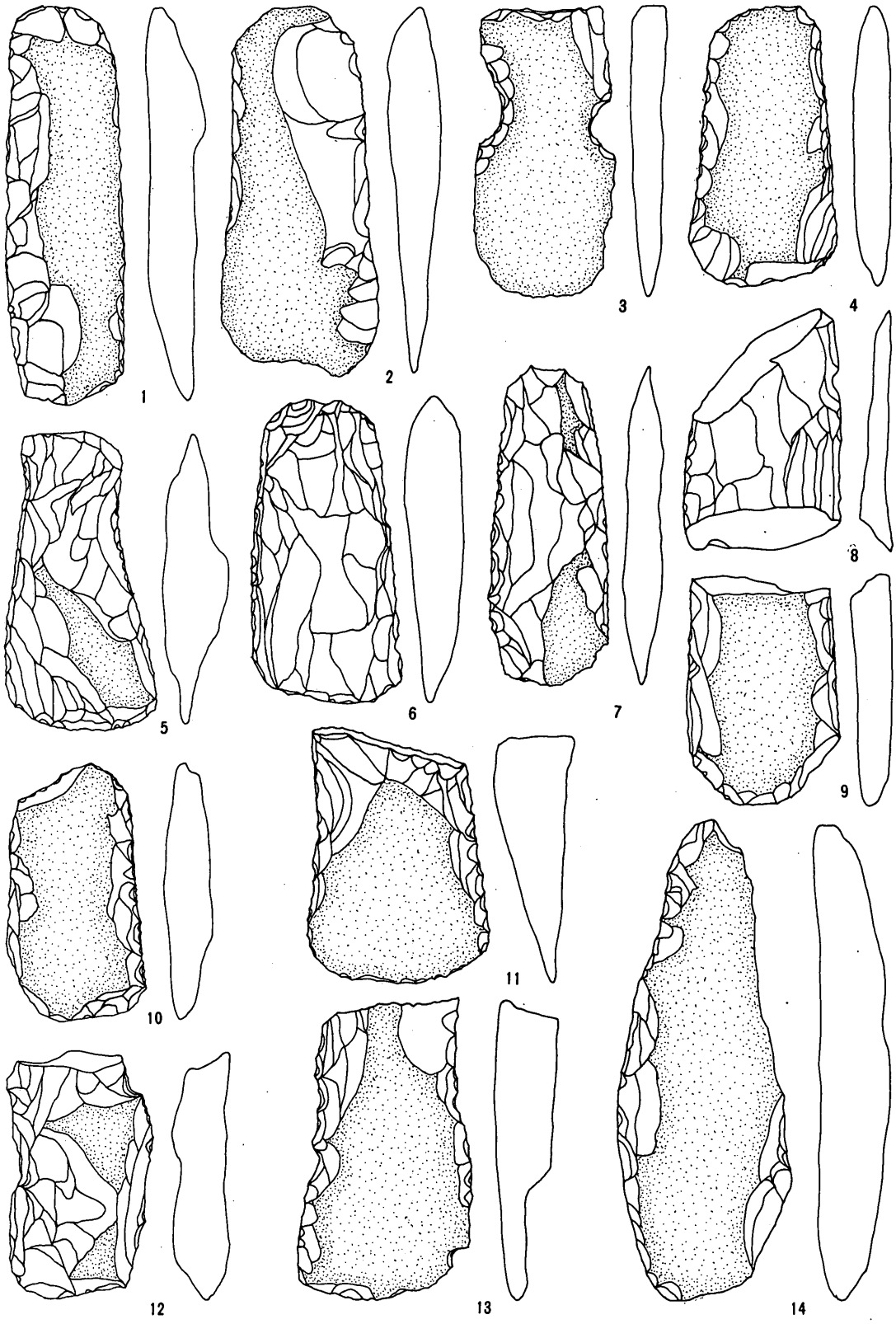
第27図　各所出土土器　（1：3）

1～4　縄文土器　　5　弥生土器　　5～17　平安溝状遺跡　　18・19　上段畑
20～32　中近世陶器　　33～35　北側トレンチ



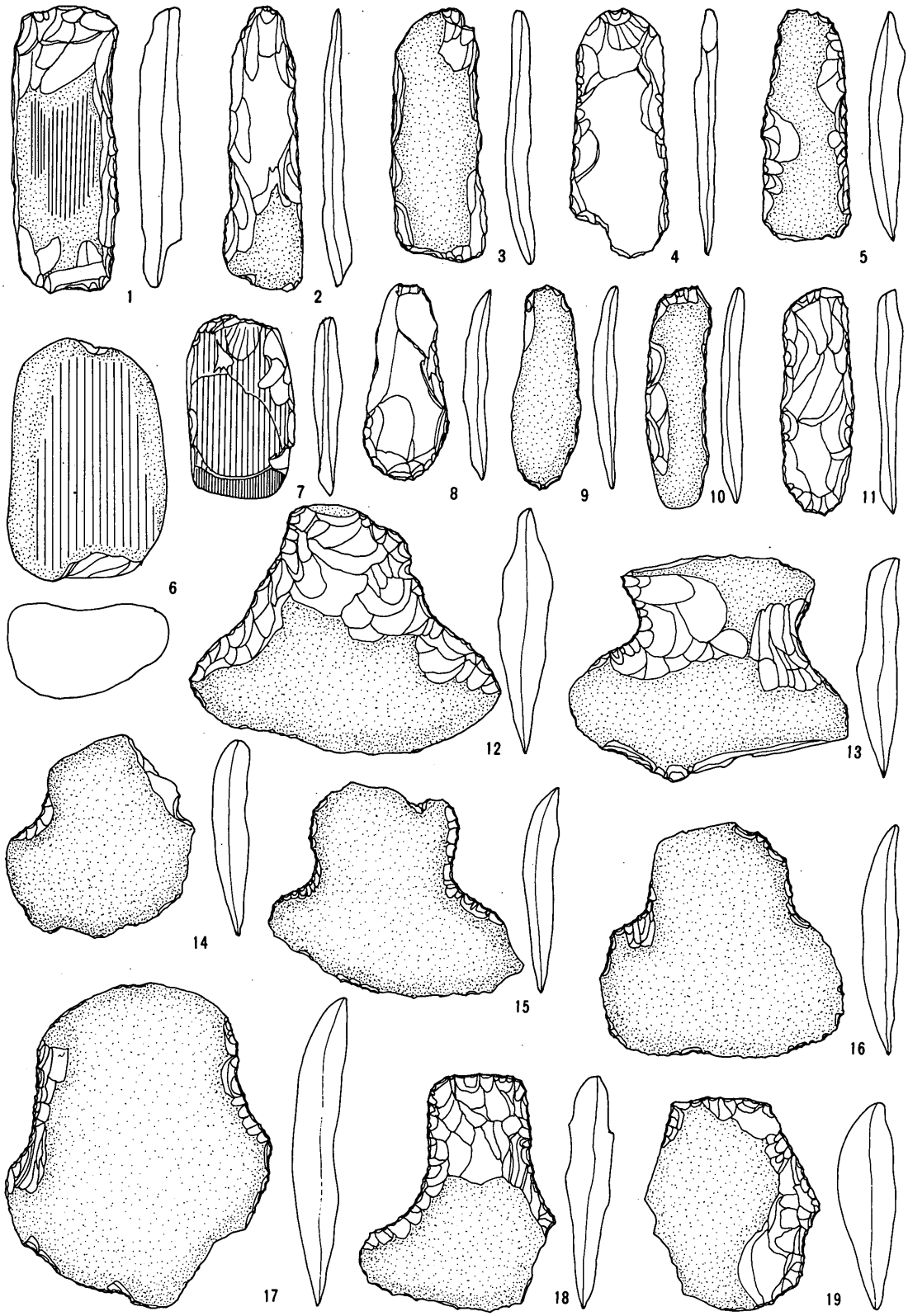
第28図　弥生時代鍬形石器(1)　(1：3)

1. 水路1　5. 溝4　7. 水溜状遺構1　6・8. 溝G　2・4・9. 北の水路2と転石中
3・7. 水溜状遺構2



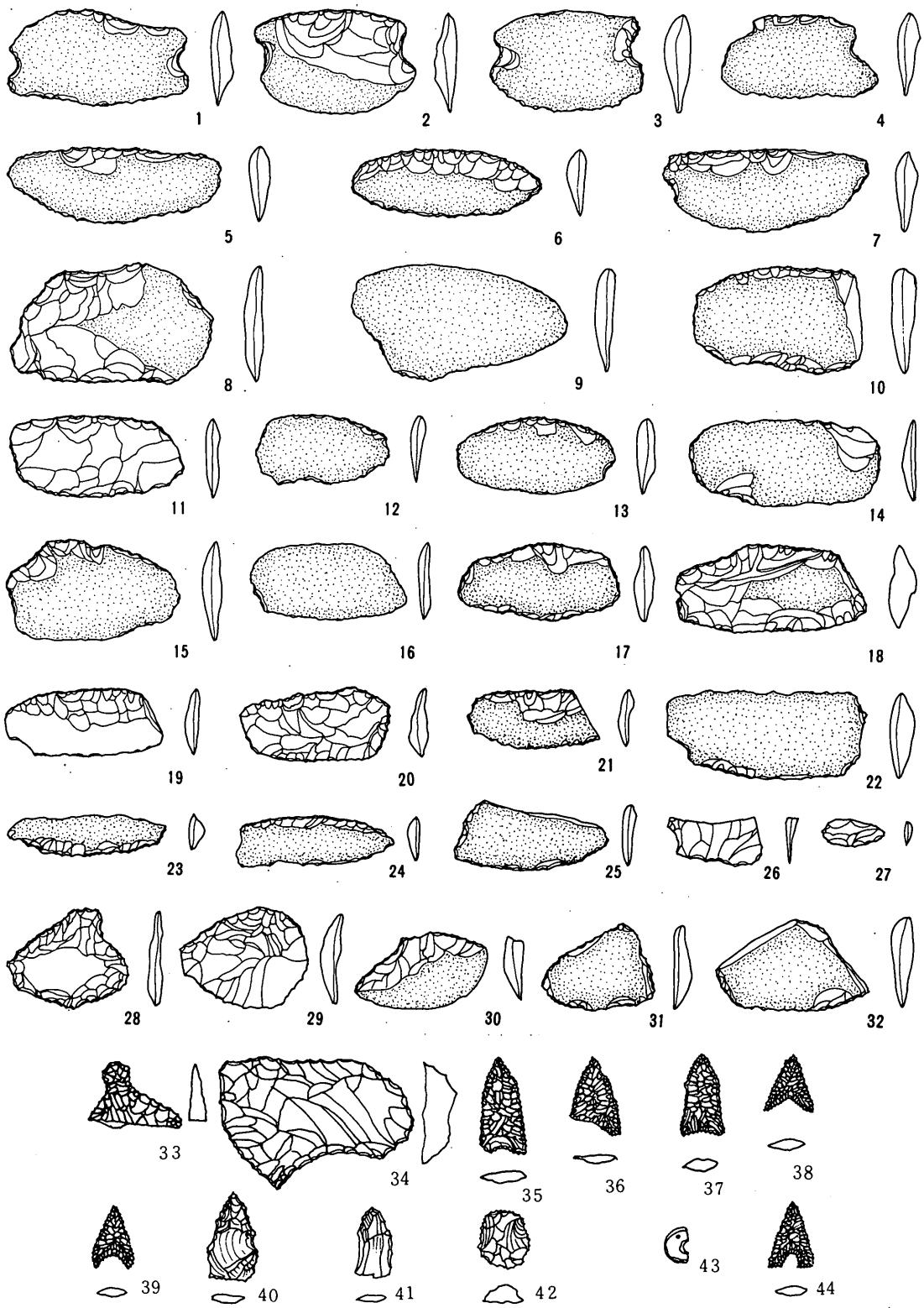
第29図　弥生時代鍬形石器(2)　(1：3)

11　畦畔5の南　　3.　水溜状遺構1　　6.　溝4　　4・8・9・10・12・13　水溜状遺構2西
1・7　水溜状遺構2　　2.　北トレンチ　　5・14　排土中



第30図　小形石器と弥生時代有肩扁状形石器　（1：3）

1・3・4は南　7.水路2　8.溝C　11溝B　10溝G　5・9上段畑　2.水路2
6.水溜状遺構2　13溝6、　19水溜状遺構1　12・15・16・18西側転石中　14・16排土中

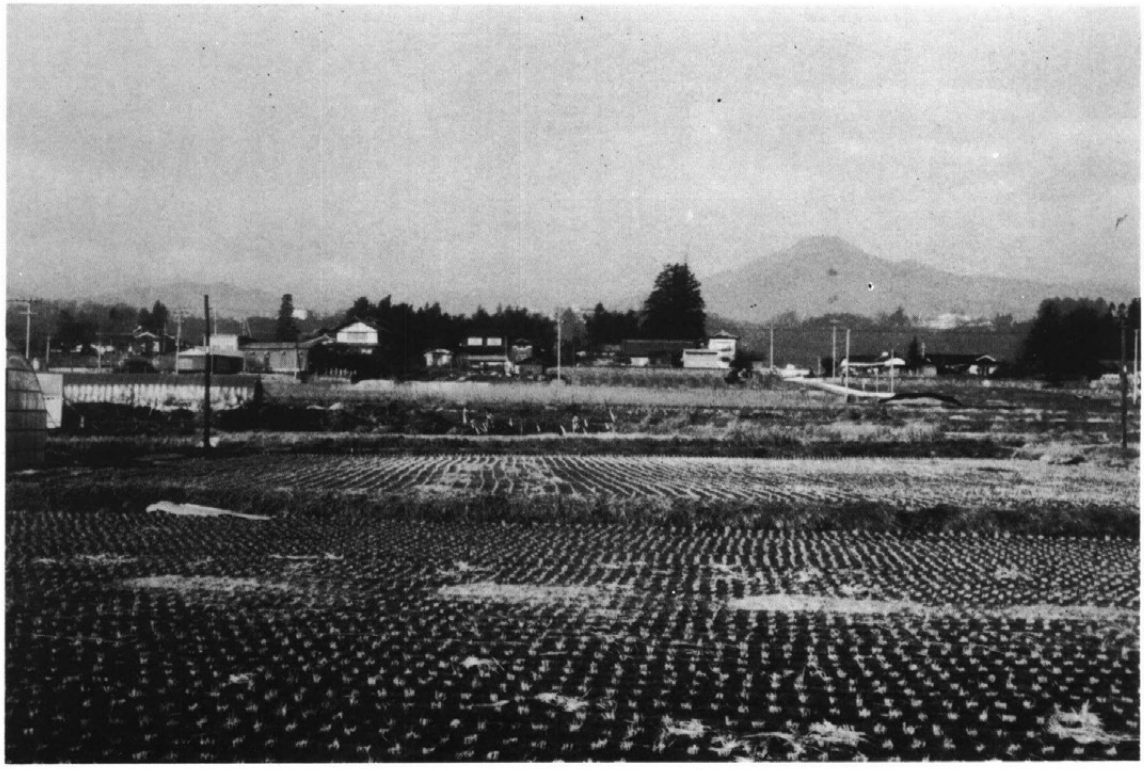


第31図　弥生時代石包丁形石器・異形石器，縄文時代石匙・石鏃等（1～32　1：3，　33～　1：2）

6・20・22・23南一帯　5・12・28溝C　8.水溜状遺構1　7・24・29・30溝G　9.水路1
11溝9　13水西2東　1・2・25転石上　3・14・16北転石上　4・21水溜状遺構2

写図1　南条棚田遺跡の景観

1.　西方から　ビニールハウスのあたりが調査区



2.　東方から　ビニールハウスの前　水田址

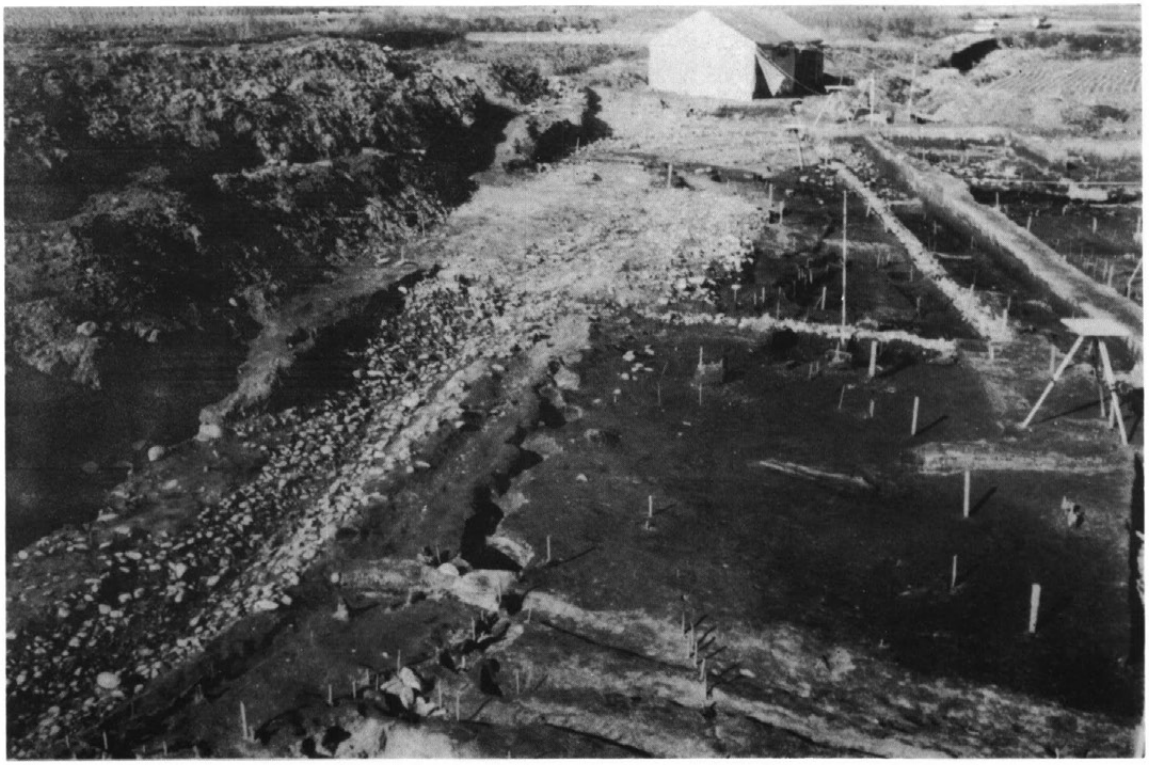
写図 2　水田畦畔

1.　畦畔 2・3・5 と杭列

2.　昭和60年度の畦畔と杭

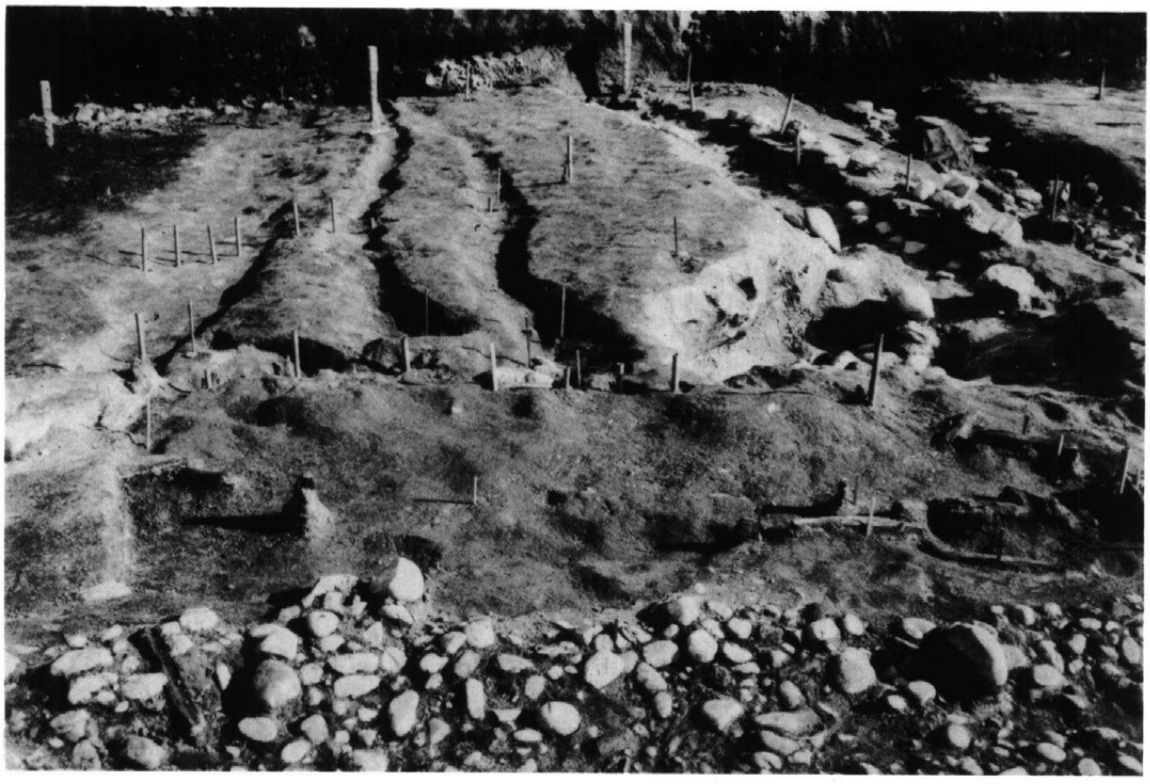
写図3　水路1・2と北側の調査地

1.　水路1（手前）水路2（左側）



2.　水路2（左側石の間）

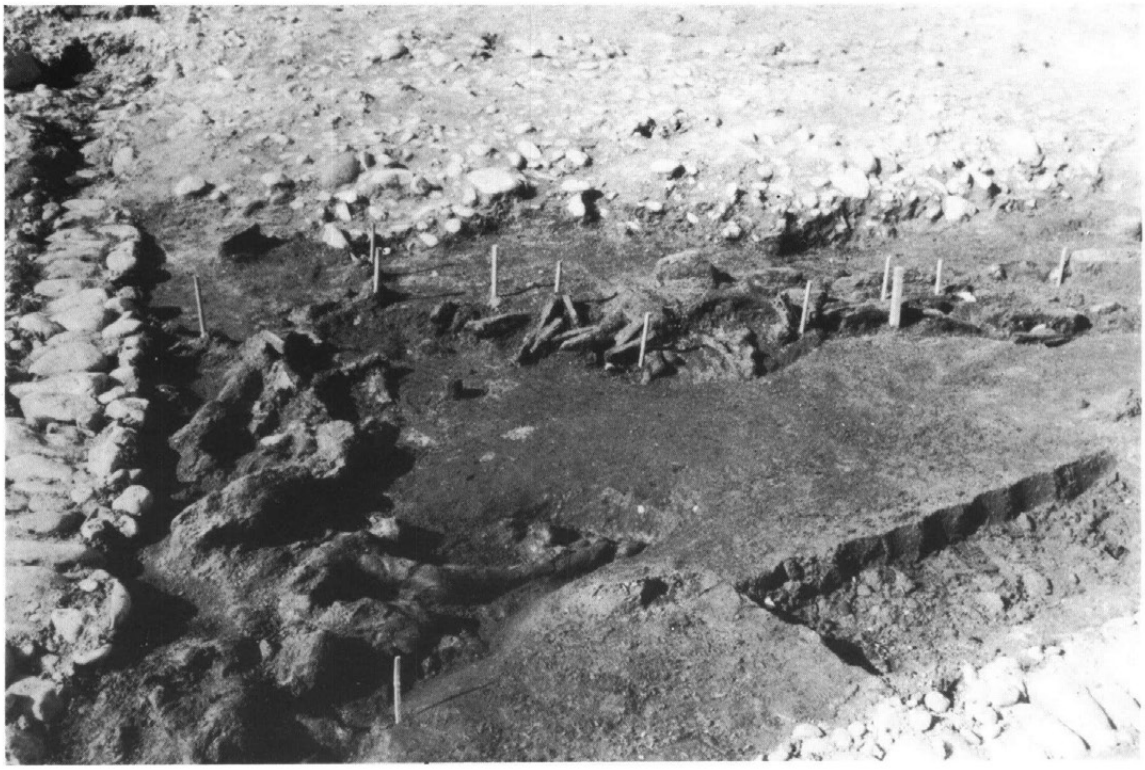
写図4　水路2、溝FG、溝4・9・10・11



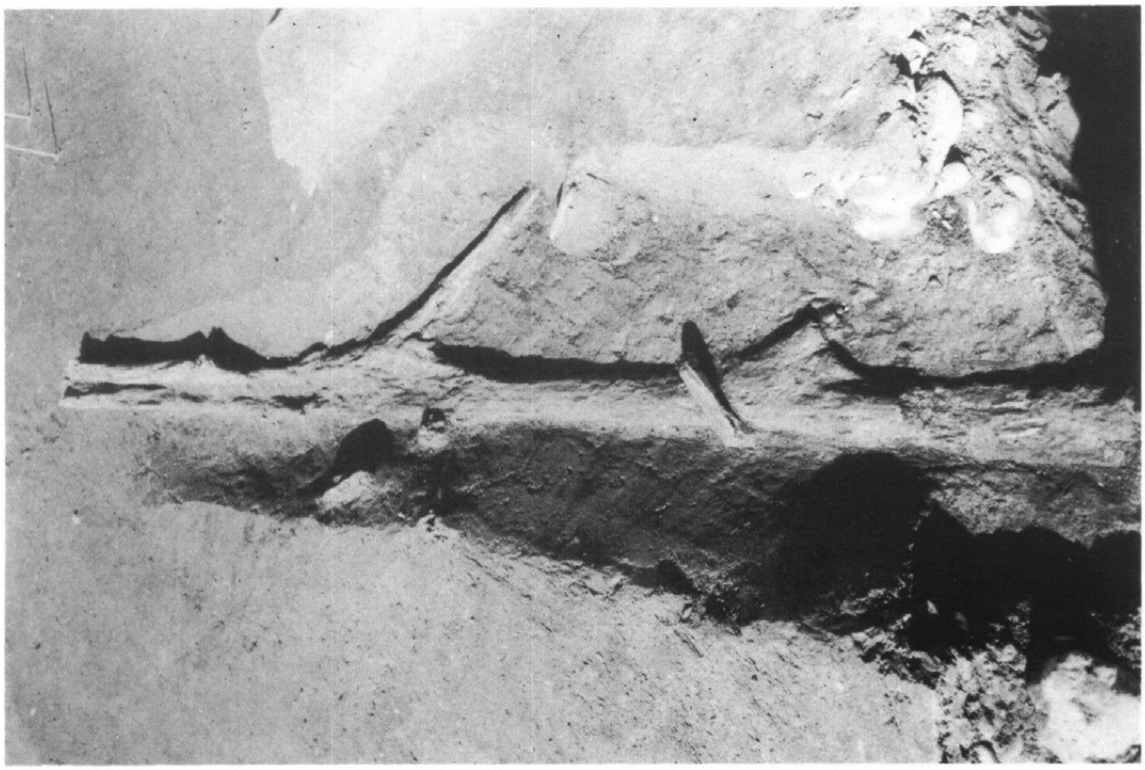
1.　水路（手前），右から溝4・9・10・11

2.　溝4，(横) 杭列6，溝G・F

写図 5　中央部の低湿地

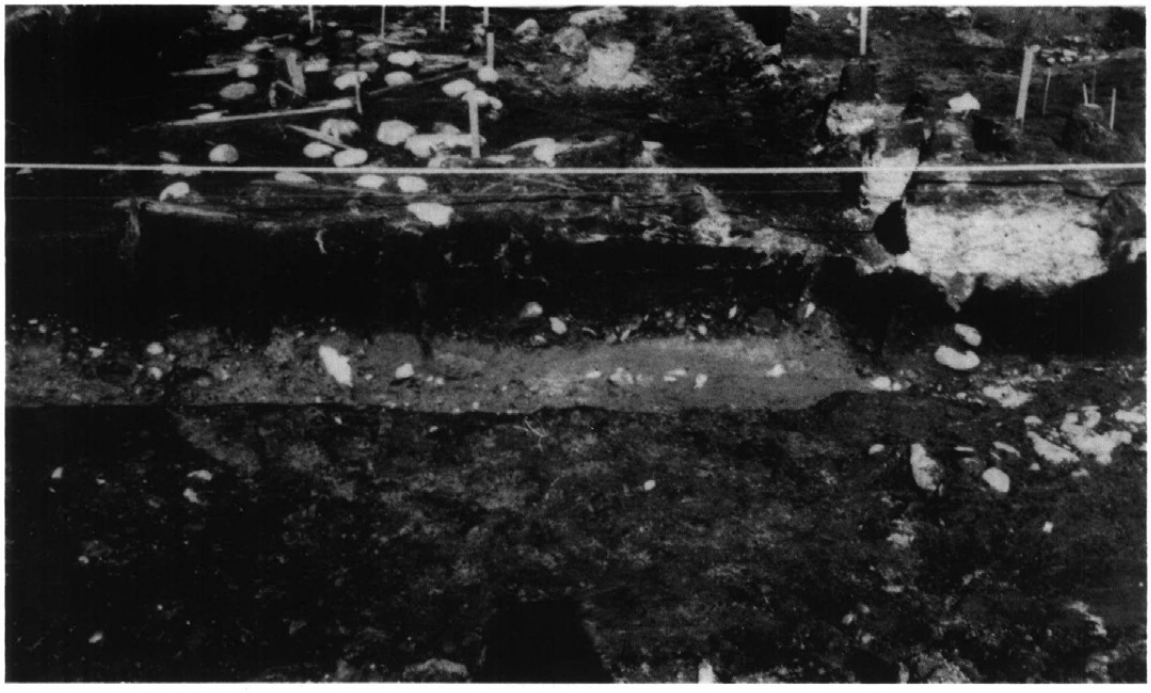


1.　転石群の東に続く流木の堆積



2.　栗の大木

写図 6　北側水溜状遺構 2

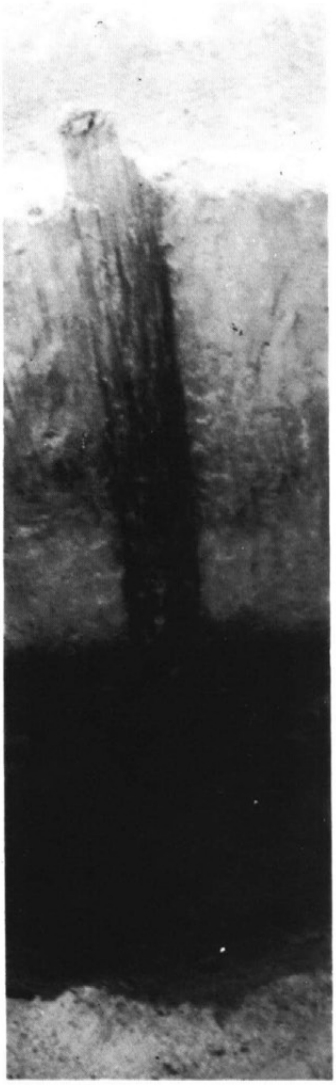


1.　東側杭列の向う水溜

2.　中央低湿地から向うが水溜状遺構

写図 7　杭列 1

1.　畦畔 2 東側の杭列



2.　97㎝の杭

3.　大小の杭の並び

写図8　杭列2・3

1.　水路西側の杭の掘り下げ

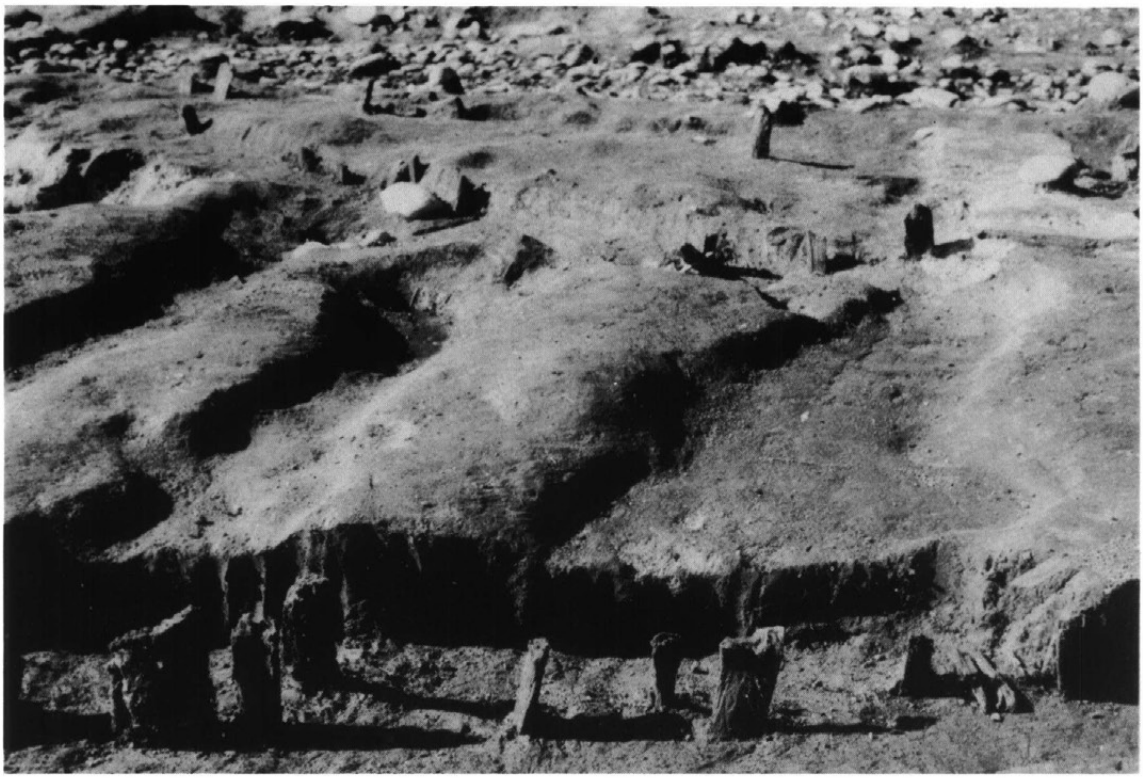
2.　水路北側の杭の掘り下げ

写図 9　杭列 4 ・ 5

1.　杭列 5 （手前）　杭列 4 （向う側）

2.　杭列 5 （右）　杭列 4 （左）の掘り下げ

写図10　杭列 6



1.　杭列6（手前）の掘り下げ　向う側　4・5

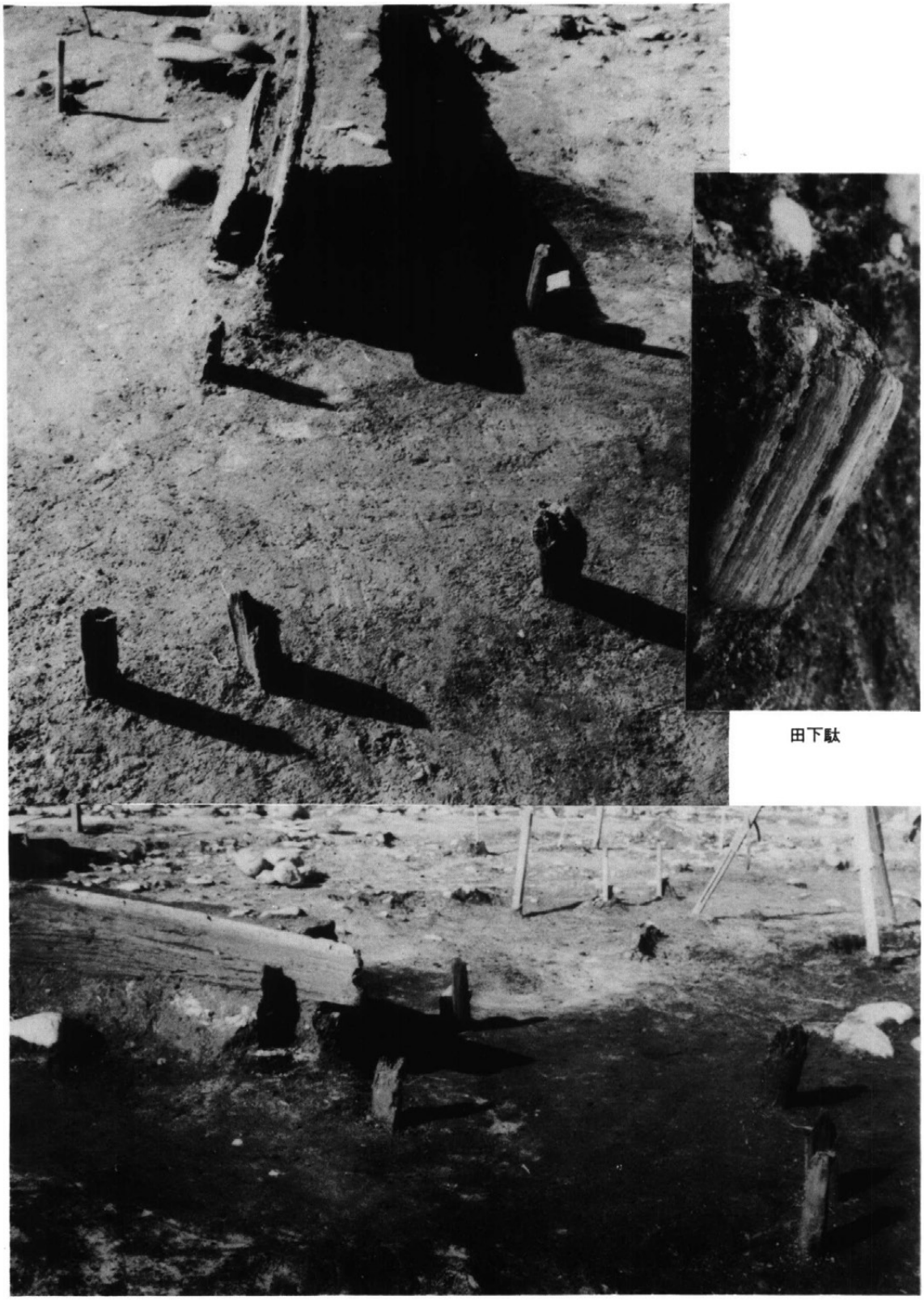
2.　溝9・10・11を横切る杭列6

写図11　杭列７の(1)

1.　杭列７の１の杭群の頭

2.　砂礫層まで打ちこまれた杭列

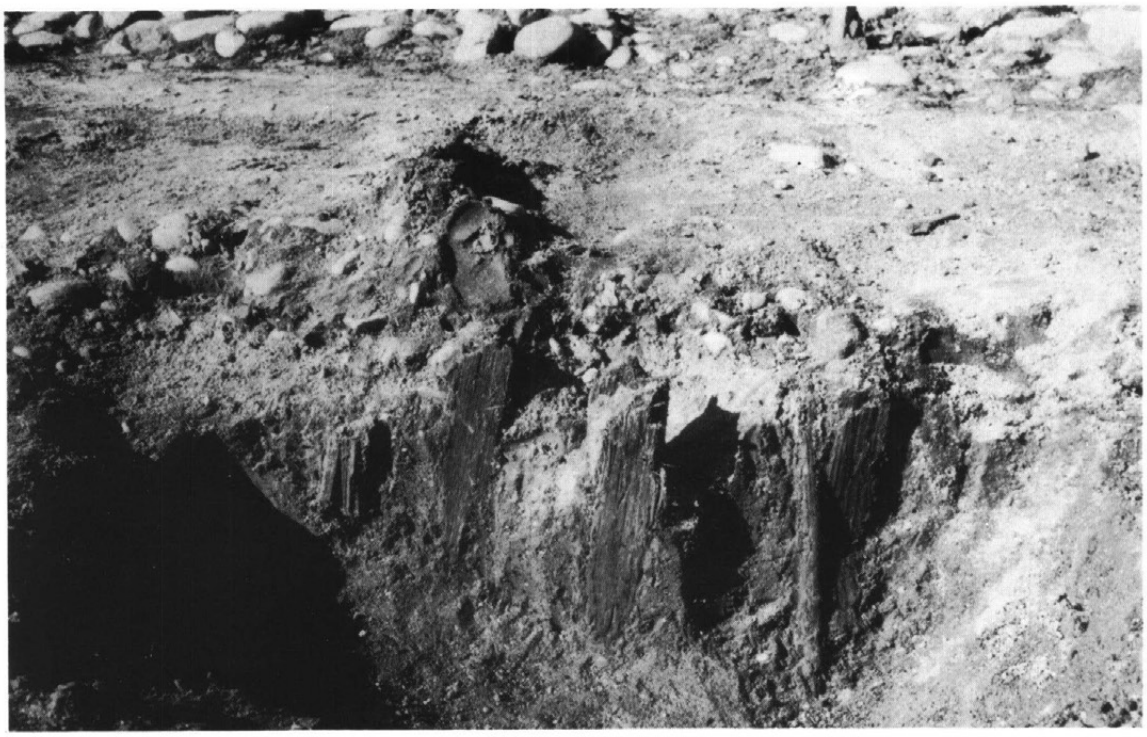
写図12　杭列７の(2)と矢板羽目板



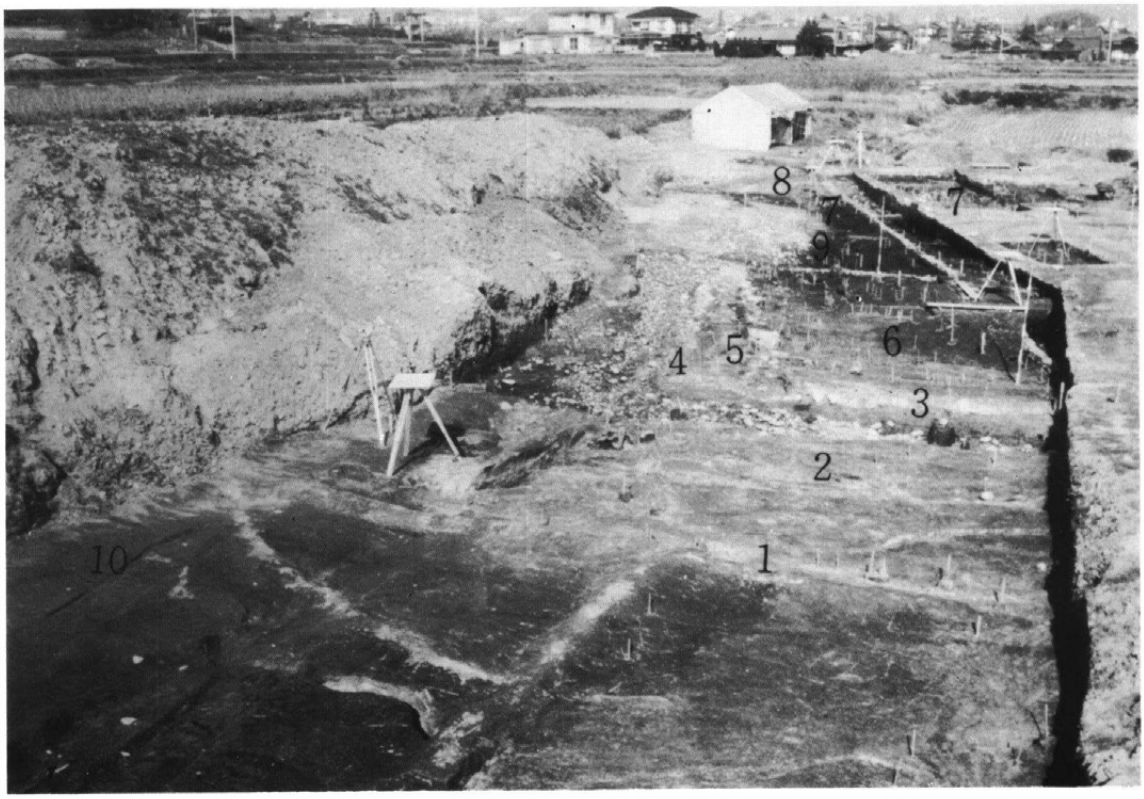
田下駄

羽目板添い・前の杭

写図13　杭列 8 と杭列の位置



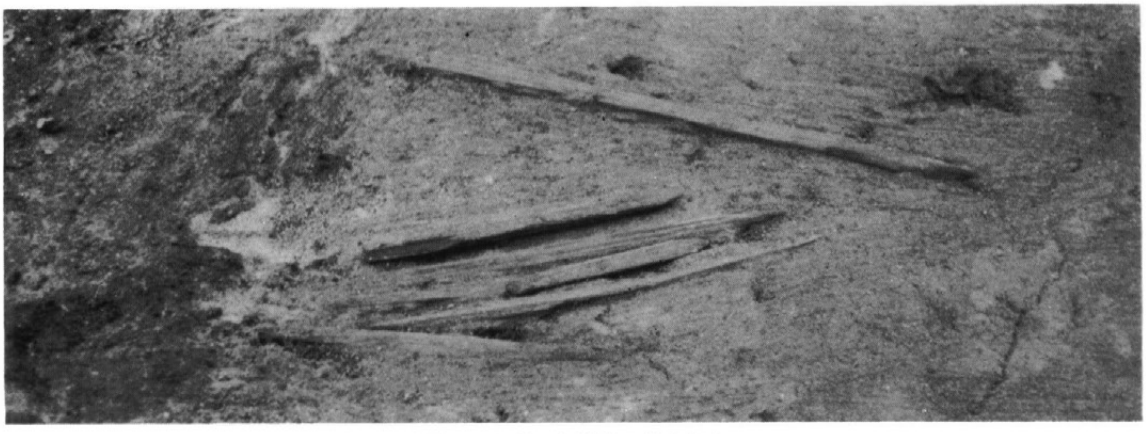
1.　板状杭の並び



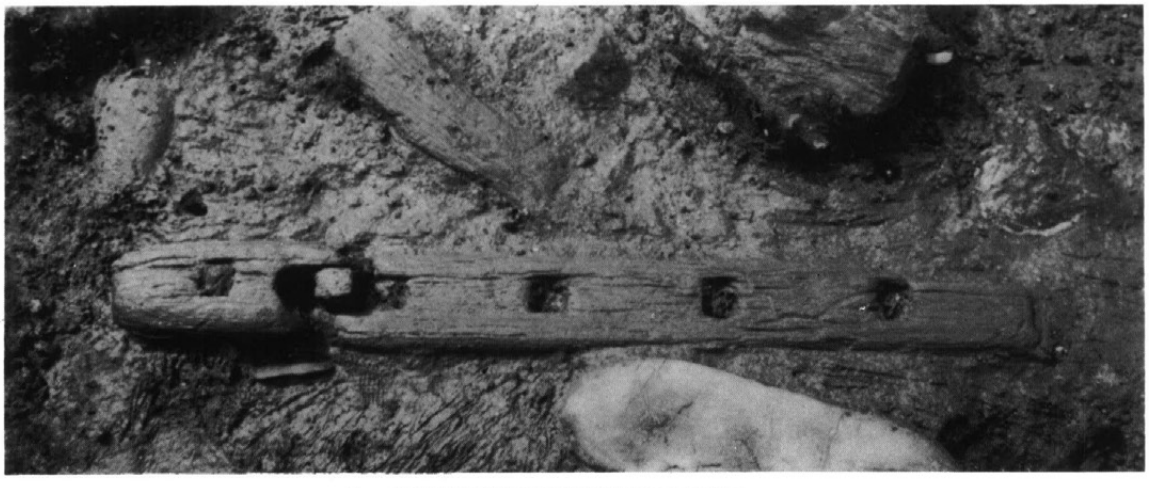
2.　杭列の位置（1～9杭列・10　60年度）

写図14　加工木製品の出土状況

1.　水路からの木槌の出土



2.　畦畔添　へら状・木製品の集中出土



3.　水溜状遺構２中の穿穴木製品と板出土

写図15　加工木製品と勾玉

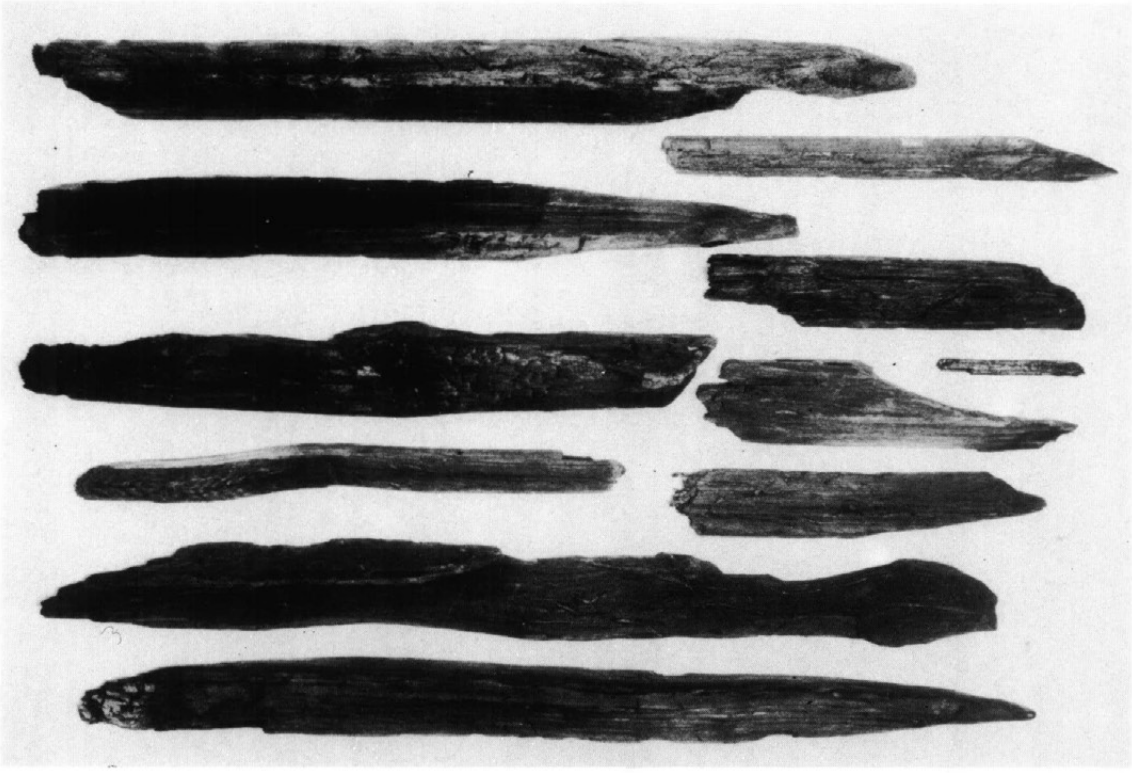
へら状木製品

槌・田下駄等

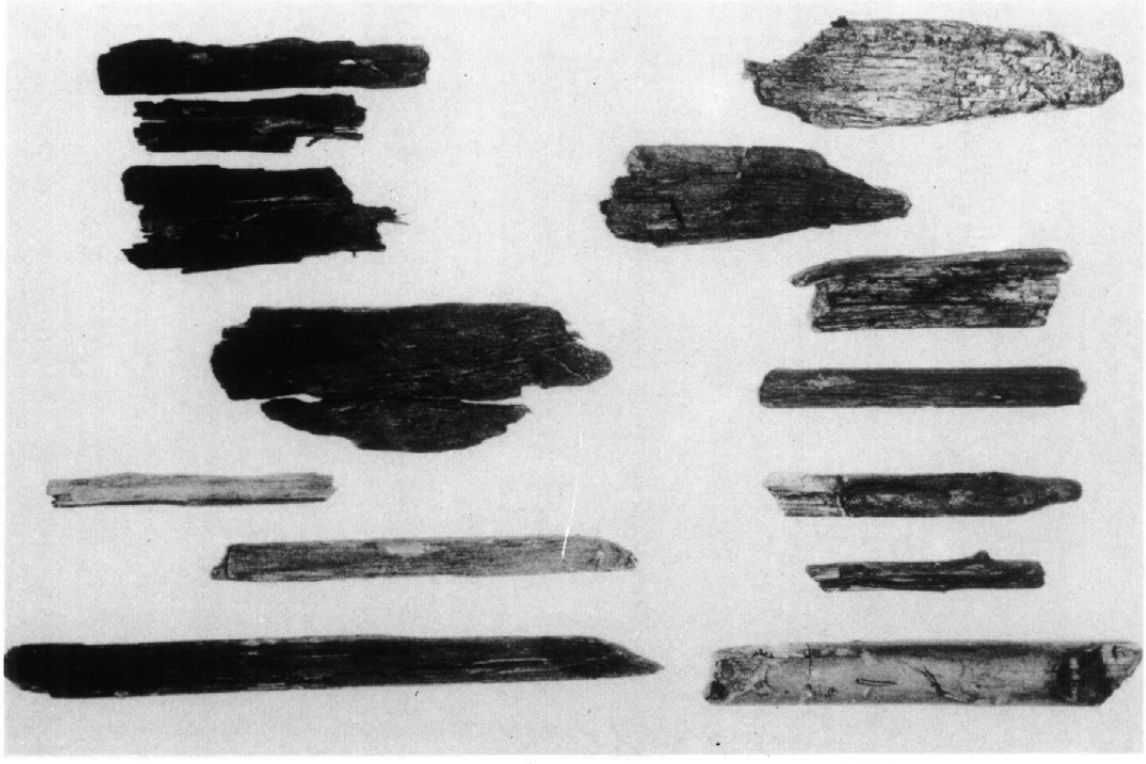
勾　玉

（唐木孝治氏撮影）

写図16　杭列１・２・３の杭

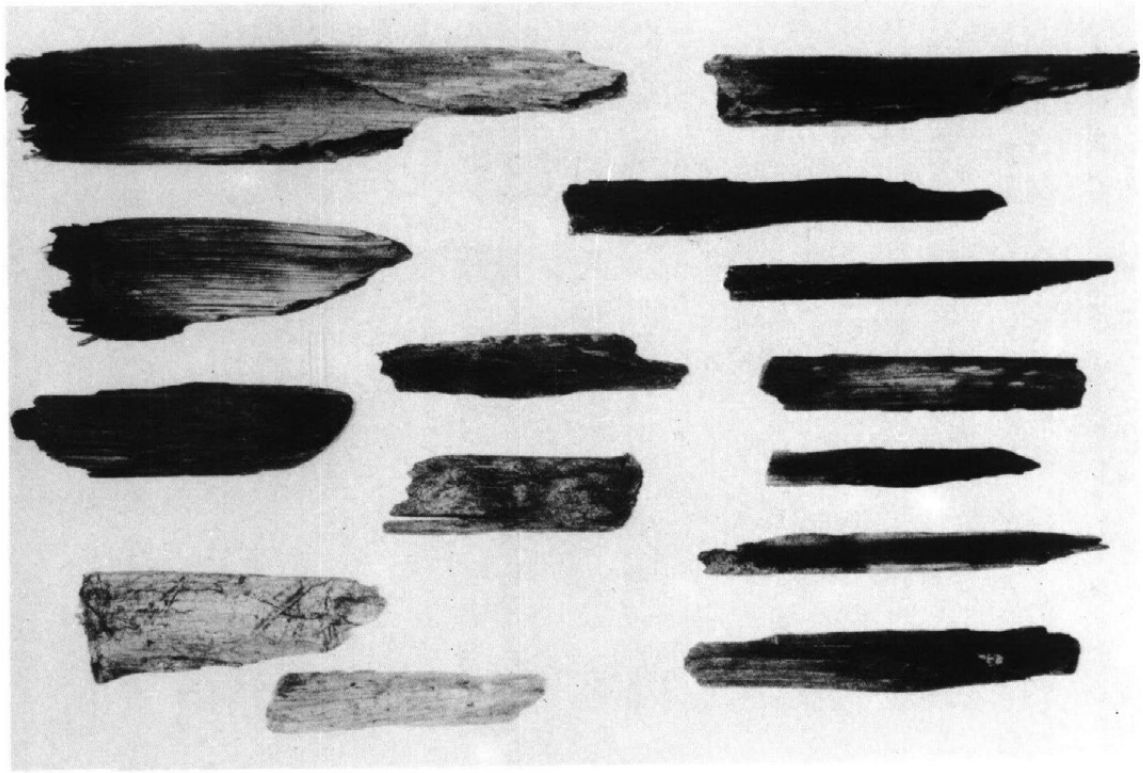


1.　杭列１の大杭と短杭（唐木孝治氏撮影）

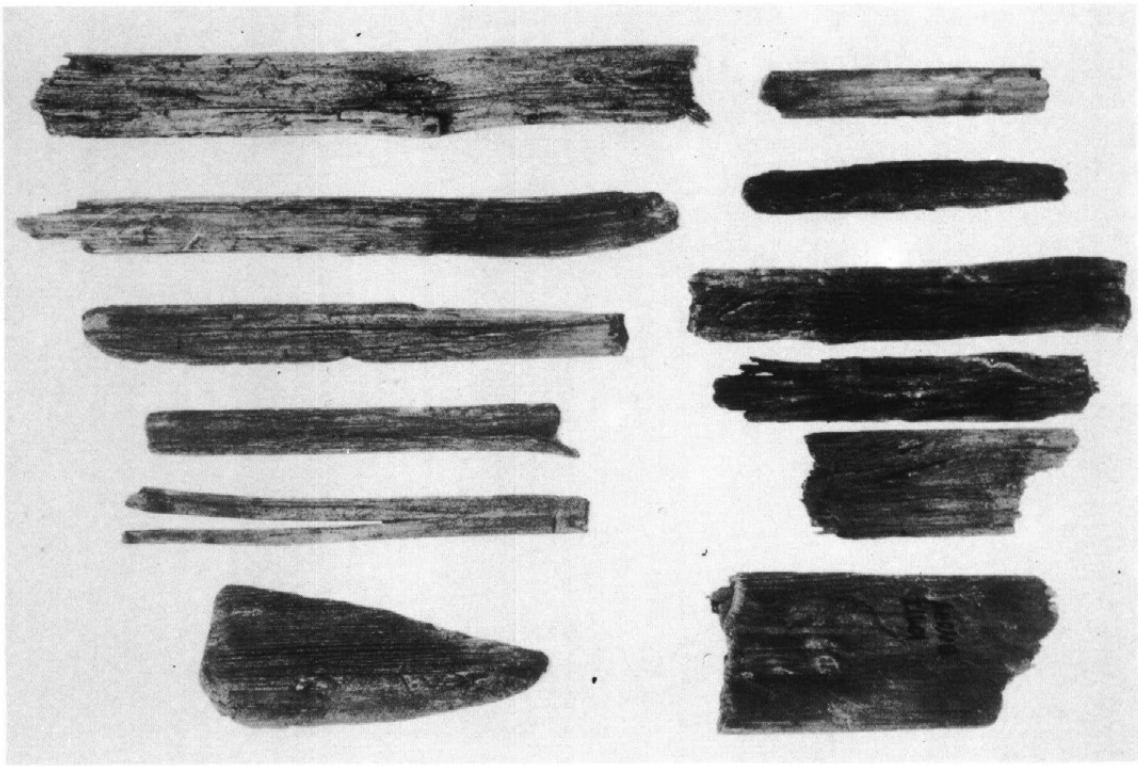


2.　杭列２・３の杭　（唐木氏撮影）

写図17　杭列４・５・６の杭と杭列７・８の板状の杭

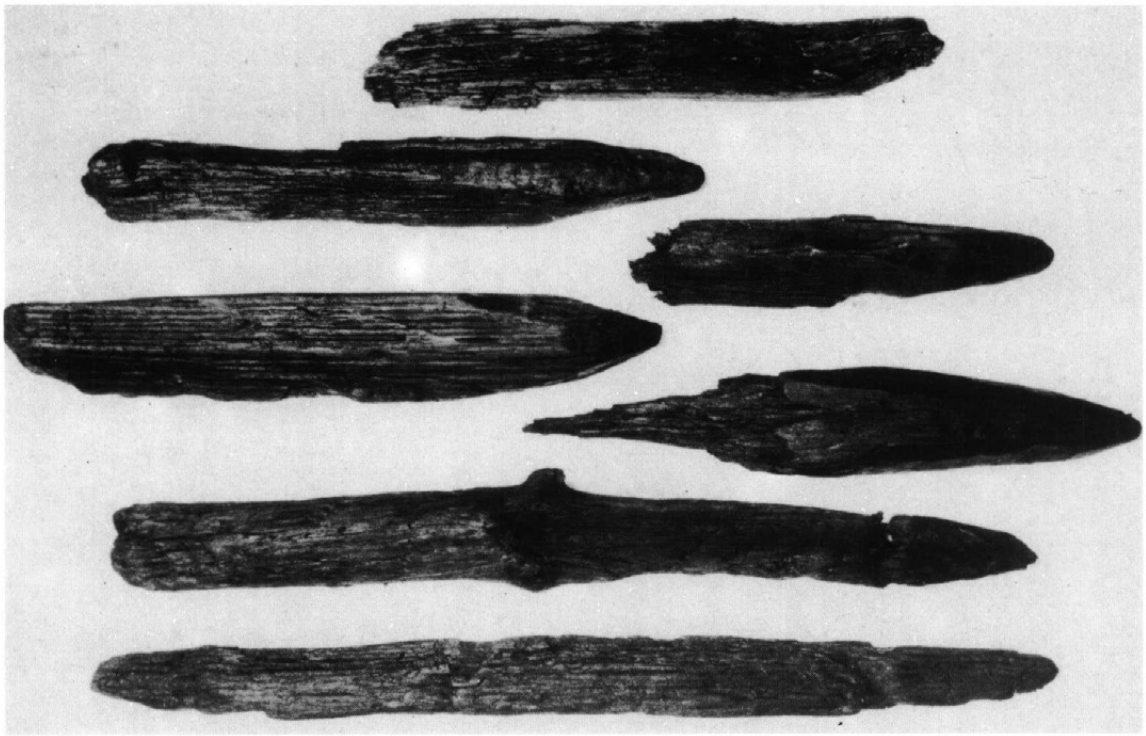


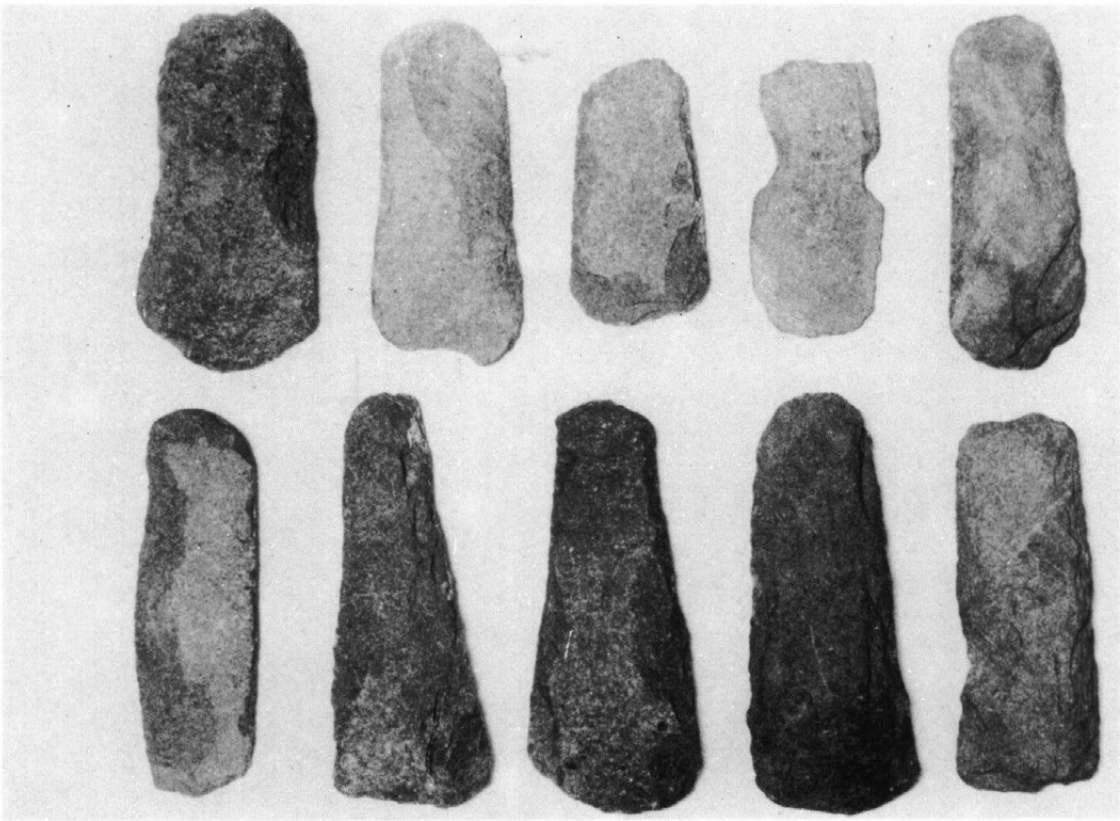
1.　杭列４・５・６の杭（唐木氏撮影）



2.　杭列７・８の杭（唐木氏撮影）

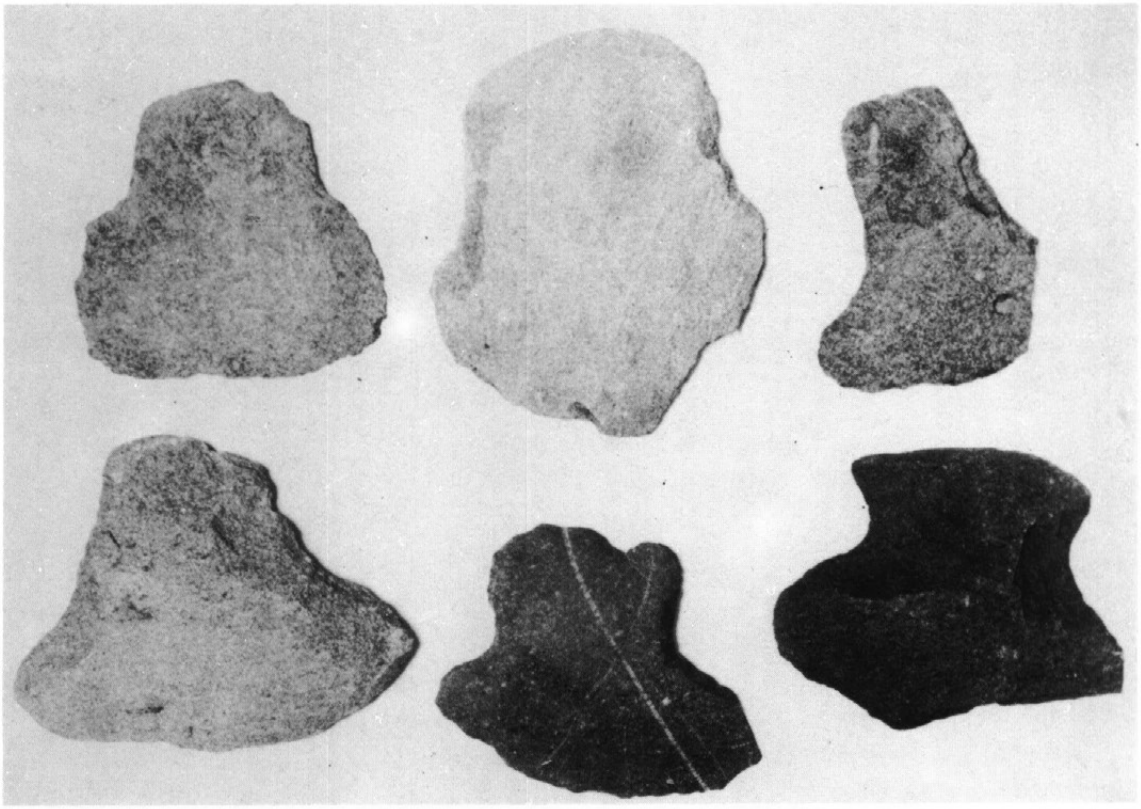
写図18　杭列８の杭と鍬形石器



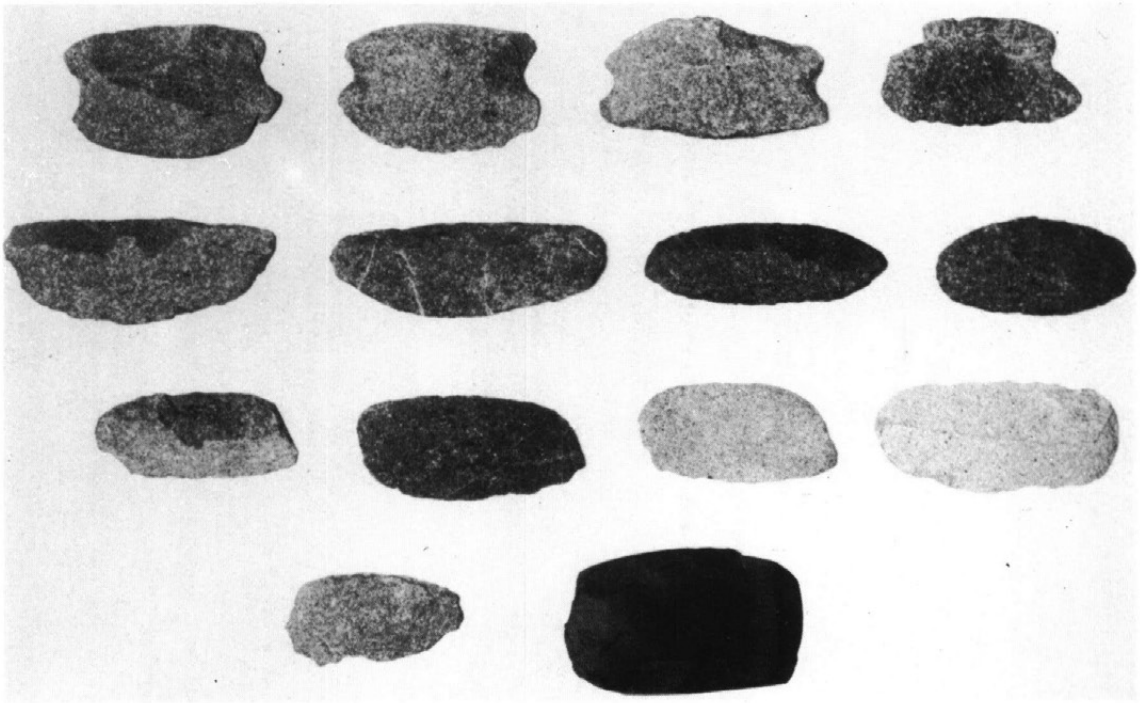


上　杭列８の太丸杭　下　鍬形石器（唐木氏撮影）

写図19　石　器

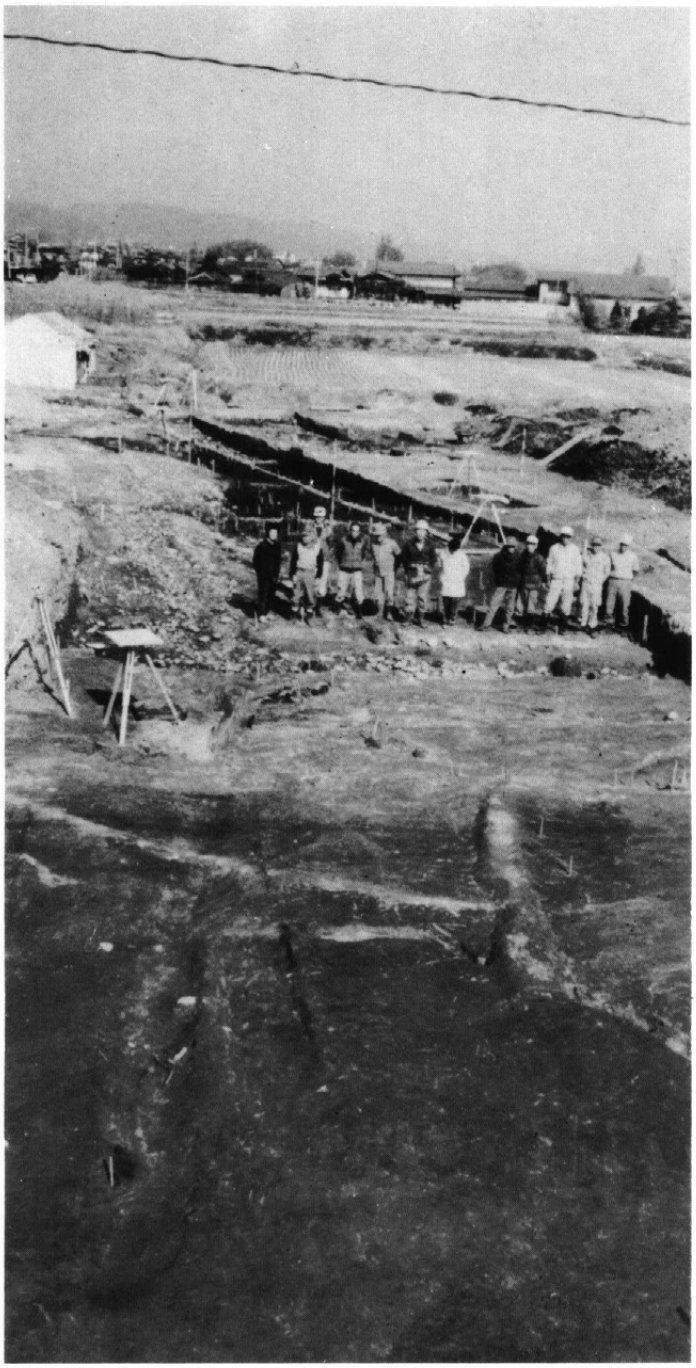


1.　扇状形石器（唐木氏撮影）



2.　石包丁形石器と扁平片刃石器（唐木氏撮影）

写図20　遺構全景と調査団



南条棚田遺跡Ⅱ

昭和62年3月

発　行　長野県下伊那郡上郷町産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印　刷　新　葉　社
飯田市常盤町飯田商工会館内